

博士論文

現代日本語における心理動詞の研究

名古屋大学大学院人文学研究科

人文学専攻

王 云姣

2023年3月

## 目次

<b>本論文における表記法</b> .....	<b>v</b>
<b>第一章 序論</b> .....	<b>1</b>
1.1 本研究の目的 .....	1
1.2 考察対象となる心理動詞 .....	3
1.3 本研究の構成 .....	5
<b>第二章 先行研究</b> .....	<b>9</b>
2.1 心理動詞の内部分類に関する研究 .....	9
2.1.1 工藤（1995）の研究.....	9
2.1.2 山岡（2000）の研究.....	13
2.1.3 吉永（2008）の研究.....	16
2.1.4 趙（2016）の研究.....	20
2.1.5 呉（2017）の研究.....	23
2.1.6 心理動詞の内部分類に関する先行研究のまとめ.....	27
2.2 心理動詞の位置付けに関する研究 .....	29
2.2.1 心理動詞は〈状態〉を表すとする立場.....	29
2.2.2 心理動詞は〈動き〉を表すとする立場.....	31
2.2.2.1 三原（2000）の研究.....	31
2.2.2.2 吉永（2008）の研究.....	35
2.2.2.3 仁田（2012）の研究.....	37
2.2.3 心理動詞は〈状態〉と〈動き〉の中間的存在であるとする立場.....	40
2.2.3.1 鈴木（1957）の研究.....	40
2.2.3.2 小竹（2011）の研究.....	41
2.2.3.3 工藤（1995）の研究.....	42
2.2.4 状態性の高いものから動作性の高いものまで様々なものがあるとする立場 .....	43

2.2.5	心理動詞の位置付けに関する先行研究のまとめ	45
2.3	心理動詞の自己制御性、即時性に関する研究	46
2.3.1	心理動詞の自己制御性に関する研究	46
2.3.1.1	森山（1988）の研究	46
2.3.1.2	仁田（1988, 1991, 2004）の研究	47
2.3.1.3	小竹（2011）の研究	48
2.3.2	心理動詞の即時性に関する研究	48
2.3.2.1	趙（2016）の研究	49
2.3.2.2	松野（2016）の研究	50
2.3.3	心理動詞の自己制御性、即時性に関する先行研究のまとめ	51
2.4	心理動詞の格に関する研究	52
2.4.1	寺村（1982）の研究	52
2.4.2	杉岡（1992）の研究	54
2.4.3	山梨（1993）の研究	55
2.4.4	Bando（1996）の研究	56
2.4.5	佐藤（1997）の研究	58
2.4.6	清水（2007, 2014）の研究	59
2.4.7	外崎（2013）の研究	62
2.4.8	大槻（2014）の研究	64
2.4.9	趙（2016）の研究	69
2.4.10	心理動詞の格に関する先行研究のまとめ	71
2.5	本研究の考察の立場	73
<b>第三章</b>	<b>心理動詞の7分類</b>	<b>75</b>
3.1	はじめに	75
3.2	本研究における心理動詞の分類	75
3.2.1	アクチュアル（個別時）な事態の場合	80
3.2.1.1	タイプⅠ	80
3.2.1.2	タイプⅡ	87
3.2.1.3	タイプⅢ	91

3.2.1.4	タイプⅣ	94
3.2.1.5	タイプⅤ	97
3.2.1.6	タイプⅥ	102
3.2.1.7	タイプⅦ	104
3.2.2	ポテンシャル（潜在時）な事態の場合	106
3.2.2.1	タイプⅠ～Ⅴ	107
3.2.2.2	タイプⅥ、タイプⅦ	108
3.3	本章のまとめ	110
<b>第四章</b>	<b>心理動詞の各タイプの自己制御性と即時性</b>	<b>114</b>
4.1	はじめに	114
4.2	心理動詞の各タイプの自己制御性と即時性	117
4.2.1	タイプⅠ	119
4.2.2	タイプⅡ	121
4.2.3	タイプⅢ	122
4.2.4	タイプⅣ	125
4.2.5	タイプⅤ	127
4.2.6	タイプⅥ	130
4.2.7	タイプⅦ	131
4.3	本章のまとめ	132
<b>第五章</b>	<b>心理動詞の構文的特徴について</b>	<b>134</b>
5.1	はじめに	134
5.2	心理動詞の格標示に関する考察	136
5.3	心理動詞の構文的特徴に関する考察	140
5.3.1	ヲ格をとるもの、ニ格をとるもの、ヲ／ニ格両用のものの場合	140
5.3.1.1	「ヲ（／ニ）格 対象型」	143
5.3.1.2	「（ヲ／）ニ格 原因型」	145
5.3.1.3	「（ヲ／）ニ格 対象＋原因型」	146
5.3.2	ガ格をとるものの場合	148

5.3.2.1 「痛む」類「ガ格 対象型」	148
5.3.2.2 「見える」類「ガ格 対象型」	149
5.3.2.3 「匂う」類「ガ格 対象型」	151
5.3.2.4 「スベスベする」類「ガ格 対象型」	152
5.3.3 ヲ／ガ格両用のもの、ヲ／ニ／ガ格をとるもの、ニ／ガ格両用のものの 場合	154
5.3.3.1 「ヲ／ガ格 対象型」	154
5.3.3.2 「飽きる」類「ニ／ガ格 対象+原因型」	156
5.3.3.3 「震える」類「ニ／ガ格 原因+対象型」	158
5.3.3.4 「疲れる」類「ニ／ガ格 原因+対象型」	160
5.3.3.5 「困る」類「(ヲ／) ニ／ガ格 原因+対象型」	162
5.3.4 本節のまとめ	163
5.4 本研究における心理動詞の7つのタイプの格助詞	166
<b>第六章 結論と今後の展望</b>	<b>169</b>
6.1 本研究のまとめと結論	169
6.2 今後の課題と展望	176
<b>参考文献</b>	<b>180</b>
<b>使用したコーパス</b>	<b>184</b>
<b>初出一覧</b>	<b>185</b>
<b>資料</b>	<b>186</b>

## 本論文における表記法

- (1) 引用例の出典は例文の後の（ ）内に示す。インターネットの検索エンジンで得た実例の場合はその URL 及び検索年月日を記す。例文の後に出典が示されていないものは、筆者による作例である。
- (2) 例文内の下線部は筆者によって付け加えたものである。
- (3) 例文判断が非文のものには「\*」で示し、不自然なものには「?」または「??」で示し、自然でありながら本文中で説明する解釈が成り立たないものには「#」で示す。また、「?」は少し不自然な場合、「??」はかなり不自然な場合を示す。
- (4) 例文番号、図表番号は各章ごとに通し番号を付す。
- (5) 注は各ページ末に記し、注番号は各章ごとに通し番号を付す。

## 第一章 序論

### 1.1 本研究の目的

本研究は、日本語の心理動詞について、テンス・アスペクト、人称制限、文の意味機能、自己制御性、即時性、構文的特徴などの観点から分類し、心理動詞の体系化を行うものである。

日本語の心理動詞には、「考える」「分かる」のように思考を表すもの、「喜ぶ」「迷う」のように感情を表すもの、「痛む」「疲れる」のように感覚を表すもの、「匂う」「スベスベする」のように知覚を表すものがある。これらの語は人間の内面にある心理活動や心理状態を表し、具象的に捉えにくい点で、「食べる」「言う」などの外面にある〈動き〉を表す動詞や、「ある」「聳える」などの外面にある〈状態〉を表す動詞とは異なる。そのため、従来の研究では心理動詞は〈動き〉を表すものか、〈状態〉を表すものかで見解が分かれている。本研究では心理動詞を均質な一つの 카테고리ではなく、動作性が高いものから状態性が高いものまで連続しているバリエーションとして捉え、同じ心理動詞といっても、様々な特徴の違いがあることを主張する。

例えば、テンス・アスペクトの観点から見ると、「考える」と「分かる」は同じ思考を表すものであり、(1-1a) のようにいずれも外的運動動詞の「言う」と違い、スル形で話し手の現在の思考を表すことができる。しかし、(1-1b) のように「考える」は外的運動動詞の「言う」と同様に、スル形で話し手の未来の思考を表すのに対し、「分かる」はスル形で話し手の未来の思考を表すことができないという違いがある。

(1-1) a. この話は本当だと {#言う<sup>1</sup>/考える/分かる}。(現在)

b. 後で {言う/考える/#分かる<sup>2</sup>}。(未来)

<sup>1</sup> 「言う」は、スル形で未来を表し、シテイル形で現在を表す。

<sup>2</sup> 「分かる」は、スル形で未来を表すのは三人称の場合であり、一人称の場合は「分かるだろう」のように言う必要がある。

また、即時性の観点から見ると、「言う」と「考える」は (1-2a) や (1-2b) のように、即時的に表出されないのに対し、「分かる」は (1-2c) のように即時的に表出されるという違いがある。

- (1-2) a. (思わず)「ああ、{\*言う／#言った<sup>3</sup>}」と叫んだ。  
 b. (思わず)「ああ、{\*考える／#考えた}」と叫んだ。  
 c. (思わず)「ああ、{分かる／分かった}」と叫んだ。

さらに、格助詞の観点から見ると、「言う」と「考える」は (1-3a) や (1-3b) のようにヲ格をとるのに対し、「分かる」は (1-3c) のようにガ格をとるのが一般的であり<sup>4</sup>、経験者にニ格がくることもあるという違いがある。

- (1-3) a. 花子は自分の意見を言った。  
 b. 花子は答えを考えた。  
 c. 花子 (に) は答えが分かった。

以上のように、「考える」は一般に同じ思考動詞とされている「分かる」より外的運動動詞の「言う」と同じ性質を示すことが分かる。

また、「喜ぶ」「迷う」「弱る」は一般に同じ感情動詞とされているが、即時性及びテンスの点において (1-4) のように違いがある。

- (1-4) a. ああ、{\*喜ぶ／\*喜んだ}。  
 b. ああ、{\*迷う／\*迷った}。  
 c. ああ、{\*弱る／弱った}。

<sup>3</sup> 「ああ、言った!」は前に言ったことを思い出す〈想起〉として使われており、即時的に自分の行為や心理を吐露するという〈表出〉を表してはいない。「ああ、考えた」も同様である。

<sup>4</sup> 『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』には、以下のようにヲ格をとる「分かる」の用例もあるが、割合的には低い。

(1-i) その大変さをわかってあえてやっていることが、信頼感を与えます。  
 (『ぼくらのいえができるまで』川上夏子)



同様に、「(頬が) 火照る」「(目が) クラクラする」「(腹が) 減る」は一般に同じ感覚動詞とされているが、即時性及びテンスの点において (1-5) のように違いがある。

- (1-5) a. ああ、{\*頬が火照る／\*頬が火照った}。
- b. ああ、{\*目がクラクラする／\*目がクラクラした}。
- c. ああ、{\*腹が減る／腹が減った}。

そこで、本研究ではテンス・アスペクト、人称制限、自己制御性・即時性、格と構文の特徴などの観点から心理動詞のタイプの違いを考察し、心理動詞には次の図 1-1 のようにタイプ I～VII の 7 つがあることを主張する。

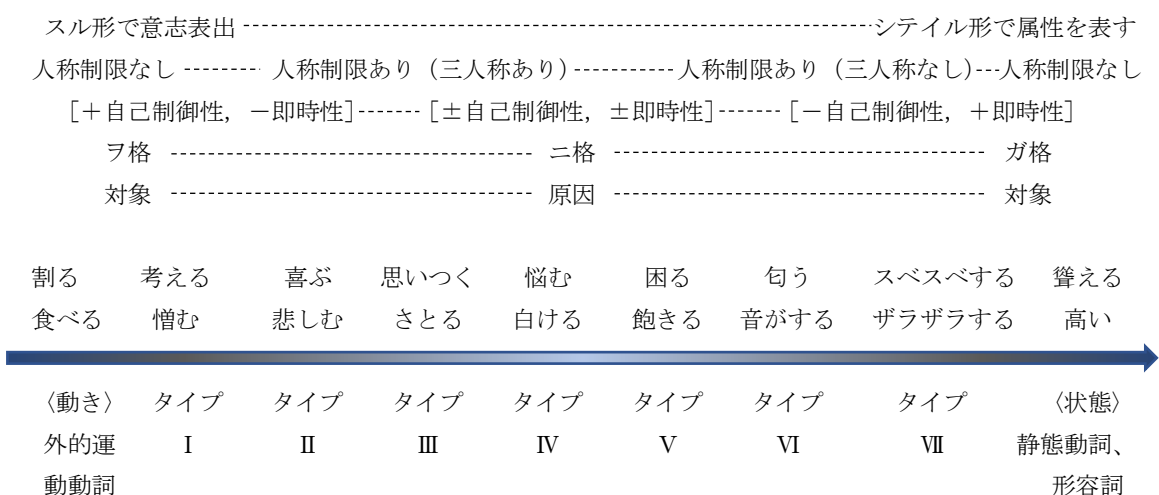


図 1-1 本研究における心理動詞の分類と位置付け

## 1.2 考察対象となる心理動詞

「心理動詞」は、「内的情態動詞」「感情動詞」など研究者によって名づけが異なり、対象とする範囲も少しずつ異なるが、本研究では「心理動詞」と呼び、思考・感情・感覚・知覚など人間の内的精神活動を表すものを指す。具体的な対象語は以下の作業を経て得られたものである。

まず、工藤（1995:76-77）で挙げられた「内的情態動詞」（本研究の「心理動詞」に相当する）60語と、山岡（2000:189-204）で挙げられた「感情動詞」（本研究の「心理動詞」に相当する）167語を抽出し、重なった語を1語とし、合計187語を得た。このうち、本研究では心理動詞の対象／原因にとる格助詞（「私はあなたを恨む」や「寝付かない息子に困る」など）についても考察するため、格助詞との関係が見えにくい次のi～iiiの語を除外する。

- i. コーパス（『現代日本語書き言葉均衡コーパス』BCCWJ）において、対象／原因にとる格助詞が現れる用例が4例以下のもの<sup>5</sup>

語例：察しがつく、清々する、サッパリする、ベタベタするなど

- ii. 経験者のみが存在し、対象／原因に格をとらないもの

語例：感じがする、気がする、気持ちがある、心配がある、予感がする、頭痛がある、悪寒がある、動悸がある、吐き気がする、耳鳴りがある、胸騒ぎがある、目まいがある

(1-6) (私は) 何か嫌な予感がする。

- iii. 対象／原因にヲ格またはニ格をとる場合、直接受身化も交替使役化もできないもの<sup>6</sup>

語例：興味がある、関心がある

(1-7) a. 私はあの人に興味があった。

b. \*あの方は私に興味があられた。

c. \*あの方は私 {を／に} 興味があらせた。

このように、上の3つの場合を排除した結果、合計123語を考察対象語として抽出した。これを(1-8)に示す。

<sup>5</sup> 対象にとる格助詞が現れる用例数が少ないと、その心理動詞の対象に1つの格助詞しかとれないか、それとも2つの格助詞のどちらでもとれるか、とる格助詞の状況が把握しにくいためである。

<sup>6</sup> 本研究では対象にヲ格またはニ格をとる心理動詞の場合、そのヲ格またはニ格の意味役割（〈対象〉か〈原因〉）を直接受身化と交替使役化で判断するため、両者ともにできないものを排除する。詳しくは第五章を参照。

(1-8) 祈る、疑う、思う、思いつく、確信する、考える、気がつく、期待する、希望する、見当がつく、察する、信じる、信用する、推察する、推測する、判断する、願う、望む、ひらめく、分かる、(と／ように) 見る、あきあきする、諦める、飽きる、呆れる、懂れる、焦る、頭に来る、安心する、怒りを覚える、いやになる、イライラする、ウキウキする、恨む、ウンザリする、怒る、恐れる、驚く、ガッカリする、感謝する、感心する、感動する、気になる、緊張する、クラクラする、苦しむ、敬服する、軽蔑する、幻滅する、後悔する、困る、懲りる、さとる、嫉妬する、痺れる、白ける、焦れる、癩に障る、心配する、ゾクゾクする、ゾットする、尊敬する、退屈する、疲れる、照れる、同意する、同情する、ドキドキする、悩む、憎む、恥じる、ハラハラする、反省する、ビックリする、評価する、ホットする、まいる、迷う、むかつく、めげる、喜ぶ、弱る、ワクワクする、痛む、うずく、ガクガクする、(のどが) 渴く、キリキリする、くたびれる、くらむ、凝る、ズキズキする、(お腹が) 空く、チカチカする、チクチクする、(足が) つる、ヒリヒリする、震える、(腹が) 減る、火照る、ムカムカする、ムズムズする、(胃が) もたれる、ショボショボする、カサカサする、音がする、香りがする、感じる、聞こえる、声がする、ザラザラする、スベスベする、ツルツルする、匂う、ヌルヌルする、ネバネバする、鼻につく、鼻をつく、プンプンする、ベトベトする、見える、ムンムンする、目につく

### 1.3 本研究の構成

以上第一章では、本研究の目的を提示した上で、本研究の課題と考察対象を提示した。以下、本研究の構成は次の通りである。

第二章では、日本語の心理動詞に関する先行研究を概観し、その問題点を指摘する。その結果、本研究ではテンス・アスペクト、人称制限、文の意味機能の観点から心理動詞を分類することを主張し、心理動詞には動作性が高いものから状態性が高いものまで様々のものがあるとする立場を示した。

第三章では、テンス・アスペクト、人称制限、文の意味機能の観点から日本語の心

理動詞を7つに分類し、各タイプがそれぞれ表 1-1 のような特徴を持つことを指摘する。

表 1-1 本研究における心理動詞のテンス・アスペクト的特徴による分類

タイプ	分類指標 語例・語数	アクチュアル(個別時)な事態					ポテンシャル (潜在時)な事態		
		一人称			三人称			スル	シテイル
		スル	シタ	シテイル/ シテイタ	スル	シタ	シテイル/ シテイタ		
I	考える、恨む等 (28)	①意志表出 (T:未来 A:全一性/発生性) ②心理表出 (T:現在 A:全一性/発生性)	確認・記述 (T:過去 A:全一性/発生性)	確認・記述 (T:現在/過去 A:進行の継続性)	予測 (T:未来 A:全一性/ 発生性)	×	確認・記述 (T:現在/過去 A:進行の継続性)	確認・記述 (主に経験者 の属性)	
II	喜ぶ、恐れる等 (6)	予測 (T:未来 A:全一性/発生性)	①確認・記述 (T:過去 A:全一性/発生性) ②心理表出 (T:現在 A:パーフェクト性)	確認・記述 (T:現在/過去 A:結果の継続性)			確認・記述 (T:現在/過去 A:結果の継続性)		
III	ひらめく、思いつく等 (4)						確認・記述 (T:現在/過去 A:結果の継続性)		確認・記述 (主に対象/ 経験者の 属性)
IV	悩む、痛む等 (36)	確認・記述 (T:過去 A:全一性/発生性)	確認・記述 (T:現在/過去 A:進行の継続性)	確認・記述 (T:現在/過去 A:進行の継続性)					
V	分かる、驚く等 (36)	①予測 (T:未来 A:全一性/発生性) ②心理表出 (T:現在 A:全一性/発生性)	①確認・記述 (T:過去 A:全一性/発生性) ②心理表出 (T:現在 A:パーフェクト性)	確認・記述 (T:現在/過去 A:結果の継続性)			確認・記述 (T:現在/過去 A:結果の継続性)		
VI	音がする等 (7)	確認・記述 (T:過去 A:全一性/発生性)	確認・記述 (T:現在/過去 A:進行の継続性)	×			確認・記述 (対象の 属性)		
VII	ザラザラする等 (6)							確認・記述 (対象の 属性)	

第四章では、第三章で分類した心理動詞の7つのタイプにおける自己制御性と即時性について考察し、タイプⅠ～Ⅶにおける自己制御性は順に相対的に低くなるのに対し、即時性は順に相対的に高くなるという傾向が見られることを指摘する。即ち、タイプⅠ～Ⅶは順に動作性が高いものから状態性が高いものまで分布しており、タイプⅠの心理動詞は「食べる」などの外的運動動詞と近く、タイプⅦの心理動詞は「嬉しい」「悲しい」などの〈状態〉を表す形容詞と近いことを指摘する。

第五章では、心理動詞の格と構文的特徴について考察し、格標示について、心理動詞の7つのタイプは格標示に違いがあり、タイプⅠからタイプⅦに向かうにつれて対象／原因の格標示が「ヲ格→ニ格→ガ格」へと移行していることを指摘する。

最後に第六章で本研究の成果についてまとめ、残された課題について述べる。

## 第二章 先行研究

本章では日本語の心理動詞に関する先行研究を概観し、その問題点を指摘し、本研究の立場を示す。日本語の心理動詞に関する先行研究は大きく分けて、心理動詞の内部分類に関するもの、心理動詞の位置付けに関するもの、心理動詞の自己制御性、即時性に関するもの、心理動詞の格に関するものの4つがある。以下、これらについて、2.1節から2.4節で順に述べ、最後に2.5節で本研究の立場について論じる。

### 2.1 心理動詞の内部分類に関する研究

まず、心理動詞の内部分類に関する先行研究を見る。これには工藤（1995）、山岡（2000）、吉永（2008）、趙（2016）、呉（2017）などがある。以下、これらについて順に見ていく。

#### 2.1.1 工藤（1995）の研究

工藤（1995）は日本語の動詞を外的運動動詞（「走る」「食べる」など）、内的情態動詞（「考える」「喜ぶ」など）と静態動詞（「ある」「似合う」など）の3つに分けた上で、このうちの内的情態動詞を意味によって思考動詞、感情動詞、感覚動詞、知覚動詞の4つに分けている。工藤（1995）で挙げられた語例は次のようである。

##### ・思考動詞

おもう、かんがえる、うたがう、しんじる、わかる、さっする、いのる、きたいする、ねがう、のぞむ

##### ・感情動詞

あきらめる、あこがれる、いらいらする、うらむ、うんざりする、おそれる、かんしやる、かんしんする、かんどうする、きになる、くるしむ、けいふくする、けいべつする、こうかいする、しっとする、しんぱいする、どうじょうする、なやむ、にくむ、はらがたつ、はらはらする、はんせいする、まよう、めいる、よろこぶ

## ・感覚動詞

いたむ、うずく、かんじる、くらくらする、(めが)くらむ、つかれる、づつうがする、  
 ときどきする、ふるえる、ほてる、むかむかする、(いが)もたれる、しびれる、つか  
 れる、(のどが)かわく、(はらが)へる

## ・知覚動詞

あじがする、おとがする、かんじる、きこえる、ざらざらする、つるつるする、にお  
 う、ぬるぬるする、みえる

(工藤 1995 : 76-77)

次に、心理動詞全般のテンス・アスペクトについて、工藤 (1995) は、心理動詞の  
 スル形の場合は (2-1) のように人称制限があり、三人称には基本的に使えないと述  
 べている。すなわち、「思う」を例にとると、一人称の場合は (2-1a) のようにスル形  
 の「思う」が使えるのに対し、三人称の場合は (2-1b) のようにシテイル形の「思っ  
 ている」にしなければならず、「父は死ぬと思うわ」のようにスル形にすると、「思う」  
 のは父ではなく一人称の話し手ということになる。

(2-1) a. わたし、父は死ぬと思うわ。

b. 父は、死ぬと思っているわ。

(工藤 1995 : 70)

また、スル形は次の (A1) のように発話現在時を表す能動的な〈態度表明文〉にな  
 る場合もあれば、(A2) のように受動的な〈感情・感覚表出文〉になる場合もあると述  
 べている。

(A1) 〈(能動的) 態度表明性／現在〉

(2-2) 「試験も1つの目標として、あつていいと、僕は考えるな」

(2-3) 「もちろん、信じます」

(A2) 〈(受動的) 表出性／現在〉

(2-4) 「お前の馬鹿にも呆れるね」

(2-5) 「イサノ、水をくれ。喉がやたらと渴く」



(工藤 1995 : 91)

次に、シタ形の場合はスル形と同様に一人称に限定されると述べている。例えば、一人称の場合は(2-6a)のようにシタ形で過去を表すことができるのに対し、三人称の場合は(2-6b)のようにシタ形で過去を表すことができず、(2-6c)のようにシテイタ形で表さなければならないとしている。

(2-6) a. わたし、あの時は、驚きました。(工藤 1995 : 70)

b. \*あの時は、先生も、驚きました。

c. あの時は、先生も、驚いていました。(工藤 1995 : 70)

また、シタ形の場合は(B1)のように過去を表す〈確認・記述文〉の場合と、(B2)のように現在を表す〈表出文〉の場合があると述べている。

(B1) 〈直接経験の確認・記述／過去〉

(2-7) 「のんきだねえ。東京へ飛び出して、ずいぶん心配したよ」

(2-8) 「あとで迷惑をかけたのではないかと後悔しました」

(B2) 〈表出性／現在〉(一語文的)

(2-9) 「まあ、呆れた！よくそんな勝手なことが言えるわね」

(2-10) 「喉が渴いたわ。食堂車で何か冷たいものでも飲みましょうよ」

(工藤 1995 : 92)

最後に、シテイル／シテイタ形の場合は、(2-11)～(2-14)のように人称から解放された〈確認・記述文〉となっていると述べている。

(C1) 〈確認・記述文〉

〈一人称〉

(2-11) 「わたし、疲れてます。もう、そろそろ休ませて戴くわ」

(2-12) 「ええ、あの時は、旧式な結婚をけいべつしていました。そして、なにかも  
っといいものがあつたら、思っていました」

〈二・三人称〉

(2-13) 「いつ帰った?」「昨夜です」「ひどく疲れてるな」

(2-14) 「どうしたの?越した先がわからなくて、連絡も出来ないって、佐山先生の  
奥さんが心配してらしたよ」

(工藤 1995 : 92)

以上の工藤 (1995) の説明をまとめると、表 2-1 のようになる。

表 2-1 工藤 (1995 : 93) における心理動詞のテンス・アスペクトに関する考察

スル	〈全一性〉 〈発生性〉	一人称	態度表明／感情・感覚表出〈現在〉
シタ			体験的確認・記述〈過去〉 感情・感覚表出〈現在〉
シテイル シテイタ	〈継続性〉	一・二・三人称	(客観的) 確認・記述

さらに、工藤 (1995) は心理動詞のテンス・アスペクトと文の意味機能による分類にも触れている。先述したように、工藤 (1995) では (B1) のように過去を表す〈確認・記述文〉の場合と、(B2) のように現在を表す〈表出文〉の場合があると述べている。これを基準にして、工藤 (1995) は「心配する」「後悔する」のようにシタ形で過去を表すものと、「呆れる」「渴く」のようにシタ形で現在を表し得るものに分けている。例えば、(2-15) の「心配した」は話し手の過去の感情を表すのに対し、(2-17) の「呆れた」は話し手の発話時現在の感情を直接表出している。(2-16) の「思った」と (2-18) の「渴いた」も同様である。

(B1) 〈直接経験の確認・記述／過去〉

(2-15) 「のんきだねえ。東京へ飛び出して、ずいぶん心配したよ」

(2-16) 「まあ、正直なところ、つくづく、大学の先生って、お気の毒だと思ったわね」

(B2) 〈表出性／現在〉 (一語文的)

(2-17) 「まあ、呆れた！よくそんな勝手なことが言えるわね」

(2-18) 「喉が渴いたわ。食堂車で何か冷たいものでも飲みましょうよ」

(工藤 1995 : 92)

しかし、工藤（1995）の分類には見逃されている部分があると思われる。例えば、工藤（1995）は「軽蔑する」「悩む」などの感情動詞と、「心配する」「喜ぶ」などの感情動詞を同じル形で能動的な〈態度表明文〉または受動的な〈感情・感覚表出文〉を表すカテゴリーに入れているが、(2-19)のように「軽蔑する」はスル形で〈態度表明文〉を表すのに対し、「心配する」はスル形で〈態度表明文〉を表すことができない。また、(2-20)のように「悩む」はスル形で〈感情表出文〉を表すのに対し、「喜ぶ」はスル形で〈感情表出文〉を表すことができない。このように、スル形の振る舞いを考慮するなら、工藤（1995）の感情動詞には異なる性質のものが混じっているとと言える。

(2-19) (目の前の相手に対して) 「あなたのことを {軽蔑します／\*心配します}」

(2-20) 「ああ、{悩む／\*喜ぶ}」

### 2.1.2 山岡（2000）の研究

次に、山岡（2000）は3つの文法性判断テストにおいて心理動詞を思考動詞、情意動詞、感覚動詞、知覚動詞の4つに分けている。この分類はまず、程度副詞「たいへん、かなり、非常に」などによって修飾されることができかどうかで心理動詞を二分している。このうち、程度副詞「たいへん、かなり、非常に」などによって修飾されるものは感覚動詞（「疲れる」など）と情意動詞（「困る」など）であり、修飾されないものは思考動詞（「考える」など）と知覚動詞（「心配がする」など）であるとしている。例えば、(2-21)のように感覚動詞「疲れる」と情意動詞「困る」は程度副詞「非常に」に修飾されるのに対し、(2-22)のように思考動詞「考える」と知覚動詞「音がする」は程度副詞「非常に」に修飾されない。

(2-21) a. 非常に疲れた。(感覚動詞)

b. 非常に困った。(情意動詞)

(2-22) a. \* (この数学問題を) 非常に考えた。(思考動詞)

b. \*非常に気配がした。(知覚動詞)

次に、程度副詞が修飾可能なもののうち、(2-23) のように身体部位がガ格名詞句であるものを感覚動詞としており、(2-24) のように身体部位がガ格名詞句にならないものを情意動詞としている。

(2-23) {体/目/腕/足} が疲れる。(感覚動詞)

(2-24) {\*体/\*目/\*腕/\*足} が困る。(情意動詞)

一方、程度副詞で修飾できないもののうち、(2-25) のように補文(引用節)を承けることができるものを思考動詞とし、(2-26) のようにできないものを知覚動詞としている。

(2-25) この提案が一番ふさわしいと考える。

(2-26) \*誰かいると気配がする。

以上の思考動詞、情意動詞、感覚動詞、知覚動詞の分類を図示すると図 2-1 のようになる。

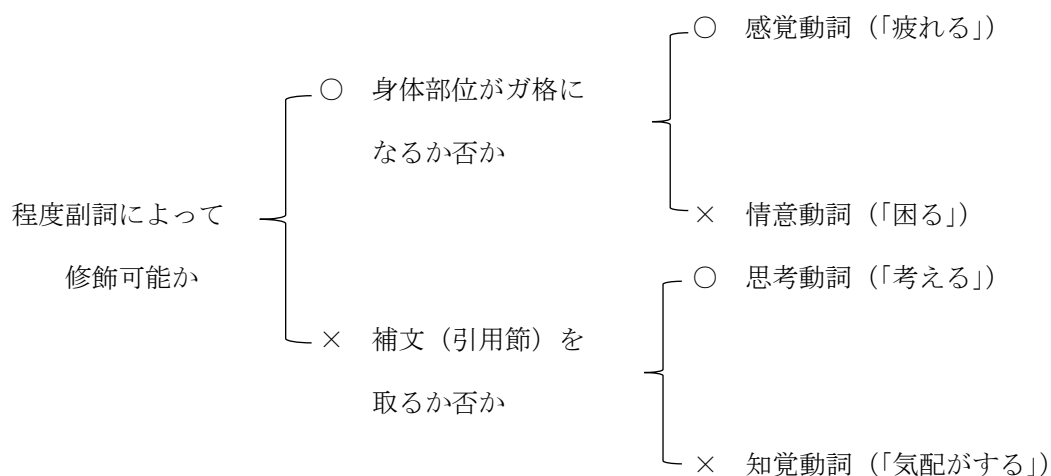


図 2-1 山岡(2000)における心理動詞の意味特徴による分類

また、山岡（2000）はテンス・アスペクトと文の意味機能という観点からも考察しており、感情動詞（本稿の「心理動詞」に相当する）を感情表出動詞、感情変化動詞、感情描写動詞の3つに分けている。これらの違いをまとめると、次のとおりである。

A 感情表出動詞—スル形で感情表出を表す動詞

腹が立つ、憧れる、めいるなど

〈感情表出〉：話者が発話時の自らの感情を表出する文機能

B 感情変化動詞—シタ形で感情表出を表す動詞

ホッとする、驚く、疲れるなど

〈感情表出〉：同上

C 感情描写動詞—スル形でもシタ形でも感情表出を表さない動詞

怒る、嫌うなど

〈感情描写〉：感情の動きを客観的に描写するという文機能

例えば、(2-27)のように「いらいらする」はスル形で話し手が自らの感情を吐露することを表すため、「感情表出動詞」とされているのに対し、(2-28)のように「ホッとする」はシタ形で話し手の感情の吐露を表すため、「感情変化動詞」とされている。

(2-27) 「あいつの貧乏ゆすりにはいらいらする」

（『大江戸犯科帖—時代推理小説名作選』結城昌治）

(2-28) 「思ったより元気そうね。ホッとしたわ」（女社長）（山岡 2000 : 199）

一方、(2-29b)の「苛立つ」は(2-29a)の「感情表出動詞」である「いらいらする」と違い、話し手が自らの感情を吐露することを表さないため、「感情描写動詞」とされている。

(2-29) a. ああ、いらいらする。

b. \*ああ、苛立つ。

（山岡 2000 : 182）

山岡（2000）はこの三分類と意味特徴による四分類を組み合わせ、表 2-2 のようにまとめている。

表 2-2 山岡（2000）における心理動詞の分類

感情動詞	1 思考	2 情意	3 感覚	4 知覚
<b>A 感情表出動詞</b>	A1 思考表出 ～ト／ク思う	A2 情意表出 困る	A3 感覚表出 胃ガ痛む	A4 知覚表出 見える
<b>B 感情変化動詞</b>	B1 思考変化 ひらめく	B2 情意変化 あきれる	B3 感覚変化 肩が凝る	
<b>C 感情描写動詞</b>	C1 思考描写 ～ヲ思う	C2 情意描写 怒る	C3 感覚描写 顔がほてる	C4 知覚描写 見る

（表 2-2 は山岡（2000：178）の表 1 を修正したものである。）

このように、山岡（2000）は工藤（1995）を踏まえた上で、心理動詞はスル形で〈感情表出文〉を表すか否かについても考察している。しかし、山岡（2000）は表 2-2 の分類以外に、「音がする」「声がする」「ゴワゴワする」「ザラザラする」などの動詞を「〈演述系〉の知覚状態動詞文」と呼び、同じカテゴリーに入れているが、シテイル形の場合を考えると、「音がしている」「声がしている」は話し手の知覚を表すのに対し、「ゴワゴワしている」「ザラザラしている」は対象の属性を表し、ポテンシャル（潜在時）な事態<sup>7</sup>を表すため、両者は分けて考える必要がある。

### 2.1.3 吉永（2008）の研究

次に、吉永（2008：87）は以下のように説明を付け加えた上で、心理動詞を感情的心理動詞、知覚感覚的心理動詞、思考認識的心理動詞の 3 つに分けている。

①感情的心理動詞—悩む、困る、あきれる、あせる、悲しむ

〈感情〉…色々な精神状態、心理的作用（喜怒哀楽、好き嫌い、高揚・落胆など）

②知覚感覚的心理動詞—痛む、痺れる、震える、音がする

<sup>7</sup> ポテンシャル（潜在時）な事態とは、時間の特定性が捨象され、その主体が潜在的にその動作・状態を持っていることを意味する事態のことである。詳しくは第三章を参照。

〈知覚感覚〉…感覚器官からの刺激により感知される神経作用、具体的

③思考認識的心理動詞—思う、考える、信じる、分かる、ひらめく、忘れる

〈思考認識〉…知的な精神活動、目的を伴うことが多く、能動的、意志的

また、吉永（2008）は先の意味特徴による分類とは別に、持続性と他動性を基準として心理動詞を「A. 驚く型」、「B. 悩む型」、「C. 信じる型」の3つにも分類している。このうち、「A. 驚く型」、「B. 悩む型」は自動詞であり、「C. 信じる型」は他動詞であると述べており、また、「A. 驚く型」は比較的短期の、「B. 悩む型」は比較的長期の心理動作を表すものであり、「C. 信じる型」には両方が含まれていると述べている。これを表2-3に示す。

表2-3 吉永（2008）における持続性と他動性による心理動詞の分類

	自動詞	他動詞
比較的短期	A. 驚く、まいる、あがる、困る、満足する、のぼせる、怯える、白ける、ひるむ、滅入る、懲りる、怒る、逆上する、激怒する、感動する、失望する、落胆する、気落ちする、挫折する、驚愕する、仰天する、安心する、パニックる、キレる、気が変わる、心を決める、根負けする、傷つく、つむじを曲げる、かっかする、むっとする、びっくりする、がっかりする、どきっとする、ほろりとする、がっかりくる、ひやっとする	C. 信じる、愛する、ほれる、考える、楽しむ、喜ぶ、願う、諦める、恐れる、疑う、たくらむ、慕う、嫌う、好む、飽きる、呆れる、偲ぶ、認める、念じる、覚える、忘れる、悲しむ、のろう、ひがむ、恨む、憎む、こらえる、祈る、ねたむ、案じる、気にする、心配する、後悔する、回想する、反省する、感心する、尊敬する、同情する、共感する、決心する、我慢する、覚悟する、期待する、認識する、納得する、判断する、誤解する、理解する、想像する、信用する、失念する、(を) 思う
比較的長期	B. 悩む、苦しむ、迷う、耐える、こだわる、のんびりする、思いにふける、思いをめぐらせる、注意する、集中する、精神統一する、沈黙考する、瞑想する、気になる、気をもむ、胸がさわぐ、心を配る、気を配る、注意を払う、痺れる、震える、イライラする、ハラハラする、ワクワクする、ジンジンする、うっとりする、やきもきする、くさくさする、くよくよする、うきうきする、びくびくする、ぞくぞくする、くらくらする、むかむかする、ずきずきする、むずむずする、ぐったりする、ボーッとする、悲しみにくれる、思いにひたる、感情におぼれる、リラックスする	

吉永（2008）は、次の(2-30)～(2-33)のように「A. 驚く型」は継続性を表す「長い間」などの時間副詞と共起しにくく、「瞬間」などの短時性を表す語と共起しやすい

いのに対し、「B. 悩む型」は継続性を表す「長い間」などの時間副詞と共起しやすく、「瞬間」などの短時性を表す語と共起しにくいと指摘している。

- (2-30) \*長い間驚いている／まいっている／しらけている／あがっている／根負けしている／激怒している／逆上している／腹をたてている／失望している／落胆している／驚愕している／仰天している／ほっとしている／頭にきている／がっかりしている／のぼせている／気落ちしている／気が変わっている
- (2-31) 驚いた／ひるんだ／仰天した／落胆した／驚愕した／仰天した／ほっとした瞬間
- (2-32) 長い間悩んでいる／苦しんでいる／耐えている／こだわっている／気になっている／イライラしている／くよくよしている／やきもきしている／のんびりしている
- (2-33) \*悩んだ／苦しんだ／耐えた／くよくよした瞬間

(吉永 2008 : 105-109)

また、吉永 (2008) は「C. 信じる型」の場合、次の (2-34) (2-35) のように継続性を表す「長い間」などの時間副詞と共起しにくく、「瞬間」などの短時性を表す語と共起しやすいものもあれば、(2-36) (2-37) のように継続性を表す「長い間」などの時間副詞と共起しやすく、「瞬間」などの短時性を表す語と共起しにくいものもあると指摘している。

- (2-34) \*長い間あきらめている／あきれている／ほれている／飽きている／感心している／実感している／決心している／わかっている／察している／忘れている／決意している／覚悟している／把握している／納得している／認識している／認知している／観念している／判断している／失念している／思いついている／心を決めている
- (2-35) あきらめた／実感した／認知した／察した／決心した／納得した／思いついた瞬間
- (2-36) 長い間心配している／愛している／案じている／こらえている／妬んで



いる／慕っている／悔やんでいる／恨んでいる／のろっている／憎んでいる／嫌っている／蔑んでいる／楽しんでいる／後悔している／同情している

(2-37) \*～を心配した／こらえた／楽しんだ／悲しんだ瞬間

(吉永 2008 : 109-111)

このように吉永 (2008) は心理動詞を持続性と他動性の観点から三分類している。しかし、分類の基準としている持続性と他動性には問題がある。まず、持続性について、吉永 (2008) は期間副詞「長い間」、短時性を表す「瞬間」と共起できるかどうかで持続性を判断しているが、揺れがある場合が多いと思われる。例えば、吉永 (2008) は「怒る」を「A. 驚く型」に入れているが、(2-38) のように持続性が強い場合もあれば、(2-39) のように弱い場合もある。

(2-38) 先週の太郎の失礼な言動に、花子はまだずっと怒っている。(「持続性」強)

(2-39) 彼は怒った瞬間、すぐ顔が赤くなるからわかりやすい。(「持続性」弱)

(吉永 2008 : 105-106)

また、筆者が一部の心理動詞と「瞬間」との共起性について母語話者 27 人にアンケート調査を行った結果、吉永 (2008) の分類とのずれが見られた。例えば、吉永 (2008) では持続性が弱いとされている「めげる」の場合は、27 人のうち、「瞬間」と共起できるとする人は 14 人であり、63%を占めているのに対し、持続性が強いとされている「イライラする」の場合は、27 人のうち、「瞬間」と共起できるとする人は 20 人であり、74%を占めている。このように、「長い間」や「瞬間」との共起で持続性を判断するのはゆれがあると思われる。

また、吉永 (2008) は心理動詞の分類の基準としている他動性について、「一般的に考えられている対象格「～を」を取るものが中心であるが、動作対象の「～に」を取るものも他動詞と見なす」(p. 98) と述べているのみである。例えば、(2-40) のように「ガッカリする」は二格をとるが、直接受身になることから、二格名詞句の「太郎」が「ガッカリする」の対象と考えられ、「ガッカリする」は他動性を持つと考えられる。しかし、吉永 (2008) は「ガッカリする」はヲ格をとらないため、他動性のない

「A. 驚く型」に入れている。

- (2-40) a. 花子は太郎にガッカリした。  
b. 太郎は花子にガッカリされた。

このように、吉永（2008）の持続性と他動性による分類には問題が見られる。

#### 2.1.4 趙（2016）の研究

趙（2016）はテンス・アスペクト、人称制限、文の意味機能の観点から心理動詞を5つに分けている。これを表2-4に示す。

表 2-4 趙 (2016) における心理動詞の分類

人稱+テンス・ アスペクト  動詞例	一人称			三人称	
	スル形	シタ形	シテイル・ シテイタ形	スル・ シタ形	シテイル・ シテイタ形
感謝する、祈る、願う、 恨む、憎む、軽蔑する、 憧れる、同情する等	働きかけの意志表出 <sup>8</sup> ; 態度的意思表示 <sup>9</sup>	伝達 <sup>10</sup>		φ	
疑う、思う、考える等	態度的意思表示				
心配する、恐れる、喜ぶ、 悩む、迷う等	φ				
感動する、ほっとする、 がっかりする等	受動的感情の表出 (±評価) <sup>11</sup>	受動的感情の表出(±評価); 伝達	伝達	φ	伝達
呆れる、困る、疲れる、 驚く、びっくりする、弱 る、参る等	受動的感情の表出 (±評価)	受動的感情の表出(±評価); 即時的感嘆 <sup>12</sup> ; 伝達			

(表 2-4 は趙 (2016 : 87) の表 8 を修正したものである。)

<sup>8</sup> 趙(2016)では(2-i)のように「働きかけの意志表出」を「聞き手に向かって、話し手が聞き手に対する感情を意志的に表出するという意味機能」(趙 2016 : 49)としている。

(2-i) 「残念なことに、私には参加資格がないからねえ。同情するけど、手伝えないなあ」  
(『星忍母艦テンブレイブ』) (趙 2016 : 51)

<sup>9</sup> 趙(2016)では(2-ii)のように「態度的意思表示」を「話し手が自分の態度的心理活動を聞き手に伝えて表明する」(趙 2016 : 52) という意味機能としている。

(2-ii) 「ああ、激しい嵐だ。海に出てる気の毒な船員たちに同情するよ。夜通し続きそうだ」  
(『カッティング・ルーム』) (趙 2016 : 56)

<sup>10</sup> 趙(2016)では(2-iii)のように「伝達」を「話し手が聞き手にある心理活動を言い伝える」(趙 2016 : 58) という意味機能としている。

(2-iii) 「ぼくはまた、あなたがサラファは本当のカトリック信者だというおつもりかと初めは思いましたよ」  
(『情事の終り』) (趙 2016 : 57-58)

<sup>11</sup> 趙(2016)では(2-iv)のように「受動的感情の表出(±評価)」を「話し手が何かの刺激や原因をきっかけにして反動的に起こった心理活動を直接的に表出する」(趙 2016 : 68) という機能であるとしている。

(2-iv) 「あっ。それいい。おれ、感動する。どうせクラスのやつなんか、おれを本気で応援なんかしないもんな。」  
(『少年の海』) (趙 2016 : 70)

<sup>12</sup> 趙(2016)では(2-v)のように「即時的感嘆」を「発話現場における即時的な感情や感想を直接に言語化するものである」(趙 2016 : 78) としている。

(2-v) 「呆れた！」真弓は目をパチクリさせて、「じゃ、本当のリリーは？」  
(『泥棒よ大志を抱け』) (趙 2016 : 80)

このように、趙 (2016) はテンス・アスペクト、人称制限と文の意味機能によって心理動詞を5つに分けている。

しかし、趙 (2016) の分類には問題がある。例えば、趙 (2016) は工藤 (1995) と同様に「悩む」「迷う」と「喜ぶ」「心配する」などを1つの下位分類にしているが、実際には「悩む」や「迷う」は発話時現在の心情を表し得るのに対し、「喜ぶ」や「心配する」は表し得ない。

(2-41) ああ、{悩む／\*喜ぶ}。

また、趙 (2016) は「働きかけの意志表出」を「聞き手に向かって、話し手が聞き手に対する感情を意志的に表出するという意味機能」(趙 2016 : 49) としており、「受動的感情の表出」を「話し手が何かの刺激や原因をきっかけにして反応的に起こった心理活動を直接的に表出する」(p. 58) 意味機能としているが、どのような場合に「意志的」であり、どのような場合に「反応的」であるかは詳しく説明されていない。例えば、(2-42) の「ガッカリする」は趙 (2016) ではシタ形で「受動的感情の表出(±評価)」または「伝達」を表すとされているが、話し手が直接相手に向かって相手への感情を表出するという点から見ると、「働きかけの意志表出」ではないかと思われる。

(2-43) の「ウンザリする」も同様である。このように、趙 (2016) の文の意味機能に対する基準は不十分なところがある。

(2-42) あなたにガッカリした！

(2-43) あなたにウンザリした！

さらに、先の山岡(2000)と同様に、趙 (2016) は心理動詞のテンス・アスペクトを考察しているにもかかわらず、「ゴワゴワしている」「ザラザラしている」のように属性を表すシテイル形の場合を見逃している。

このように、趙 (2016) はテンス・アスペクト、人称制限、文の意味機能によって心理動詞を分類しているが、分類の基準には恣意性が感じられる点や、見逃している場合がある点で問題があると思われる。

## 2.1.5 呉 (2017) の研究

最後に、呉 (2017) について見る。呉 (2017) も趙 (2016) と同様に、工藤 (1995) や山岡 (2000) を受け継いでいるが、テンス・アスペクト対立に重点を置いて心理動詞を分類している。表 2-5 のように、呉 (2017) は心理動詞のうち、感情・感覚・知覚を表すものをテンス・アスペクト、人称制限、文の意味機能の観点から 5 つに分類している。

表 2-5 呉 (2017) における心理動詞の分類

形式、文機能、人称性 動詞グループ		スル形		シタ形		シテイル/ シテイタ形
		確認・記述文 (人称制限無)	表出文 (一人称)	確認・記述文 (一人称に偏る)	表出文 (一人称)	確認・記述文 (人称制限無)
I	感情動詞 1(むかつく)	T:未来 A:全一性/ 発生性	T:現在 A:なし	T:過去 A:全一性/発生 性	×	T:現在/過去 A:継続性
	感覚動詞 1(震える)					
知覚動詞 1(見える)	×					
II			感情動詞 2(驚く)		T:現在 A:パーフェ クト性	
			感覚動詞 2(疲れる)			
III	感情動詞 3(喜ぶ)	×				
	感情動詞 4(仰天する)					
IV	感覚動詞 3(疲労する)	T:現在 A:なし	×			
	感覚動詞 4(痛む)					
V	知覚動詞 2 (ごわごわする)	×			×	特性/過去の知 覚体験

(表 2-5 は呉 (2017 : 63) の表 7 を修正したものである。)

まず、呉 (2017) では「むかつく」「震える」「見える」などのグループ I の語を典型的心理動詞とし、ほかのグループの語は典型的心理動詞から逸脱しているものであるとされている。グループ I の語はスル形で一・二・三人称の心理活動の〈確認・記述〉と一人称の心理活動の〈表出〉を表し、シタ形とシテイル/シテイタ形で一・二・三人称 (シタ形は一人称の方が圧倒的に多い) の心理活動の〈確認・記述〉を表すと述べている。例えば、(2-44) の「見える」は「〈未来〉の知覚をひとまとまりに捉える〈全一性〉、または〈発生性〉を確認・記述している」(p. 50) のに対し、(2-45) の「見える」は「〈現在〉の話し手の知覚の〈表出〉を表す」(p. 52) としている。また、(2-46) の「見えました」は「主体の〈過去〉の知覚の〈全一性〉を表す」(p. 50) として

いる。さらに、(2-47)の「見えている」と(2-48)の「見えてた」はそれぞれ主体の〈現在〉または〈過去〉の「知覚の〈継続性〉」を〈確認・記述〉しているとしている。

(2-44)「海が見えるよ。もうすぐ見えるよ。浦島太郎さんの海が見えるよ。」

(『海』)

(2-45)「うち！あたしの、うち！」見ると、凍った川の崖ぶちに、私の家がちいさく、朝日の色に染まった白壁を雪のなかからうき出させていた。「ああ。見える、見える。」

(『忍ぶ川』)

(2-46)「タワーの周りのあちこちにパトカーが停まっていた。ほかにも何台か車が見えました。みんな警察の車だったんでしょうね。(後略)」

(『理由』)

(2-47)「(前略)今か？H公園だ。そう、すぐ近くのな。ここからマンションが見えているよ。ああ、もう少し休んでから帰るよ……心配するな、もういいんだ。……何故って？まあいいじゃないか、とにかく心配無用だ。じゃ……な」

(『放課後』)

(2-48)保「帰ってったじゃない」文子「あたしたちに見つかったからでしょ！」悠作「長葱が見えてたよ、袋から」

(『パパはニュースキャスター・スペシャル』)

(呉 2017 : 50-51)

次に、「驚く」「疲れる」などのグループⅡの心理動詞はグループⅠと似ているが、スル形もシタ形も〈表出〉を表す点で異なると述べている。例えば、(2-49)の「疲れる」も(2-50)の「疲れた」も〈現在〉の感覚を表出するとしている。

(2-49)「疲れるな。みんな……すこしやすもうじゃないか」

(『冬の旅』) (呉 2017 : 56)

(2-50)「あー、疲れた。ご飯、行きましょうか」

(『喰いタン』) (呉 2017 : 56)

次に、「悲しむ」「喜ぶ」や漢語動詞の「狂喜する」「疲労する」などのグループⅢの心理動詞はスル形で〈表出〉を表さない点でグループⅠと異なると述べている。例えば、(2-51)のように「悲しむ」は発話時〈現在〉の感情の表出を表さないのに対し、(2-52)のように〈未来〉の感情の表出を表すとしている。

(2-51) 「ああ、\*悲しむ」

(2-52) 「……あなたがいなくなったら、お母さんはきっと悲しむ。たった一人の、大切な娘なんだから」

(『七瀬ふたたび』) (呉 2017 : 58)

次に、「痛む」「目が眩む」などグループⅣの心理動詞はシテイル／シテイタ形で使用されることがほとんどない点でグループⅠと異なると述べている。例えば、(2-53)のようにシテイル形で〈現在〉の感覚の〈継続性〉を確認・記述することができないとしている。ただし、呉 (2017 : 60) は「「金に目が眩んでいる」のようなメタファー的な用法の場合」や、「心が痛んでいる」のような「感覚」ではなく、「感情」を表す場合には継続相形式の使用がある」とも指摘している。

(2-53) \* (私／太郎は) 腕が痛んでいる。

最後に、「つるつるする」「ざらざらする」などグループⅤの心理動詞はテンス・アスペクト形式の意味が特殊化されるものであり、スル形で〈未来〉の確認・記述を表さない点と、シテイル形で〈特性〉を表す点でグループⅠと異なると述べている。例えば、(2-54)のように「つるつるする」は〈未来〉の知覚を表さない。また、(2-55)の「つるつるしている」は〈継続性〉を表さず、「この床は表面が平滑である」のように、〈特性〉を表すとしている。

(2-54) \*床がもうすぐつるつるするよ。

(2-55) 「だからほんとに、ダンスに来たってこの人と二人じゃ間が抜けていて仕様がないわ。ぼんやりしているもんだから、さっきも滑って転びそうに

なったのよ」「床がつるつるしてますからね」

(『痴人の愛』) (呉 2017 : 63)

このように、呉 (2017) は心理動詞をテンス・アスペクト、人称制限、文の意味機能の観点から5つに分類している。しかし、呉 (2017) の分類にも問題があると思われる。例えば、呉 (2017) は「痛む」「目が眩む」などグループIVの語はシテイル形でほとんど使用されないと述べている。しかし、実例では以下のようなシテイル形の用例が少なからず出現する。

(2-56) 「からだ中が痛んでいます。えらい目に遭いました」

(『反逆の山』 梓林太郎)

(2-57) 「こういう発作が起るかなり以前から、鳩尾のあたりがよく痛んでいましたので、胃潰瘍や癌の方を強く心配しました、それがまさか心臓病とは. . . .」

(『不毛地帯』 山崎豊子)

また、呉 (2017) はグループVの心理動詞はスル形で発話時現在の知覚を表すのに対し、シテイル形で対象の特性を表すと述べている。しかし、スル形で特性を表す場合もあれば、シテイル形で現在の継続的な知覚を表す場合もある。例えば、(2-58) の「べとべとする」は話し手の現在の知覚というより、海風の特性を表している。また、(2-59) の「べとべとしている」は花の特性というより、現在の継続的な知覚を表していると思われる。

(2-58) 「海風ってべとべとする」

(<https://drmtxt.com/2021-spring-drama/mameo/post-2599/>) 2022. 11. 15 閲覧

(2-59) 花を分解していた別の生徒は「なんかべとべとしている。蜜ではないか。」

(<http://blog.kgm.ed.jp/?eid=749>) 2022. 11. 15 閲覧

このように、呉 (2017) の分類にはなお検討すべき点があると思われる。



## 2.1.6 心理動詞の内部分類に関する先行研究のまとめ

以上、心理動詞の分類に関する先行研究を見てきた。表 2-6 のようにまとめる。

表 2-6 心理動詞の内部分類に関する先行研究のまとめ

	分類基準	下位分類と語例				問題点
工藤 (1995)	<ul style="list-style-type: none"> <li>意味特徴</li> <li>テンス・アスペクトと文の意味機能</li> </ul>	①思考動詞: 思う、考える				テンス・アスペクトと文の意味機能の分類に問題がある。例えば、スル形が過去を表すものには、「悩む」のようにスル形が現在を表すものと、「喜ぶ」のようにスル形が現在を表さないものが混ざっている。
		②感情動詞	シタ形が過去を表すもの: 悩む、喜ぶ シタ形が現在を表すもの: 驚く、困る			
		③感覚動詞	シタ形が過去を表すもの: 痛む、疼く シタ形が現在を表すもの: 痺れる、疲れる			
		④知覚動詞: 見える、匂う				
山岡 (2000)	<ul style="list-style-type: none"> <li>意味特徴</li> <li>テンス・アスペクトと文の意味機能</li> </ul>	感情動詞	A 感情表出動詞	B 感情変化動詞	C 感情描写動詞	テンス・アスペクトと文の意味機能の分類に問題がある。例えば、「音がする」「ザラザラする」など同じカテゴリーに入れているが、「音がしている」は話し手の知覚を表すのに対し、「ザラザラしている」は対象の属性を表し、ポテンシャル(潜在時)な事態を表すため、両者は分けて考える必要がある。
		1 思考	A1 思考表出 ～ト/ク思う	B1 思考変化 ひらめく	C1 思考描写 ～ヲ思う	
		2 情意	A2 情意表出 困る	B2 情意変化 あきれる	C2 情意描写 怒る	
		3 感覚	A3 感覚表出 胃が痛む	B3 感覚変化 肩が凝る	C3 感覚描写 顔がほてる	
	4 知覚	A4 知覚表出 見える		C4 知覚描写 見る		
吉永 (2008)	<ul style="list-style-type: none"> <li>意味特徴</li> <li>持続性と他動性</li> </ul>	①感情的心理動詞: 悩む、困る、あきれる、あせる				持続性と他動性に問題がある。例えば、持続性について、吉永(2008)は期間副詞「長い間」、短時性を表す「瞬間」と共起できるかどうかで持続
		②知覚感覚的心理動詞: 痛む、痺れる、震える、音がする				
		③思考認識的心理動詞: 思う、考える、忘れる、ひらめく				
			自動詞		他動詞	

		比較的短期	A.驚く型:驚く、怒る、めげる		C.信じる型		性を判断しているが、揺れがある場合が多いと思われる。	
		比較的長期	B.悩む型:悩む、イライラする		信じる、愛する、喜ぶ			
趙 (2016)	テンス・アスペクト、 人称制限、文の意 味機能	人称+テンス・ アスペク ト	一人称			三人称		
		動詞例	スル形	シタ形	シテイル・シ テイタ形	スル・ シタ形	シテイル・ シテイタ形	分類の基準には恣意性が感じられる点や、見逃している場合がある点で問題があると思われる。例えば、趙(2016)では「働きかけの意志表出」と「受動的感情の表出」をはっきり分けておらず、「あなたにガッカリした」などの場合はどちらかは明らかになっていない。
		感謝する、祈 る、願う、恨む	働きかけの意味表 出;態度的意思表示	伝達	伝達	φ	伝達	
		疑う、思う	態度的意思表示					
		喜ぶ、恐れる、 迷う	φ	伝達	φ	伝達		
		感動する、ほっ とする	受動的感情の表出 (±評価)	受動的感情の表出(±評 価);伝達				
呆れる、困る、 疲れる	受動的感情の表出 (±評価)	受動的感情の表出(±評 価);即時的感嘆;伝達						
呉 (2017)	テンス・アスペクト、 人称制限、文の意 味機能	テンス・アスペクト+ 文の意味機能+	スル形		シタ形		シテイル/シテイ タ形	テンス・アスペクト、人称制限、文の 意味機能という分類に問題がある。 例えば、呉(2017)は「痛む」「目が 眩む」などグループIVの語はシテイ ル形ではほとんど使用されないと述べて いる。しかし、実例ではシテイル 形の用例が少なからず出現する。
		人称	確認・記述文 (人称制限無)	表出文 (一人称)	確認・記述文 (一人称に偏る)	表出文 (一人称)	確認・記述文 (人称制限無)	
		グループ(語例)						
		I むかつく	T:未来 A:全一性/ 発生性	T:現在 A:なし	T:過去 A:全一性/ 発生性	×	T:現在/過去 A:継続性	
		II 驚く、疲れる		×		×		
		III 喜ぶ、仰天する	×	×	×	×		
IV 痛む		T:現在 A:なし		×	×			
V ゴワゴワする	×			×	特性/過去の知 覚体験			

このように、先行研究は意味特徴、持続性と他動性、テンス・アスペクト、人称制限、文の意味機能などの観点から心理動詞を分類している。

本研究では後述するように、心理動詞の内部分類だけでなく、その位置付け、つまり心理動詞は〈動き〉を表すか〈状態〉を表すかという考察も行うため、工藤(1995)や趙(2016)を参考にし、テンス・アスペクト、人称制限、文の意味機能の観点から心理動詞を分類する。

## 2.2 心理動詞の位置付けに関する研究

次に、本節では心理動詞の位置付けに関する先行研究を見る。小竹(2011)は心理動詞の位置付けに関する先行研究には大きく分けて次の3つの立場があるとしている。

- ① 心理動詞は〈状態〉を表すとする立場
- ② 心理動詞は〈動き〉を表すとする立場
- ③ 心理動詞は〈状態〉と〈動き〉の中間的存在であるとする立場

しかし、この他、④のような立場もあると思われる。

- ④ 心理動詞には状態性の高いものから動作性の高いものまで様々なものがあるとする立場

以下、本章ではこれらの研究について順に概観し、本研究では④の立場をとることを主張する。

### 2.2.1 心理動詞は〈状態〉を表すとする立場

心理動詞は〈状態〉を表すとする立場の先行研究として、奥田(1977, 1988)が挙げられる。奥田(1977, 1988)では、日本語の動詞をアスペクトの観点から大きく運動動詞と状態動詞の2つに分けている。このうち、運動動詞はスルーシテイルのアス

ペクト対立があるのに対し、状態動詞はスル-シテイルのアスペクト対立がないと指摘している。例えば、(2-60) の運動動詞「食べる」は (2-60a) のようにスル形で未来を表し、(2-60b) のようにシテイル形で現在を表すのに対し、(2-61) の状態動詞「違う」はスル形でもシテイル形でも現在を表すとしている。

(2-60) a. ご飯を食べる。

b. ご飯を食べている。

(2-61) a. 日本語の文法は英語のと違う。

b. 日本語の文法は英語のと違うている。

このように分類した上で、奥田 (1988) は「疲れる」「痛む」「いらいらする」「退屈する」などを挙げ、「このような生理・心理的な現象をさししめしている動詞は、その語彙的な意味において、動作も変化も表現していない。ただの〈状態〉をさしだしているにすぎない」(p. 127) と述べている。これらの動詞はスル形とシテイル形が意味的にアスペクト対立をなさず、スル形も未来ではなく、シテイル形と同じように現在を表すことができると指摘している。例えば、(2-62) の「あきれる」は話し手の発話現在時の心理活動を表し、上の (2-61) の状態動詞「違う」と一致するとしている。(2-63) の「腹が立つ」も同様である。

(2-62) 「あら、それじゃ、あなたは私をこの家のなかにとじこめておくおつもりなの？ふん、あきれるわ。」

(洒落た関係) (奥田 2015 : 129)

(2-63) 庄吉さんは小母さんのおのいていくのをみて、「わしゃあ、むらむらと腹がたつ」と、いきりたった。

(黒い雨) (奥田 2015 : 129)

このように、奥田 (1988) は生理・心理的な現象をさししめず動詞がスル形で現在を表すというアスペクト的特徴から、生理・心理的な現象をさししめず動詞を〈動き〉ではなく〈状態〉を表すと捉えている。

しかし、生理・心理的な現象をさししめず動詞がすべてスル形で現在を表すわけで

はない。例えば、「悲しむ」「楽しむ」などの心理動詞は(2-64)(2-65)のようにスル形で現在を表さず、シテイル形を用いなければならない。従って、必ずしも全ての心理動詞が状態動詞に含まれるわけではないのである。

(2-64) a. ?私は太郎の死を悲しむ。

b. 私は太郎の死を悲しんでいる。

(2-65) a. ?私は今の仕事を楽しむ。

b. 私は今の仕事を楽しんでいる。

## 2.2.2 心理動詞は〈動き〉を表すとする立場

一方、心理動詞は〈動き〉を表すとする立場の先行研究として、三原(2000)、吉永(2008)、仁田(2012)が挙げられる。

### 2.2.2.1 三原(2000)の研究

三原(2000)はVendler(1967)に従い、動詞を(2-66)のように4つに分類した上で、心理動詞は「動作動詞、特にVendler(1967)分類における活動動詞(activity verb)であり、その他の類型ではない」(p.55)と主張している。また、「この言明は、活動動詞には、「走る」「殴る」といった物理的活動動詞のみならず、心的活動を表わす心理的活動動詞があることを積極的に主張するものでもある」(p.55)と述べている。

(2-66) a. 状態動詞(state):「ある」「いる」「できる」など

b. 活動動詞(activity):「走る」「殴る」など

c. 到達動詞(achievement):「壊れる」「届く」など

d. 達成動詞(accomplishment):「壊す」「作る」など

三原(2000)はまず、シテイル形を持つかどうか、スル形が示す時制が現在か未来かという2つの面から心理動詞は状態動詞ではないことを指摘し、その次に完了を表す数量詞連結構文が成立するかどうかという面から心理動詞は到達動詞でも達成動詞でもないことを指摘し、最後に動作持続のシテイル形が事態の成立済みを表すかど

うかという面から、心理動詞は活動動詞であることを主張している。

まず、三原（2000）では心理動詞は（2-67）のようにシテイル形を持つのにに対し、状態動詞は（2-68）のようにシテイル形を持たないことから、心理動詞は状態動詞と異なるとしている。

（2-67）怖がっている、呆れている、喜んでいる、悩んでいる、困っている…

- （2-68）a. 犬が {いる／\*いている}。  
 b. ベンチが {ある／\*あっている}。  
 c. 英語が {出来る／\*出来ている}。

（三原 2000 : 56）

また、三原（2000）はスル形が未来を表すかどうかを基準に心理動詞は状態動詞ではないことを指摘している。例えば、〈動き動詞〉の場合は（2-69）のようにスル形が未来を表すのにに対し、状態動詞の場合は（2-70a）のように「明日」などを用いて未来を明示しない限り、（2-70b）や（2-70c）のようにスル形は現在を表すと論じている。これに対し、心理動詞の場合は（2-71）のようにスル形が未来を表すため、状態動詞ではないことが分かると述べている。

- （2-69）a. 太郎が大阪に来る。  
 b. 花子がショパンを演奏する。  
 （2-70）a. 僕は明日は家にいる。  
 b. 太郎が図書館にいる。  
 c. 本棚に聖書がある。  
 （2-71）a. 僕はもう諦めるよ。  
 b. 親が悲しむぞ。  
 c. そんなことをすると、子供が怖がるでしょ！  
 d. 心配するよ、おじいちゃんが。  
 e. この味では客が飽きる。

（三原 2000 : 57）

次に、三原（2000）は完了を表す数量詞連結構文が成立するかどうか、動作持続のシテイル形が事態の成立済みを表すかどうかという 2 つの面から心理動詞は到達動詞でも達成動詞でもなく、活動動詞であることを指摘している。数量詞連結構文について、三原（2000）は（2-72）を示し、（2-72a）のように「留学生」という名詞句の数を示す数量詞「2人」が、名詞句である「留学生」から離れた場所に生起する構文であるとしている。（2-72b）も同様である。

- (2-72) a. 留学生が、昨日、2人弁論大会に参加した。  
 b. 私は英語の辞書を生協で2冊買った。

（三原 2000 : 56）

この数量詞連結構文は、（2-73）の到達動詞や（2-74）の達成動詞のような、明確な終了時点を有する動詞では成立するが、（2-75）の活動動詞のような終了を明示しない動詞では落ち着きが悪くなると述べている。

- (2-73) a. 桜の木が虫害で5本枯れた。  
 b. 小包が留守にしている間に2つ届いた。  
 (2-74) a. 子供がおもちゃをもう2つ壊した。  
 b. 僕は書類を午前中に3つ仕上げた。  
 (2-75) a. ?僕は友人を駅前で2人待った。  
 b. ?私はいたずら坊主を公園で5人怒鳴った。

（三原 2000 : 67）

ここで、心理動詞では（2-76）のようにこの構文が全く成立しないため、心理動詞は到達動詞や達成動詞とは別類型であると述べている。

- (2-76) a. \*うちの子は能面を昼間でも3つ怖がった。  
 b. \*彼は同僚を心底2人憎んだ。

（三原 2000 : 57）

その上で、三原(2000)はさらに動作持続のシテイル形が事態の成立済みを表すかどうかで、心理動詞は活動動詞であることを確認している。例えば、活動動詞である(2-77a)の「歩く」も達成動詞である(2-78a)の「作る」もシテイル形で動作の持続を表す。しかし、「歩いている」は(2-77a)のように「歩いた」に言い換えられることから、「歩く」という事態がすでに成立しており、完了的事態が含意されるのに対し、「作っている」は(2-78a)のように「作った」に言い換えられないことから、「作る」という事態がまだ進行中であり、完了的事態が含意されないということを表すとして(2-77b)の「叱る」と(2-78b)の「描く」も同様である。

- (2-77) a. 赤ちゃんが歩いている。(→赤ちゃんが歩いた)  
 b. 母親が子供を叱っている。(→子供を叱った)
- (2-78) a. 山本さんが納屋を作っている。(×→納屋を作った)  
 b. 菜穂子が油絵を描いている。(×→油絵を描いた)

(三原 2000 : 58)

ここで、心理動詞の場合は(2-79)のようにシテイル形がシタ形に言い換えられることから、活動動詞と同じ振る舞いを見せると指摘している。

- (2-79) a. 村田さんは大家を恨んでいる。(→大家を恨んだ)  
 b. 孝志は弟の才能を妬んでいる。(→才能を妬んだ)  
 c. 被災者が食料不足に苦しんでいる。(→被災者が苦しんだ)  
 d. 美穂は結婚問題で悩んでいる。(→美穂が悩んだ)

(三原 2000 : 58)

このように、三原(2000)はシテイル形を持つかどうか、スル形が示す時制が現在か未来か、完了を表す数量詞連結構文が成立するかどうか、動作持続のシテイル形が事態の成立済みを表すかどうかという4つの面から、心理動詞は状態動詞、到達動詞や達成動詞ではなく、活動動詞であると指摘している。このことから、三原(2000)は心理動詞は〈動き〉を表すと捉えていることが分かる。



## 2.2.2.2 吉永 (2008) の研究

吉永 (2008) は 2.2.1 の奥田 (1977, 1988) などの先行研究に従い、動詞をスルーシテイルというアスペクト対立の有無によって日本語の動詞を大きく運動動詞と状態動詞の 2 つに分けている。さらに運動動詞を終了限界の有無によって変化動詞と動作動詞の 2 つに分けている。このうち、変化動詞は (2-80a) の「汚す」のようにシテイル形が変化後の結果持続を表すのに対し、動作動詞は (2-81a) の「焼く」のようにシテイル形が動作進行を表すという違いがあるとしている。(2-80b) の「落とす」と (2-81b) の「拭く」も同様である。

(2-80) a. 花子は服を汚している。

b. 花子は単位を落としている。

(2-81) a. 花子が手紙を焼いている。

b. 花子が床を拭いている。

(吉永 2008 : 113)

このように動詞を分類した上で、吉永 (2008) はまず「～ (し) はじめる」の複合動詞化テストと「もうちょっとで～そうになる」テストを用いて、心理動詞は状態動詞ではなく、運動動詞であると主張している。次に、①「～ (し) おわる」、②結果構文、③「～かけ」構文、④完了的時間成分などにおける文法現象を考察することによって、心理動詞は終了限界がないと指摘し、運動動詞のうちの変化動詞ではなく、動作動詞であると主張している。

まず、「～ (し) はじめる」の複合動詞化テストに関しては、例えば、(2-82) のように運動動詞の「入る」は「～ (し) はじめる」が付加できるのに対し、(2-83) のように状態動詞を表す「いる」は「～ (し) はじめる」が付加できないという違いがある。このように、運動動詞は開始点を意味に含んでいるのに対し、状態動詞は開始点を含まず、事態の展開がないとしている。また、心理動詞の場合は (2-84) のように運動動詞と同様に「～ (し) はじめる」が付加できることから、開始点を意味に含んでおり、状態動詞ではなく、運動動詞であるとしている。

(2-82) 営業時間からすぐにお客さんがお店に入り始めた。

(2-83) \*営業時間からすぐにお客さんがお店にい始めた。

(2-84) a. アルバイトをやめて、一週間で、もうお金に困り始めた。

b. 嫌いな曲の演奏が始まってすぐに、頭がガンガンし始めた。

(吉永 2008 : 114)

また、吉永 (2008) は開始点を表す「もうちょっとで～そうになる」テストも用いて検証している。例えば、運動動詞は (2-85) のように「もうちょっとで～そうになる」と共起するのに対し、状態動詞は (2-86) のように共起しない。一方、心理動詞の場合は (2-87) のように運動動詞と同様に開始点を表す「もうちょっとで～そうになる」と共起できる。

(2-85) もうちょっとで {落ち/割れ/ぶつかり/見逃し} そうになった。

(2-86) もうちょっとで {\*い/\*あり/\*似/\*違い} そうになった。

(2-87) もうちょっとで {ほれ/キレ/諦め/信じ} そうになった。

(吉永 2008 : 114)

次に、吉永 (2008) は①「～(し)おわる」、②結果構文、③「～かけ」構文、④完了的時間成分「～で」との共起などにおける文法現象を考察することによって、心理動詞は終了限界がないと指摘し、運動動詞のうちの変化動詞ではなく、動作動詞であると主張している。

①「～(し)おわる」、②結果構文、③「～かけ」構文、④完了的時間成分「～で」との共起については、吉永 (2008) では「限界性のある動詞でなければ成立しにくい」(p. 115) と述べている。心理動詞の場合は (2-88) ～ (2-91) のようにすべて成立しないことから、限界性がないとし、運動動詞のうちの変化動詞ではなく、動作動詞であるとしている。

(2-88) {\*悩み/\*苦しみ/\*ボーッとし} 終わる。(①「～(し)おわる」)

(2-89) 結婚のことで心がズタズタに {\*悩んだ/\*苦しんだ}。(②結果構文)

(2-90) {\*困り/\*あきれ/\*激怒し} かけの先生 (③「～かけ」構文)

(2-91) 三日で {悩んだ/注意した/苦しんだ}。

(④完了的時間成分「～で」との共起)

(吉永 2008 : 115)

このように、吉永(2008)は「～(し)はじめる」、「もうちょっとで～そうになる」、「～(し)おわる」、結果構文、「～かけ」構文、完了的時間成分「～で」との共起という6つのテストで、心理動詞は状態動詞でもなく、運動動詞のうちの変化動詞でもなく、運動動詞のうち動作動詞であると主張し、図2-2のように心理動詞の位置付けを示している。

状態動詞	運動動詞
	変化動詞
	動作動詞 (心理動詞含む)

図2-2 吉永(2008 : 131)における心理動詞の位置付け

### 2.2.2.3 仁田(2012)の研究

仁田(2012)は三原(2000)、吉永(2008)を踏まえ、3つのテストを用いて心理動詞は〈動き〉であるとしている。1つ目は「(し)はじめる/だす」や「(し)てくる」が付加できるかどうかというテストである。これについて、仁田(2012)は〈動き〉を表す動詞は付加できるのに対し、〈状態〉を表す動詞は付加できないと述べている。例えば、「悩む」は(2-92)のように「(し)はじめる」が付加するのに対し、状態動詞の「いる」は(2-93)のように付加しない。このことから、心理動詞「悩む」が表す事態は時間の中で「開始」から「過程」へのように展開していくのに対し、状態動詞の「いる」が表す事態は時間の中で展開しないとしている。(2-94)の心理動詞の「いらいらする」と(2-95)の状態動詞の「ある」も同様である。

(2-92) 今まで大きな問題を空に描いて、骨組だけは略出来上がっている位に考えていた私は、頭を抑えて悩み始めた。

(2-93) \*男が部屋に居始めた。

(2-94) しだいに『あらかし斑』全員がいらいらしてきた。

(2-95) \*僕は熱があってきた。

(仁田 2012 : 197)

2つ目は「(し) そうだ」が表す意味は、直後に起こる事態の徴候か、外見から推定される現前のありようかというテストである。仁田 (2012) は〈動き〉を表す動詞は「(し) そうだ」を付加することによって直後に起こる事態の徴候を表すのに対し、〈状態〉を表す動詞や形容詞は「(し) そうだ」を付加することによって外見から推定される現前のありようを表すとしている。例えば、心理動詞の「いらいらする」は (2-96) の「いらいらしそうだ」のように、直後に「いらいらするようになる」ことの徴候を表し、〈動き〉を表す動詞の「落ちる」も同様に (2-97) の「落ちそうだ」のように直後に「落ちるようになる」ことの徴候を表している。これに対し、状態動詞の「ある」は (2-98) の「ありそうだ」のように「君」の外見から現在は「熱がある」状態にいることを推定する意味を表し、〈状態〉を表す形容詞「痛い」も同様に (2-99) の「痛そうだ」のように主体の外見から現在は「お腹が痛い」状態にいることを推定する意味を表していると述べている。

(2-96) 奴のことでいらいらしそうだなあ。(2-97) あっ、荷物が落ちそうだ。(2-98) 君、なんだか熱がありそうだよ。(2-99) ずいぶんお腹が痛そうだね。

(仁田 2012 : 197)

3つ目は発話時点を明示する時の成分を共起させる場合、スル形で現在を表すかどうかというテストである。仁田 (2012) は「今」「現在」などの発話時点を明示する時成分を共起させると、心理動詞はスル形で現在を表し得ないのに対し、〈状態〉を表す動詞や形容詞はスル形で現在を表し得るとしている。例えば、「悩む」は (2-100a) のように「今」や「現在」を共起させると、文が許容されにくく、(2-100b) のようにシテイル形の「悩んでいる」にしなければならないのに対し、〈状態〉を表す「ある」は (2-102) のように「今」や「現在」を共起させても許容される。(2-101) の「いらいらする」と (2-103) の「青い」も同様である。

- (2-100) a. ? {今／現在} 悩む。  
 b. {今／現在} 悩んでいる。
- (2-101) a. ? {今／現在} いらいらする。  
 b. {今／現在} いらいらしている。
- (2-102) {今／現在} 僕は熱がある。
- (2-103) {今／現在} 君、顔色が青いよ。

このように、仁田 (2012) は 3 つのテストを用いて心理動詞は〈状態〉ではなく、〈動き〉を表すとしている。

以上のように、三原 (2000)、吉永 (2008)、仁田 (2012) は心理動詞を〈動き〉として捉えているが、三原 (2000) でも言及されているように、(2-104) のように一部の心理動詞はスル形で現在の〈状態〉を表している。

- (2-104) a. そんなこと、困るよ。  
 b. あいつの喋り方はイライラする。  
 c. この喫茶店は落ち着く。

(三原 2000 : 57)

三原 (2000) では、このような心理動詞は (2-105) のように、対応する「形容詞や「名詞+ダ」などの状態表現」(p. 65) がいないため、(2-104) のようにスル形でその代用をしており、特殊なものであると説明している。

- (2-105) a. \*そんなこと、困りだ。  
 b. \*あいつの喋り方はイライラだ。  
 c. \*この喫茶店は落ち着きだ。

(三原 2000 : 65)

しかし、対応する形容詞や名詞などの状態表現がある心理動詞でも、〈状態〉に使われるものがある。例えば、次の (2-106) のように心理動詞の「退屈する」も対応す

る心理形容詞の「退屈だ」も成り立ち、状態表現として使われている。(2-107)の「憧れる」も同様である。

(2-106) 全く悩みがない人生は {退屈する／退屈だ}。

(2-107) ツリーハウスは {憧れる／憧れだ}。

そのため、本研究では同じ心理動詞でも、〈状態〉を表すものと〈動き〉を表すものの2つがあると考える。

### 2.2.3 心理動詞は〈状態〉と〈動き〉の中間的存在であるとする立場

心理動詞は〈状態〉と〈動き〉の中間的存在であるとする立場の先行研究として、鈴木(1957)、工藤(1995)、小竹(2011)が挙げられる。

#### 2.2.3.1 鈴木(1957)の研究

鈴木(1957)は動詞をスル形の解釈によって〈動作性動詞〉〈状態性動詞〉〈動作状態性動詞〉の3つに分けている。このうち、スル形で未来を表すものを〈動作性動詞〉とし、スル形で現在を表すものを〈状態性動詞〉としている。また、スル形で現在を表す点で〈状態性動詞〉に似ているが、動作的意味が含まれている点、及び持続性がある点では〈動作性動詞〉に似ているものを〈動作状態性動詞〉としており、心理動詞をこの類に入れている。例えば、心理動詞「困る」は(2-108a)のように話し手の態度や主張を表す用法があるが、これは〈動作性動詞〉が未来における話し手の行為を表すことから派生した特殊な用法であるとしている。また、「困る」は(2-108b)のように持続性がある点で〈動作性動詞〉と変わらないとしている。(2-109)の「見える」も同様である。

(2-108) a. 「用がすんだらさっさと帰って来てくれないと困るよ。」(その妹)

b. 「お父さん仕事が出来ないで困っているの。」(縮図)

(2-109) a. もうすぐ富士山が見えるよ。

b. 「あっ、富士山が見える!」「いや、さっきから見えている。」

(鈴木 1957 : 75-79)

このように、鈴木（1957）は同じ心理動詞にも〈動き〉としての面と〈状態〉としての面があることを指摘し、心理動詞は〈状態〉と〈動き〉の中間的な存在であると主張している。

### 2.2.3.2 小竹（2011）の研究

小竹（2011）は鈴木（1957）を踏まえた上で、心理動詞は基本〈動き〉として捉えているが、〈状態〉を表す場合もあると主張している。まず、小竹（2011）は心理動詞と心理形容詞が時の従属節に現れる選好差を比較することによって、心理動詞は基本〈動き〉として捉えられるのに対し、心理形容詞は基本〈状態〉として捉えられると指摘している。例えば、(2-110) (2-111) は「事態が一時的に継続しているときに、他の事態が発生する「同時性」を表すもの」(p. 57) であり、「時間によって展開していく事態がまさに継続中であるその時に、主節の事態が発生したということを含意する」(p. 57) と述べている。この場合、心理形容詞より心理動詞が選好されることから、心理動詞は時間の中で展開する〈動き〉を表すのに対し、心理形容詞は展開しない〈状態〉を表すとしている。

(2-110) ゲームをして {楽しんでいた / 楽しかった} ときに、母に台所から名前を呼ばれた。

(2-111) 高熱で {苦しんでいる / 苦しい} あいだに、せっかくの連休が終わってしまった。

(小竹 2011 : 57)

次に、小竹（2011）は心理動詞のスル形が属性解釈を受ける場合に〈状態〉を表すことを指摘している。例えば、(2-112a) は「朝の渋滞は人をイライラさせるような属性を持っている」という解釈が成り立つ。このような解釈が成り立つ場合、〈動き〉を表す心理動詞「イライラする」が状態化するとしている。(2-112b) ~ (2-112d) も同様である。

(2-112) a. 朝の渋滞は、イライラする。

- b. 慣れない仕事は、戸惑う。
- c. 味付けの濃い料理は、飽きる。
- d. 進路の選択は、迷う。

(小竹 2011 : 71)

このように、小竹 (2011) は心理動詞が〈動き〉としての面も〈状態〉としての面も持つ中間的存在であると主張している。

### 2.2.3.3 工藤 (1995) の研究

工藤 (1995) も鈴木 (1957) や小竹 (2011) と同様に心理動詞を中間的なものと捉えているが、鈴木 (1957) や小竹 (2011) は心理動詞が〈動き〉を表す動詞とも〈状態〉を表す動詞とも共通性を持つことに着目しているのに対し、工藤 (1995) は心理動詞のスル形とシテイル形が主語の人称性によって使い分けられる点で〈動き〉を表す動詞とも〈状態〉を表す動詞とも異なるとしている。

2.1.1 で述べたように、まず、工藤 (1995) はスル-シテイルのアスペクト対立の有無という観点から動詞を「外的運動動詞」、「内的情態動詞」(いわゆる心理動詞)、「静態動詞」の3つに分けている。このうち、外的運動動詞はアスペクト対立があるのに対し、静態動詞はアスペクト対立がないという違いがある。また、心理動詞はアスペクト対立があるが、人称性と絡み合っているため、外的運動動詞と静態動詞の中間的なものであるとしている。例えば、外的運動動詞の場合、(2-113a) の「作った」はひとまとまり性を表すのに対し、(2-113b) の「作っていた」は動作継続性を表すというアスペクト対立がある。一方、静態動詞の場合、(2-114a) の「異なる」と (2-114b) の「異なっている」はいずれも〈関係〉という静的状態を表すため、アスペクト対立がないと述べている。また、内的状態動詞の場合、一人称主語の場合には (2-115a) のようにシタ形の「驚きました」が使われるのに対し、三人称主語の場合には (2-115b) のようにスル形が使われず、シテイタ形の「驚いていました」が使われることから、心理動詞もアスペクト対立があるが、人称の違いも絡み合っている点で外的運動動詞と異なるとしている。

(2-113) a. 「昨日、妹がつくってくれというのでピンポンの台を作ったよ」



(『その妹』) (工藤 1995 : 81)

b. 「小母ちゃんが来ていて荷物を作っていた」

(『あすなる物語』) (工藤 1995 : 82)

(2-114) a. 写真は実物とは異なる。

b. 写真は実物とは異なっている。

(2-115) a. わたし、あの時は、驚きました。

b. あの時は、先生も、{\*驚きました / 驚いていました}。

(工藤 1995 : 70)

このように、工藤 (1995) は心理動詞をスルーシテイルのアスペクト対立と人称性の観点から〈動き〉と〈状態〉の中間的存在として位置付けている。

しかし、鈴木 (1957)、工藤 (1995)、小竹 (2011) は心理動詞全体を〈動き〉と〈状態〉の中間的存在として捉えている。しかし、どのように中間的に存在しているかについてはあまり詳しく論じられていない。この点についてさらなる考察をする必要がある。

#### 2.2.4 状態性の高いものから動作性の高いものまで様々なものがあるとする立場

以上に述べた3つの立場のほか、心理動詞は状態性の高いものから動作性の高いものまで様々なものがあるとする立場もある。この立場をとる先行研究として、趙 (2016) が挙げられる。

趙 (2016) は鈴木 (1957)、小竹 (2011)、工藤 (1995) を受け継いだ上で、2.1 で紹介したようにテンス・アスペクト、人称制限、文の意味機能を基準として心理動詞を状態性の高いものから動作性の高いものまで詳しく分類し、心理動詞は中間的存在でありながら、〈動き〉とも〈状態〉とも連続性を持っていることを主張している。趙 (2016) は次のように述べている。

これまでの考察では、心理動詞を動詞カテゴリーの一員として、他の動詞との連続性に関してはほとんど触れていなかったようである。工藤 (1995) では、心理動詞を静態動詞と外的運動動詞との中間的なものとして位置づけてはいるが、具体的にどんな形で静態動詞と外的運動動詞との中

間に位置し、どのように両者と関連させているのかについては、論じられていない。

本研究では、心理動詞自体を一カテゴリーとして扱う視点を取っているので、心理動詞カテゴリーにおいては、まずどのような共通性と機能的な差異（機能変化と連続性）があるのかを考察した。その上、心理動詞カテゴリーは動詞の下位カテゴリーであるので、心理動詞を孤立的に見ないで、心理動詞と一緒に動詞全体を構築する静態動詞と外的運動動詞との連続関係をも考察してきた。

(趙 2016 : 206-207)

本研究も趙 (2016) と同様に、心理動詞は状態性の高いものから動作性の高いものまで様々なものがあるという立場をとることを主張する。

しかし、2.1 節で述べたように、趙 (2016) の分類に問題があり、心理動詞をその分類のように中間的存在として捉えていいのか疑問に思われる。

## 2.2.5 心理動詞の位置付けに関する先行研究のまとめ

以上、心理動詞の位置付けに関する先行研究を見てきた。先行研究の立場や問題点などをまとめると、表 2-7 のように示す。

表 2-7 心理動詞の位置付けに関する先行研究のまとめ

立場	先行研究	判断基準	問題点
①〈状態〉を表すとする立場	奥田 (1977, 1988)	スル形で現在を表す	「喜ぶ」「悲しむ」のようにスル形で現在を表さないものもある
②〈動き〉を表すとする立場	三原 (2000)	①シテイル形を持つかどうか、②スル形が示す時制、③完了を表す数量詞連結構文が成立するかどうか、④動作持続のシテイル形が事態の成立済み	「そんなこと、困るよ」「あいつの喋り方はイライラする」のように、〈状態〉を表すものもある
	吉永 (2008)	①「～(し) はじめる」、②「もうちょっとで～そうになる」、③「～(し) おわる」、④結果構文、⑤「～かけ」構文、⑥完了的時間成分「～で」との共起	
	仁田 (2012)	①「(し) はじめる/だす」や「(し) てくる」が付加できるかどうか、②「(し) そうだ」が表す意味は、直後に起こる事態の徴候か、外見から推定される現前のありようか、③発話時点を明示する時の成分を共起させる場合、ル形で現在を表すかどうか	
③〈状態〉と〈動き〉の間であるとする立場	鈴木 (1957)	①ル形で現在を表す、②動作的意味が含まれる、③持続性がある	具体的にどのように中間に存在しているかについては論じていない
	工藤 (1995)	アスペクト対立があるが、人称性と絡み合っている	
	小竹 (2011)	①時の従属節に現れる選好差、②スル形が属性解釈を受ける場合に〈状態〉を表す	
④状態性の高いものから動作性の高いものまで様々なものがあるとする立場	趙 (2016)	テンス・アスペクト、人称制限、文の意味機能の変異の連続性 (詳しくは 2.1 節を参照)	テンス・アスペクト、人称制限、文の意味機能の考察に問題がある

このように、先行研究には①〈状態〉を表すとする立場、②〈動き〉を表すとする立場、③〈状態〉と〈動き〉の間であるとする立場、④状態性の高いものから動作性の高いものまで様々なものがあるとする立場という4つの立場がある。

このうち、本研究では④心理動詞は状態性の高いものから動作性の高いものまで様々なものがあるとする立場をとり、テンス・アスペクト、人称制限、文の意味機能の観点から心理動詞の内部分類を行うとともに、〈動き〉を表す動詞や〈状態〉を表す動詞と比較し、具体的にどのように状態性の高いものから動作性の高いものまであるのかについて見ていく。

## 2.3 心理動詞の自己制御性、即時性に関する研究

次に、本節では心理動詞の自己制御性、即時性に関する先行研究について見る。これには、森山(1988)、仁田(1988, 1991, 2004)、岩崎・大野(2007)、小竹(2011)、松野(2016)などがある。以下、これらについて順に見ていく。

### 2.3.1 心理動詞の自己制御性に関する研究

まず、心理動詞の自己制御性について見る。これには、森山(1988)、仁田(1988, 1991, 2004)、小竹(2011)などがある。

#### 2.3.1.1 森山(1988)の研究

森山(1988: 221-222)では、心理動詞は一般に無意志的であるため、(2-116)～(2-118)のような意志的な意味を表す「てみる」「わざと」「肯定の命令」の表現には使えないが、(2-119)のように否定の命令文として使え、防止の意味になり、それも自己制御性に関わると主張している。

(2-116) \*惜しんでみた。

(2-117) ?わざと 惜しんだ。

(2-118) \*惜しめ。

(2-119) そんなことをいちいち惜しんではいけない。

(森山 1988 : 221-222)

このように、森山(1988)では心理動詞は否定の命令文に使われ、防止の意味を表し、自己制御性が完全でないわけではないと指摘している。これに関しては以下の仁田(1988, 1991, 2004)、小竹(2016)も論じている。

### 2.3.1.2 仁田(1988, 1991, 2004)の研究

次に、仁田(1988, 1991, 2004)は「命令や意志が可能」かどうかを基準に、動詞が表す事態を「自己制御的な事態」と「非自己制御的な事態」に分け、「自己制御的な事態」をさらに「達成の自己制御性がある事態」と「過程の自己制御性がある事態」に分けている。このうち、「達成の自己制御性」は事態の成立・達成までもが自己制御的なことであり、「過程の自己制御性」は事態の成立・達成に向けての過程段階のみが自己制御的なことであるとしている。次の(2-120)～(2-123)を例にとると、(2-120)～(2-122)は命令文として成り立つのに対し、(2-123)は意志文として成り立たないため、「渡す」「落ち着く」「クヨクヨする」は自己制御性を持っているが、「困る」は自己制御性を持っていないと論じている。

- |                                    |            |
|------------------------------------|------------|
| (2-120) すぐにお客さんに書類を <u>お渡ししろ</u> 。 | (達成の自己制御性) |
| (2-121) 洋平、まあ <u>落ち着け!</u>         | (過程の自己制御性) |
| (2-122) 君、そんな事ぐらいで <u>クヨクヨするな!</u> | (過程の自己制御性) |
| (2-123) *彼らの無責任さに <u>困ろう</u> 。     | (非自己制御的)   |

(仁田 2004 : 41-42)

また、(2-120)～(2-122)はいずれも命令文として成り立つが、(2-120)では「[(君ガ) スグニオ客サンニ書類ヲ渡ス] という事態は、事態の成立・達成までもが自己制御的である」がゆえに、「達成の自己制御性」があると述べている。これに対し、(2-121)では「[洋平ガ落ち着ク] という事態では、制御できるのは、落ち着くという事態の成立・達成そのものではなく、事態の成立・達成に向けての過程段階のみである」ため、「達成の自己制御性」ではなく、「過程の自己制御性」を持っていると述べている。(2-122)も、「君がそんな事ぐらいでクヨクヨしない」という事態で制御できるの

は過程段階のみであるため、「過程の自己制御性」を持っていると述べている。

このように、仁田 (1988, 1991, 2004) では、命令や意志の形で判断し、「落ち着く」「クヨクヨする」などの心理動詞は肯定あるいは否定の場合に過程の自己制御性を持っていると主張している。前節の森山(1988)を受け継いだ上で、仁田 (1988, 1991, 2004) は心理動詞の自己制御性についてさらに詳しく考察し、過程の自己制御性という概念を主張している。本研究は仁田(1988, 1991, 2004)に従い、肯定の命令文(「シロ」の形)も否定の命令文(「スルナ」の形)も自己制御性の判断基準とする。

### 2.3.1.3 小竹(2011)の研究

次に、小竹 (2011) は森山 (1988) や仁田(1988, 1991, 2004)を参考にして、「～するな」という否定の命令文の成立可能性によって心理動詞の自己制御性を判断している。すなわち、成立不可能な心理動詞は経験者がより被動的であり、成立可能な心理動詞は経験者がより主動的であると述べている。例えば、小竹 (2011 : 88-89) は (2-124) の「困る」は否定の命令文を形成できないのに対し、(2-125) の「怒る」は形成できると指摘している。つまり、「困る」と比べ、「怒る」の場合、経験者は「怒らないように努める」ことができ、より自己制御性が高いということになる。

(2-124) ”急な変更に困るな。

(2-125) 子供のいたずらで怒るな。

(小竹 2011 : 88-89)

以上のように、森山 (1988)、仁田 (1988, 1991, 2004)、小竹 (2011) は命令文(「シロ」の形および「スルナ」の形)に使えるかどうかで心理動詞の自己制御性について述べている。本研究は森山 (1988)、仁田 (1988, 1991, 2004)、小竹 (2011) を参考にして、心理動詞が命令文(「シロ」の形または「スルナ」の形)に使えるかどうかでその自己制御性を判断する。

### 2.3.2 心理動詞の即時性に関する研究

次に、心理動詞の即時性に関する先行研究について見る。ここの即時性は、岩崎・大野 (2007) を参考にして見ている。岩崎・大野 (2007) では、「即時文は、話者がコミュ

ニケーションの現場において瞬時に(つまり、「即時的」に)発する文である」(p. 136)と論じている。また、このうち、「周囲とは直接無関係に、話し手の中で自然発生的に起こ」(p. 136)り、「自分の感情や感覚を表明する」(p. 136)という場合があるとしており、「あつ:」(熱い)という例を挙げている。本研究では、(2-126) (2-127)のように心理動詞にも即時性を持つものがあり、即時性を持つ心理動詞は(2-128)～(2-130)のように〈状態〉を表す形容詞と近似していると考ええる。

(2-126) {驚いた／ビックリした} ！

(2-127) {むかつく／腹が立つ} ！

(2-128) {嬉しい／悲しい} ！

(2-129) {おいしい／うまい} ！

(2-130) {大きい／でかい} ！

以下、心理動詞の即時性に関する先行研究である趙(2016)、松野(2016)を見る。

### 2.3.2.1 趙(2016)の研究

次に2.1節で述べたように、趙(2016)は次の表2-8のように心理動詞の一人称の発話機能を分析している。

表 2-8 趙(2016)における心理動詞の一人称の発話機能

動詞の例	テンス・アスペクト	スル形	シタ形	シテイル・シテイタ形
感謝する、祈る、願う、恨む、憎む、軽蔑する、憧れる、同情する等		働きかけの意志表出； 態度的意思表示	伝達	伝達
疑う、思う、考える等		態度的意思表示		
心配する、恐れる、喜ぶ、悩む、苦しむ、迷う等		φ		
感動する、ほっとする、がっかりする等		受動的感情の表出 (±評価)	受動的感情の表出 (±評価)；伝達	
呆れる、困る、疲れる、驚く、びっくりする、弱る、参る等			受動的感情の表出 (±評価)；即時的感嘆；伝達	

(表2-8は趙(2016: 87)の表8を修正したものである。)

このうち、「即時的感嘆」は一語文的に用いられるものが多く、「発話現場における即時的な感情や感想を直接に言語化するものである」(p. 78) と述べている。例えば、(2-131) は、聞き手がその場にいるが、聞き手の存在を意識しないまま、自分の「困る」という反応を表すものである。

(2-131) 彼女はいまにも泣き出しそうな顔をしていた。「困ったな」と彼はいった。

(『男ともだち』) (趙 2016 : 79)

しかし、趙 (2016) の分類には不備が見られる。例えば「悩む」「迷う」を「伝達」に入れているが、(2-132) (2-133) に見られるように即時文に使うことができる。

(2-132) 悩むなあ。

(2-133) ああ、迷う。

このように、趙 (2016) は即時文を「困った」のようにシタ形になる場合しか見ていないが、本研究では (2-132) (2-133) のようにスル形になる場合も含めて考察する。

### 2.3.2.2 松野(2016)の研究

次に松野 (2016) では、心理動詞のうちの感情を表すものを対象に、(2-134) のようにスル形またはシタ形で感情主の現在の感情を表すことができるものもあれば、(2-135) のようにスル形またはシタ形では現在の感情を表すことができないものもあると述べている。

(2-134) a. むかつく!

b. あきれた!

(2-135) \*喜ぶ! / \*喜んだ!

(松野 2016 : 10)



また、感情主の現在の感情を表すもののうち、(2-136a) のように独り言として成立するものもあれば、(2-136b) のように独り言として成立しないものもあると指摘している。(2-137a) (2-137b) も同様である。

- (2-136) a. (独り言で) むかつく！  
 b. (独り言で) \*憎む！
- (2-137) a. (独り言で) あきれた！  
 b. (独り言で) \*感心した！

このように、松野(2016)は独り言として成立し、かつ感情主の現在の感情を表すものには、「(プレゼントをもらって)うれしい！」というように感情形容詞のことが多いが、感情を表す動詞の場合もあると指摘している。

本研究は松野(2016)の指摘に従い、感情を表す動詞を含め、心理動詞全体を対象に考察する。また、松野(2016)を踏まえた上で、形式的な基準も立てる。本研究では次の(2-138) (2-139) のように「わっ／あっ／ああ」などの感動詞をつけて話し手の即時的な感情を表すことができる文を即時文とする。

- (2-138) (突然雷が鳴って思わず)「わっ、ビックリした」と叫んだ。
- (2-139) (どちらの料理を注文するか迷い、思わず)「ああ、迷うなあ」と呟いた。

### 2.3.3 心理動詞の自己制御性、即時性に関する先行研究のまとめ

以上、心理動詞の自己制御性、即時性に関する先行研究を見てきた。先行研究の主張をまとめると、表 2-9 のようになる。

表 2-9 心理動詞の自己制御性、即時性に関する先行研究のまとめ

先行研究		主張
自己制御性	森山 (1988)	心理動詞は一般に無意志的であるが、否定の命令文として使える場合があり、それも自己制御性に関わる。
	仁田 (1988, 1991, 2004)	命令や意志の形で判断し、「落ち着く」「クヨクヨする」などの心理動詞は肯定あるいは否定の場合に過程の自己制御性を持っている。
	小竹 (2011)	否定の命令文を基準に、自己制御性が相対的に高いものもあれば、低いものもある。
即時性	趙 (2016)	「即時的感嘆」とは、「困った」のように発話現場における即時的な感情や感想を直接に言語化する場合である。
	松野 (2016)	独り言として成立し、かつ感情主の現在の感情を表すものには、感情を表す動詞の場合もある。

本研究では先行研究を踏まえた上で、123語の心理動詞を対象に、命令文（「シロ」の形および「スルナ」の形）に使えるかどうかで自己制御性を判断し、次に（2-140）（2-141）のように即時文に使えるかどうかで即時性を判断する。

（2-140）（突然雷が鳴って思わず）「わっ、びっくりした。」と叫んだ。

（2-141）（どちらの料理を注文するか迷い、思わず）「ああ、迷うなあ」と呟いた。

（（2-138）（2-139）の再掲）

2.1節で述べたようにテンス・アスペクト、人称制限、文の意味機能で分類した各タイプの特徴を見て、心理動詞の内部分類の連続性、および〈動き〉を表す外的運動動詞や〈状態〉を表す静態動詞や形容詞との接近性を検証する。

## 2.4 心理動詞の格に関する研究

次に、本節では心理動詞の格に関する先行研究について見る。これには、寺村(1982)、杉岡(1992)、山梨(1993)、Bando(1996)、佐藤(1997)、清水(2007, 2014)、外崎(2013)、大槻(2014)、趙(2016)などがある。以下、これらについて順に見ていく。

### 2.4.1 寺村(1982)の研究

寺村(1982)では、心理動詞の格と意味役割に関して、二格は〈誘因〉を表すのに

対し、ヲ格は〈対象〉を表すとしている。例えば、(2-142)の「驚く」「怯える」「ぎよっとする」はニ格をとり、「物音」のために一時的に感情が動くのに対し、(2-144)の「愛する」「憎む」はヲ格をとり、「人」は心理的働きかけの対象であり、「感情の動きによって必ずしも影響を受けるわけではない」(p. 143)という違いがあると論じられている。(2-143)(2-145)も同様である。

(2-142) 物音ニ オドロク／オビエル／ギョットスル

(2-143) ソノ結果ニ 失望スル／ガッカリスル

(寺村 1982 : 140)

(2-144) 人ヲ 愛スル／憎ム

(2-145) 彼ヲ ウラヤム／ウラム／ネタム

(寺村 1982 : 142)

また、寺村(1982)は一部のニ格が〈対象〉を表すとも指摘している。例えば、(2-146)のように「惚れる」は直接受身になり、「男」の「女」への働きかけを表すことから、「惚れる」のニ格が〈対象〉という意味役割を表すことが分かる。

(2-146) 一女は男から好かれ、男から惚れられるものよ。

菊次はそういう。女のほうから惚れると必ず苦勞する、相手のよしあしにかかわらず、男には決して惚れるものではない、というのである。

(男ガ女ヲ好ク、男ガ女ニ惚レル)

(山本周五郎『なんの花か薫る』)(寺村 1982 : 227)

しかし、一部の心理動詞のニ格は〈誘因〉と〈対象〉のどちらか一方を表すのではなく、両方を表す場合もある。例えば、(2-147)の「呆れる」のニ格は(2-147b)のように直接受身になるため、〈対象〉を表すだけでなく、(2-147c)のようにニ格名詞句「太郎」が使役文の主語になり、また、(2-147d)のようにニ格を「のせいで」に言い換えることができるため、〈原因〉も表すと考えられる。このように、寺村(1982)は心理動詞がとる格の意味役割の一部を見逃している。

- (2-147) a. 花子は太郎に呆れた。  
 b. 太郎は花子に呆れられた。  
 c. 太郎は花子を呆れさせた。  
 d. 花子は太郎のせいで呆れた。

#### 2.4.2 杉岡(1992)の研究

次に、杉岡(1992)では、日本語の心理動詞を大きく分けて(2-148)のように二格をとるものと、(2-149)のようにヲ格をとるものの2つがあると論じている。

(2-148) [Aが Bに 動詞]

太郎が試験の結果に失望した。

花子がニュースにおどろいた。

(2-149) [Aが Bを 動詞]

太郎がテニスを楽しんだ。

花子が失敗を恐れる。

(杉岡 1992 : 365)

また、(2-150)のようにいくつかの心理動詞はこの両方のパターンをとることができると指摘している。

(2-150) a. 花子が合格の知らせによるこんだ。

花子が志望校合格をよるこんだ。

b. 村人が牧師の死の知らせに悲しんだ。

村人が牧師の死を悲しんだ。

(杉岡 1992 : 365)

心理動詞の格の意味役割について、杉岡(1992)は二格の場合には〈原因〉を表し、ヲ格の場合には〈対象〉を表すと述べ、両方のパターンをとるものを例に説明している。例えば、「喜ぶ」は(2-151)では、「知らせ」という「直接の対象ではなくそれを伝えるもの」(p. 366)が名詞句になっており、二格をとる方が自然であるのに対し、

(2-152) では、「父の無事」という「対象の内容を表す」(p. 366) ものが名詞句になっており、ヲ格をとる方が自然であるとしている。

(2-151) a. 花子はその知らせによろこんだ。

b. ?花子はその知らせをよろこんだ。

(2-152) a. ?花子は父親の無事によろこんだ。

b. 花子は父親の無事をよろこんだ。

(杉岡 1992 : 366)

しかし、先の寺村 (1982) で指摘されているように、(2-153) の「惚れる」などのニ格をとる心理動詞は受身化ができることから、〈原因〉ではなく〈対象〉を表すと考えられる。

(2-153) a. 太郎は花子に惚れた。

b. 花子は太郎 {に / から} 惚れられた。

さらに、上の「その知らせに」の「に」は「によって」の意味であるため、〈原因〉と捉えることもできるが、(2-153a) の「花子に」の「に」は「によって」に置き換えられないため、〈原因〉と捉えることは難しい。このように心理動詞におけるニ格の意味についてはさらなる検討が必要である。

### 2.4.3 山梨(1993)の研究

次に、山梨 (1993) では格の意味役割には複数の解釈が可能であり、ゆれがあるものがあると主張している。例えば、(2-154) の「怒る」がとるニ格は〈対象格 (刺激)〉と〈原因格〉の2つの解釈ができるとしている。「娘の愚痴」が〈対象〉として捉えられる場合、経験者は娘の愚痴の内容に対して感情を変化させると解釈されるのに対し、「娘の愚痴」が〈原因〉として捉えられる場合、経験者は娘が愚痴を言っていることに怒り、愚痴は経験者の心的変化を外的要因として引き起こすと解釈されるとしている。

(2-154) 娘の愚痴に怒る。

(山梨 1993 : 46)

このように、山梨 (1993) は格の意味役割は必ずしも唯一的に決められるのではなく、複数の解釈がある場合が多いと論じている<sup>13</sup>。これに関しては 2.4.8 節の大槻 (2014) のところで再度取り上げることにする。

#### 2.4.4 Bando (1996) の研究

次に、Bando (1996) は日本語の心理動詞を格標示の観点から大きく 3 つに分けている。このうち、(2-155) の「あこがれる」「困る」のようにニ格しかとらないものを A グループとし、(2-156) の「悲しむ」「喜ぶ」のようにヲ/ニ格両用のものを B グループとし、(2-157) の「嫌う」「好む」のようにヲ格しかとらないものを C グループとしている。

A グループ : (2-155) a. 太郎は先輩の活躍 { \*を / に } あこがれた。

b. 太郎は後輩の不祥事 { \*を / に } 困った。

B グループ : (2-156) a. 太郎は後輩の変貌 { を / に } 悲しんだ。

b. 太郎は数年ぶり的大雪 { を / に } 喜んだ。

C グループ : (2-157) a. 太郎は後輩の変貌 { を / \*に } 嫌った。

b. 太郎は後輩の世話 { を / \*に } 好んだ。

このように分けた上で、Bando (1996) は以下の 3 点を主張している。まず、A グループのニ格は必ずしも〈原因〉を表すわけではないとしている。例えば、「驚く」は (2-158a) のようにニ格を〈原因〉を表すデに置き換えられ、また、(2-158b) のよう

<sup>13</sup> 山梨 (1993) はデ格を例に、表 2-i のように格の意味役割は相対的スケールがあるものであると指摘している。

表 2-i 山梨 (1993) における格の意味役割のスケール

〈具格的〉	1. カギで ドアをあける。
:	2. 片足で 立つ。
:	3. 扇風機で シャツをかかわす。
:	4. モンローの魅力で 観客を惑わす。
〈原因格的〉	5. ガンで 死ぬ。

に「太郎」と「突然の電話」を入れ替えることによって交替使役構文を表現することもできることから、二格名詞句の「突然の電話」は〈原因〉であるとしている。一方、「憧れる」は(2-159a)のように二格が〈原因〉を表すデに置き換えられず、また、(2-159b)のように交替使役構文にならないことから、二格名詞句の「憧れる」は〈原因〉ではないとしている。

(2-158) a. 太郎は突然の電話 {に/で} 驚いた。

b. 突然の電話が太郎を驚かせた。

(2-159) a. 花子はアイドル {に/\*で} 憧れた。

b. \*アイドルが花子を憧れさせた。

次に、Bando (1996) は B グループの二格には〈原因〉と〈対象〉の2つと解釈できると指摘している。例えば、「楽しむ」は(2-160)では「太郎」が他のものではなく「その音楽」を楽しんだことを表し、ヲ格名詞句の「その音楽」は〈対象〉であるのに対し、(2-161)では(2-160)と同じ解釈ができるだけでなく、「太郎」は「その音楽」がよかったため、「雰囲気」などを楽しんだというような解釈も可能であり、この場合、二格名詞句である「その音楽」は〈対象〉または〈原因〉という2つの可能性があるとしている。

(2-160) 太郎はその音楽を楽しんだ。

(2-161) 太郎はその音楽に楽しんだ。

最後に、Bando (1996) は B グループのヲ格名詞句は C グループのヲ格名詞句と異なる点があると指摘している。例えば、(2-162)のようにヲ格名詞句は具体名詞の「その本」の場合、B グループの「喜ぶ」も C グループの「愛する」も成立するのに対し、(2-163)のようにヲ格名詞句は普通名詞の「本」の場合、C グループの「愛する」は成立するが、B グループの「喜ぶ」は成立しないとしている。このように、Bando (1996) は B グループのヲ格も C グループのヲ格も〈対象〉を表すが、C グループの〈対象〉は一般的・習慣的なものである場合もあるが、B グループの〈対象〉は具体的かつ事態性があるものであると指摘している。

(2-162) a. 太郎はその本を喜んだ。

b. 太郎はその本を愛した。

(2-163) a. \*太郎は本を喜んだ。

b. 太郎は本を愛した。

しかし、Bando (1996) は2点目として、Bグループのニ格には〈原因〉と〈対象〉の2つと解釈できると主張しているが、単に意味的に説明しているのみで、形式的基準を立てていない。また、(2-164)のように一部のヲ／ニ格両用のものは直接受身化ができないことから、そのヲ格もニ格も〈原因〉のみを表し、〈対象〉を表さないのではないかと思われる<sup>14</sup>。

(2-164) a. 花子が進路のことを／に悩んだ。

b. \*進路のことが花子に悩まれた。

#### 2.4.5 佐藤(1997)の研究

次に、佐藤(1997)はニ格をとる心理動詞を対象に考察している。佐藤(1997)は主に寺村(1982)に従い、まずニ格をとる心理動詞を受身化できるものをタイプⅠとし、受身化できないものをタイプⅡとしている。その上で、Bando(1996)と同様に交替使役構文からも考察している。

例えば、「感謝する」のようにタイプⅠのニ格心理動詞は(2-165b)のように受身化できるのに対し、「驚く」のようにタイプⅡのニ格心理動詞は(2-166b)のように受身化できない。このことから、タイプⅠのニ格は〈対象〉を表すのに対し、タイプⅡのニ格は〈対象〉を表さないとしている。一方、タイプⅠは(2-165c)のように「花子」と「太郎」の2項を交替させることができないのに対し、タイプⅡは(2-166c)のように「彼」と「東京の物価高」を交替させることができる。佐藤(1997)はこのような使役構文を野田(1991)に従い、交替型使役と呼び、主語は影響者であり、〈原因〉

<sup>14</sup> このことは外崎(2013)でも指摘されている。(2.4.7節参照)



を表すとしている。このように、佐藤（1997）では、タイプⅠは受身化できるのに対し、交替型使役化できないということから、その二格は〈対象〉を表し、〈原因〉を表さないとし、その一方で、タイプⅡは受身化できないのに対し、交替型使役化できるということから、その二格は〈対象〉を表さず、〈原因〉を表すとしている。

タイプⅠ：(2-165) a. 多くの少女たちがパリにあこがれた。 (佐藤 1997：120)

b. パリが多くの少女たち {に／から} あこがれられた。

(佐藤 1997：120) (受身化可能)

c. \*パリが多くの少女たちをあこがれさせた。

(交替型使役化不可能)

タイプⅡ：(2-166) a. 彼は東京の物価高に驚いた。 (佐藤 1997：123)

b. \*東京の物価高は彼 {に／から} 驚かれた。(受身化不可能)

c. 東京の物価高が彼を驚かせた。(交替型使役化可能)

しかし、4.2.1.1で述べたように、「呆れる」などの二格をとる心理動詞の場合は直接受身にも交替使役にもなるため、その二格は〈対象〉と〈原因〉の両方を表すと思われる。このように、佐藤（1997）も先の寺村（1982）と同様に二格の意味役割について見逃している場合がある。

(2-167) a. 花子は太郎に呆れた。

b. 太郎は花子に呆れられた。

c. 太郎は花子を呆れさせた。

#### 2.4.6 清水(2007, 2014)の研究

次に、清水（2007, 2014）は寺村（1982）、佐藤（1997）などを参考にし、心理動詞をまずとる格から、A. 二格をとるもの（二格型心理動詞と呼ぶ）、B. 二格とヲ格の両方をとるもの（両用型心理動詞と呼ぶ）、C. ヲ格をとるもの（ヲ格型心理動詞と呼ぶ）の3種類に分けた上で、寺村（1982）に従い、受身化できるか否かを基準として二格型心理動詞をさらに2つに分け、受身化できないものを二格誘因型心理動詞とし、受身化できるものを二格対象型心理動詞としている。これを図2-3に示す。

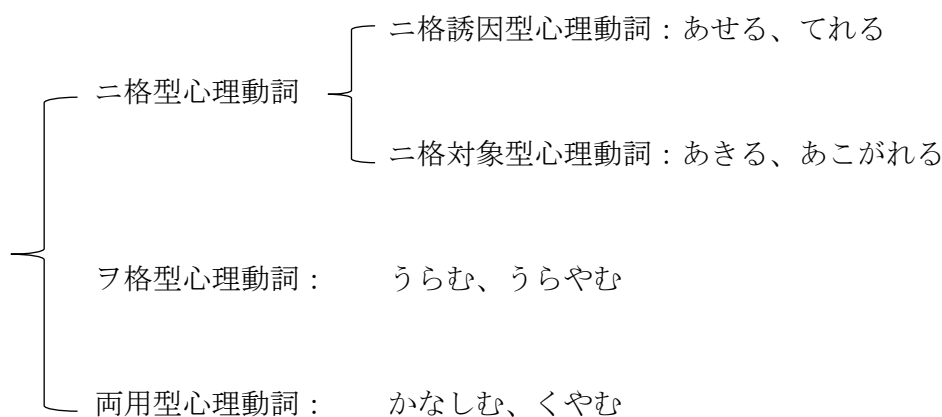


図 2-3 清水 (2007, 2014) における心理動詞の格による分類

このように分類した上で、清水 (2007, 2014) は「引用構文」における名詞句と引用節の関係という観点から各下位分類を考察している。まず、二格誘因型の場合、二格名詞句を外的刺激として感情が生起し、「その感情の応答・反応が引用節として表出されるという関係が多く見られる」(p. 27) と指摘している。例えば、(2-168) では「おそらく 40 センチは短くなったであろう姿」の知覚がきっかけとなり、「随分思い切ったなあ」という「驚き」の感情表出があるとしている。

(2-168) この 7 月、高校 1 年の娘が突然、バツサリ髪を切って帰宅した。おそらく 40 センチは短くなったであろう姿に「随分思い切ったなあ」と驚いた。

(『朝日』2005 年 8 月 19 日、朝刊) (清水 2007 : 27)

これに対し、二格対象型の場合、「二格で標示された名詞句と引用節の間に、「主題—説明」関係が多く成り立つ」(p. 30) と指摘している。例えば、(2-169) の名詞句である「プロ野球選手のイチロー」と引用節「守備がうまくてかつこいい」は (2-169') のように「主題」の「～ハ」で言い換えられることから、両者は「主題—説明」関係であるとしている。

(2-169) 地元の野球チームでは右翼手。「守備がうまくてかつこいい」と、プロ野

球選手のイチローにあこがれる。

(『朝日』2006年7月12日、朝刊)

(2-169') プロ野球選手のイチローハ「守備がうまくてかっこいい」

(清水 2007 : 30)

ヲ格型心理動詞の場合も (2-170) のようにニ格対象型と同様に、「主題－説明」関係が多く成り立つと指摘している。

(2-170) 「日本開催なら」「急造チームでなければ」といった見方を、山中監督は「言い訳になる」と嫌った。

(『朝日』1995年6月30日、朝刊)

(2-170') 「日本開催なら」「急造チームでなければ」といった見方ハ「言い訳になる」

(清水 2007 : 28)

また、両用型心理動詞は (2-171a) のように「刺激－応答」関係もあれば、(2-171b) のように「主題－説明」関係もあるとしている。

(2-171) a. 南極点到達の知らせに喜一さんは「横断成功ではないが初志を貫いたのだから、よくやったとほめてやりたい」と喜ぶ。

(『朝日』1989年12月12日、夕刊)

b. バレンタイン監督との再会、アロマーらと並んでの入団発表……。そのすべてを「すごくうれしい」と喜んだ。

(2-171b') そのすべてハすごくうれしい。

(清水 2007 : 29)

このように、清水 (2007, 2014) は心理動詞による「引用構文」における2つの意味関係(「刺激－応答」関係、「主題－説明」関係)から、格と意味役割の対応・ずれについて考察し、格の意味役割と「引用構文」における関係について表 2-10 のようにまとめている。

表 2-10 清水 (2007 : 36) における格の意味役割と「引用構文」との関係

型	例	格	意味役割	「引用構文」における関係
ニ格誘因	物音ニ驚く	ニ	誘因	刺激－応答
ニ格対象	歌手ニ憧れる	ニ	対象	主題－説明
両用	知らせニ喜ぶ	ニ	誘因	刺激－応答
	再会ヲ喜ぶ	ヲ	対象	主題－説明
ヲ格	戦争ヲ憎む	ヲ	対象	主題－説明

しかし、「引用構文」における対応関係について、清水(2007, 2014)も述べているように、「心理動詞の型ごとの「引用構文」における関係は、全ての用例において成り立つわけではない」(p. 36)。例えば、「憎む」はヲ格をとる心理動詞であり、清水(2007)における「ヲ格対象型」に属するが、(2-172)のようにヲ格名詞句「自分を苦しませる者」と引用節「あいつのせいだ」は「主題」の「～ハ」で言い換えられないことから、両者の関係は「主題－説明」ではないことが分かる。清水(2007)は両用型「喜ぶ」を例に調べ、ニ格をとる場合には「刺激－応答」関係が63%の割合で成り立ち、ヲ格をとる場合には「主題－説明」関係が82%の割合で成り立つという結果を示しているが、ほかの語については詳しく調べておらず、このような傾向性がすべての心理動詞に当てはまるか疑問に思われる。

(2-172) 自分を苦しませる者を「あいつのせいだ」と憎みます。

(ameblo.jp/kiku-tan/entry-12155208703.html) 2022. 7. 29 閲覧

≠自分を苦しませる者ハあいつのせいだ。

#### 2.4.7 外崎(2013)の研究

次に、外崎(2013)は心理動詞の格について、寺村(1982)、佐藤(1997)などを踏まえた上で、受身化できるかどうかで以下の4点を指摘している。

1つ目は、ヲ格をとる心理動詞は必ずしも受身化ができるわけではないことである。例えば、(2-173)の「後悔する」はヲ格をとる心理動詞であるが、(2-173b)のように

受身化ができないとしている。

(2-173) a. 太郎が軽率な行動を後悔した。

b. \*軽率な行動は太郎に後悔された。

(外崎 2013 : 17)

2つ目は、二格をとる心理動詞は必ずしも受身化できないわけではないことである。例えば、(2-174)の「あきる」は二格心理動詞であるが、(2-174b)のように受身化ができる。この点については従来の研究では論じられていない。

(2-174) a. 太郎が花子の言動にあきた。

b. 花子の言動は太郎に／からあきられた。

(外崎 2013 : 17)

3つ目は、ヲ／二格両用の心理動詞は受身化できるものもあれば、できないものもあることである。例えば、(2-175)の「悲しむ」も(2-176)の「悩む」もヲ／二格両用のものであるが、(2-175b)のように「悲しむ」は受身化できるのに対し、(2-176b)のように「悩む」は受身化できない。

(2-175) a. みんながその男の訃報を／に悲しんだ。

b. その男の訃報がみんなに悲しまれた。

(2-176) a. 太郎が成績が悪いことを／に悩んだ。

b. \*成績が悪いことが太郎に悩まれた。

(外崎 2013 : 17)

4つ目は、上のヲ／二格両用の心理動詞のうち、受身化できないものの場合、格の意味役割は〈対象〉ではなく、〈原因〉のみであることである。例えば、(2-177)のヲ／二格両用の心理動詞「悩む」は(2-177b)のように使役受身化できるという点では、(2-178)の二格をとる心理動詞「安心する」と一致しており、(2-179)のヲ格をとる心理動詞「恐れる」と異なるとしている。このように、外崎(2013)では、「悩む」は

先に述べたように受身化できないだけでなく、二格心理動詞と同様に使役受身化ができることから、ヲ格も二格もとりうるが、格の意味役割は〈対象〉ではなく、〈原因〉のみであると指摘されている。

- (2-177) a. 太郎が成績の悪さを／に悩んだ。  
 b. 太郎は成績の悪さに悩ませられた／悩まされた。(使役受身化)
- (2-178) a. 太郎がその知らせに安心した。  
 b. 太郎がその知らせに安心させられた。(使役受身化)
- (2-179) a. 学生達が山田先生を恐れた。  
 b. \*学生達は山田先生に恐れさせられた。(使役受身化)

(外崎 2013 : 22)

本研究は外崎(2013)の観点に従い、ヲ格、二格という格形式と〈対象〉〈原因〉という意味役割との対応関係が複雑であり、必ずしもヲ格の場合には〈対象〉を表し、二格の場合には〈原因〉を表すわけではないことを主張したい。

しかし、外崎(2013)の1点目から3点目までの指摘は、単にヲ格や二格をとる心理動詞は受身化できるかどうかについて述べるにとどまり、意味役割を明らかにしていない。例えば、外崎(2013)は「後悔する」を例に、ヲ格をとる心理動詞は必ずしも受身化できないと述べているが、「後悔する」のヲ格が〈対象〉を表さず、〈原因〉を表すことを意味するかどうかについては言及していない。「後悔する」は(2-180b)のように受身化できないのに対し、(2-180c)のように交替使役化できるということから、そのヲ格が〈原因〉のみを表すと思われる。このように、本研究では受身化だけでなく、交替使役化テストを用いてヲ格、二格の意味役割を判断する。

- (2-180) a. 太郎が軽率な行動を後悔した。  
 b. \*軽率な行動は太郎に後悔された。  
 c. 軽率な行動は太郎を後悔させた。

#### 2.4.8 大槻(2014)の研究

次に、大槻(2014)ではヲ格、二格の意味役割が〈対象〉または〈原因〉の時のイ

メージを考察している。その理論的枠組みとして、大槻 (2014) は Croft (1991, 2012) に従い、心的事象には以下のような双方向のエネルギー伝達があることを主張している。図 2-4 のように、一方は経験者 (experiencer) が刺激 (stimulus) に対して意識を向けるもので、もう一方は刺激が経験者の心的状態を変えるものであると述べている。このように、大槻 (2014) は Croft (1991, 2012) に従い、心理動詞は経験者から刺激への一方通行の働きかけではなく、経験者と刺激との間の双方向のやり取りを表すという点で特異であることを指摘している。

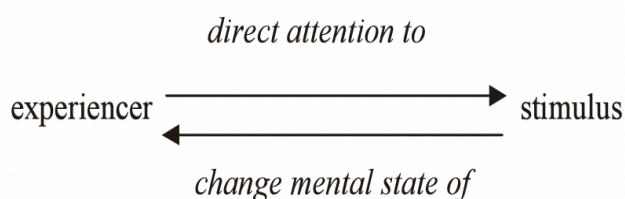
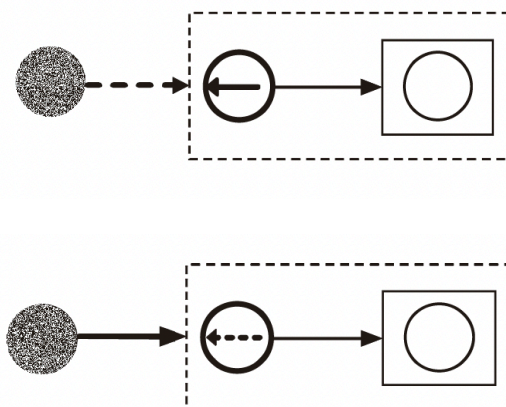


図 2-4 Croft (2012) による心的事象の双方向性

その上で、大槻 (2014) ではヲ格、ニ格の意味役割が〈対象〉または〈原因〉の場合は図 2-5 のように示されると提案している。経験者から刺激に向かう矢印は経験者の中に描くことで、経験者から刺激に向けられる意識や刺激に対する評価は経験者の内的なエネルギーであり、刺激に対して直接的な影響を与えないことを表すとしている。また、経験者とその心的状態変化を破線の四角で囲むことで、経験者とその心的状態変化は前景化されているのに対し、刺激を表すニ格は必須項ではないため、背景化されていることを表すとしている。



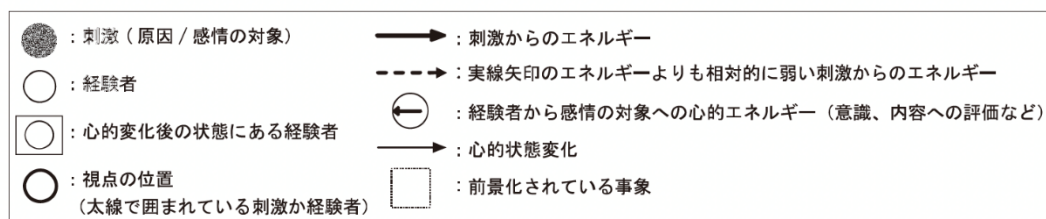


図 2-5 大槻 (2014:52-53)におけるヲ格、ニ格の意味役割のイメージ

さらに、〈対象〉の場合、経験者からの心的エネルギーは刺激より強いため、実線で表されるとしている。また、経験者からのエネルギーが強いということは、経験者は〈対象〉の内容を評価した上で心的状態を変化させることを意味し、経験者に心的状態のコントロールの余地があるとも言えると述べている。そして、刺激からのエネルギーは相対的に弱いため破線で表されるとしている。

例えば、(2-181) は、お母さんが久しぶりにエイミー (あの子) に会った時、その成長ぶりを評価して喜ぶであろうことを表すとしている。エイミーの成長ぶりがお母さんに影響を与えるというよりは、お母さんの意識がその成長ぶりに向かって感情は変化すると指摘されている。

(2-181) 髪もひとりでゆいませ。今はボタン穴のかがり方と靴下のつぎ方を教えてやっております。ほんとうに一生懸命にいたしておりますから、お帰りになりましたらきっとあの子のよくなっていることをお喜び頂けると存じます。

(『愛の若草物語 (若草物語 (下) 原作)』) (大槻 2014 : 51)

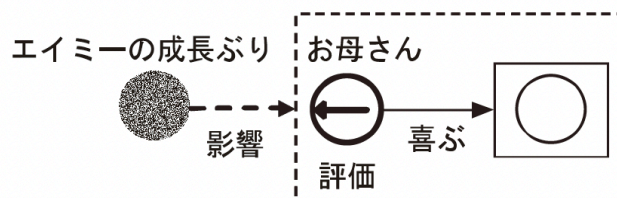


図 2-6 大槻 (2014:53)における「喜ぶ」のヲ格が〈対象〉を表す場合のイメージ

これに対し、〈原因〉の場合、刺激からのエネルギーは経験者からのエネルギーよ



りも強い実線で表されるところとしている。具体的には、〈原因〉の場合、刺激は経験者に働きかけ、瞬間的に感情の変化を引き起こすと述べている。従って、経験者から刺激への内的な意識や評価によって心的変化が起こるのではないため、経験者から刺激に向けられる心的エネルギーは相対的に弱く、破線で表されるところとしている。

例えば、(2-182) ではおじさんは、「ドロシーのこたえ」があまりに意外だったため、こたえを聞いた瞬間に心理状態を変化させられているとしている。図 2-7 のように「ドロシーのこたえ」は二格という非必須項であるため背景化されてはいるものの、経験者であるおじさんにすわって考え込んでしまうほどの影響を与えていることを、破線の枠の外の実線の矢印で表すとしている。

(2-182) 「わたしたち、オズさまに会いにきたの」

おじさんは、ドロシーのこたえにおどろくあまり、すわって考えこんでしまいました。それから、いやはやと首をふりました。

「オズさまに会いたいなんて、ずいぶんひさしぶりにいわれたよ。…」

(『オズの魔法使い』) (大槻 2014 : 54)

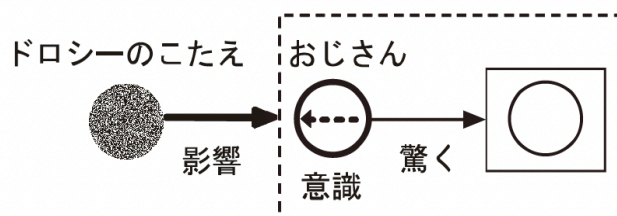


図 2-7 大槻(2014:54)における「驚く」の二格が〈原因〉を表す場合のイメージ

このように、大槻 (2014) はヲ格、ニ格が〈対象〉または〈原因〉を表す時のイメージを考察している。その上で、大槻 (2014) は先述した山梨 (1993) を踏まえ、格の意味役割には複数の解釈が可能であり、揺れがあるものがあることを主張し、意味役割の相対的スケールを用いて次のように表している。

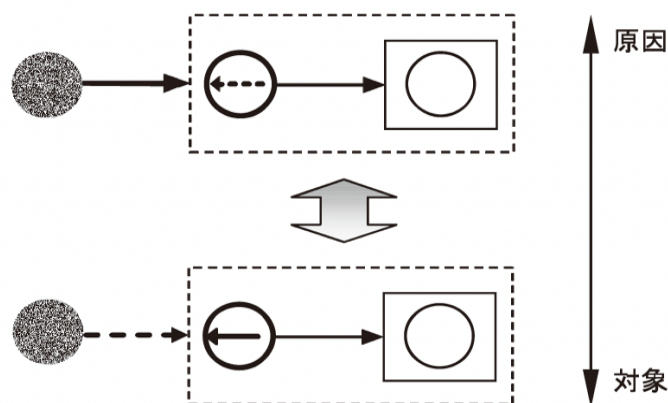


図 2-8 大槻(2014:55)における格の意味役割のイメージの相対的スケール

本研究は大槻(2014)を参考にすが、大槻(2014)における以下の3点を修正する。まず、刺激の背景化という点を修正する。大槻(2014)では刺激を表す二格は必須項ではないため、刺激が背景化されていると指摘しているが、次の(2-183)のように刺激を表す二格が必須項の場合もあれば、(2-184)のように二格ではなくヲ格が刺激を表し、必須項である場合もあるため、一概に刺激が背景化されているとは言えないと思われる。従って、本研究では大槻(2014)における前景化されている事象を表す破線の四角をとることとする。

(2-183) 花子は {太郎に／\*φ} 同情した／感謝した。

(2-184) 花子は {太郎を／\*φ} 恨んだ／憎んだ。

次に、心的変化後の状態にある経験者という点を修正する。本研究は心理動詞の格の意味役割を考察することにより、経験者と刺激(対象／原因)との間のエネルギー(心的働きかけ)の強弱を明らかにすることに注目しているため、変化後の経験者を略すこととする。

最後に、経験者から刺激(対象／原因)への意識や評価が経験者内部に描くという点を修正する。大槻(2014)が指摘しているように、経験者から刺激(対象／原因)への意識や評価は経験者の内的なエネルギーであり、刺激(対象／原因)に対して直接的な影響を与えないが、本研究では経験者と刺激(対象／原因)との間のエネルギー(心的働きかけ)の強弱を比較するため、両者をいずれも外に出すように描く。

## 2.4.9 趙(2016)の研究

最後に、趙(2016)は山梨(1993)などを踏まえ、心理動詞の意味役割には複合性があると主張している。趙(2016)はデ格やへ格に置き換えられるか否かというテストを用いて、心理動詞の格の意味役割を〈対象〉、〈原因〉、〈対象+原因〉、〈ゆく先〉、〈対象+ゆく先〉の5つに分けている。

例えば、(2-185)の「その人間性を疑う」は「その人間性で疑う」に置き換えられないことから、「疑う」のヲ格は〈原因〉を表さず、〈対象〉のみを表すとしている。それに対し、(2-186)の「減少に困っていた」は「減少で困っていた」に置き換えられることから、ここのニ格は〈原因〉を表すとしている。

(2-185) 自分のみならず、同僚、友人、先輩の行動を否定するのは、その人間性を疑う。(『ディベートからみた東京裁判』)

(\*その人間性で疑う。)

(趙2016: 109)

(2-186) 稼働可能機数は、おそらく200機程度しかなく、陸軍と海軍も同様の減少に困っていた。(『スミソニアン現代の航空戦』)

(陸軍と海軍も同様の減少で困っていた。)

(趙2016: 102)

また、(2-187)の「喜ぶ」はヲ格をとりながら、デ格に置き換えられることから、〈対象〉だけでなく、〈原因〉も表し、即ち「対象+原因」という複合的な意味役割を果たすとしている。

(2-187) 三年生の女子生徒(一五)は、候補生が町に来ることを素直に喜んだ。

(『河北新報』)

(候補生が町に来ることで素直に喜んだ。)

(趙2016: 131)

また、(2-188)の「西武線に感謝した」は「西武線へ感謝した」に置き換えられることから、ここのニ格は〈ゆく先〉を表すとしている。

(2-188) キセルでつかまって時間が遅れたことを、いまとなつては西武線に感謝した。(『逆鱗組七人衆』)

(西武線へ感謝した。)

(趙 2016 : 128)

さらに、(2-189) の「憧れる」は、「その対象は「ヨーロッパやオーストラリアなど」でありながら、「憧れる」という心理活動は方向性を持っており、「ヨーロッパやオーストラリアなど」を指向している意味も含まれている。つまり、「ヨーロッパやオーストラリアなど」は「憧れる」という心理活動に対して〈対象〉であると同時に〈ゆく先〉としても格機能を果たしている」(p. 132) と述べている。このように、「憧れる」の場合、その二格は〈対象+ゆく先〉であるとしている。

(2-189) 自分の国や町の歴史・風土には無関心にもかかわらず、ヨーロッパやオーストラリアなどに憧れる。(『吉野ケ里遺跡』)

(趙 2016 : 132)

しかし、なぜ (2-188) の「感謝する」の二格は〈ゆく先〉のみであるのに対し、(2-189) の「憧れる」の二格は〈対象+ゆく先〉という 2 つの意味役割を表すかについては詳しく説明されておらず、両者の違いは明確にされていない。

また、趙 (2016) の置き換えテストにも問題があると思われる。趙 (2016) はデ格に置き換えられる場合の二格を〈原因〉とし、デ格に置き換えられない場合の二格を〈対象〉としているが、〈原因〉を表しながらデ格に置き換えにくい二格の場合もある。村上 (2010) で指摘されているように、(2-190) のように名詞句が「～さ」の場合や、(2-191) のように名詞句がまだ実現していないことの場合、二格は〈原因〉を表しながら、デ格に置き換えにくい。

(2-190) 出勤して、コンビニで取り扱う商品の多様さに {<sup>?</sup>で} 驚いた。

(2-191) また他の人々は死に {<sup>?</sup>で} おびえ、恐怖から生命を捨てた。

(村上 2010 : 103-104)

## 2.4.10 心理動詞の格に関する先行研究のまとめ

以上、心理動詞の格に関する先行研究を見てきた。先行研究の主張や問題点をまとめると表 2-11 のようになる。

表 2-11 心理動詞の格に関する先行研究のまとめ

先行研究	主張	判断基準	問題点
寺村 (1982)	①ニ格：〈誘因〉、ヲ格：〈対象〉 ②一部のニ格：〈対象〉	直接受身化テストで 〈対象〉か否かを判断	「飽きる」のように〈誘因〉も〈対象〉も表すニ格の場合を見逃している
杉岡 (1992)	ニ格：〈原因〉、ヲ格：〈対象〉		「惚れる」のように〈対象〉を表す場合と、「飽きる」のように〈誘因〉も〈対象〉も表すニ格の場合を見逃している
山梨 (1993)	格の意味役割には複数の解釈が可能 例：娘の愚痴に怒る。(〈原因〉 + 〈対象〉)	なし	単に意味上で説明しており、形式的判断基準を立てていない
Bando (1996)	①ニ格しかとらないもののニ格：〈原因〉を表さない場合もある ②ヲ／ニ格両用のもののニ格：〈原因〉 + 〈対象〉 ③ヲ格しかとらないもののヲ格名詞句と、ヲ／ニ格両用のもののヲ格名詞句が異なる	デ格との置き換えテスト、交替使役化テストで〈原因〉か否かを判断	②については単に意味上で説明しており、形式的判断基準を立てていない 「悩む」のように一部のヲ／ニ格両用のものは直接受身化できないことから、〈原因〉のみ表すと思われる
佐藤 (1997)	ニ格：〈原因〉を表さず、〈対象〉を表すものもあれば、 〈対象〉を表さず、〈原因〉を表すものもある	直接受身化テストで〈対象〉か否かを判断し、交替使役化テストで〈原因〉か否かを判断	「飽きる」のように〈原因〉も〈対象〉も表すニ格の場合を見逃している
清水 (2007, 2014)	①格の意味役割については寺村(1982)に従う ②引用構文：〈原因〉：「刺激-反応」 / 〈対象〉：「主題-説明」	直接受身化テストで〈対象〉か否かを判断	「飽きる」のように〈原因〉も〈対象〉も表すニ格の場合を見逃している また、引用構文との対応関係は量的考察を行わずに「多く成り立つ」と主張

外崎 (2013)	<p>①ヲ格をとる心理動詞は必ずしも受身化ができるわけではない</p> <p>②ニ格をとる心理動詞は必ずしも受身化できないわけではない</p> <p>③ヲ／ニ格両用の心理動詞は受身化できるものもあれば、できないものもある</p> <p>④ヲ／ニ格両用の心理動詞のうち、受身化できないものの場合、格の意味役割は〈対象〉ではなく、〈原因〉のみである</p>	使役受身化テストで、受身化できないものの場合、格の意味役割は〈原因〉のみであることを判断	①②③については、受身化できるか否かを述べているにとどまり、格の意味役割については述べていない
大槻 (2014)	山梨 (1993) に従い、格の意味役割のイメージを提案	なし	刺激の背景化という点で問題がある
趙 (2016)	山梨 (1993) を受け継ぎ、心理動詞の格の意味役割を①〈対象〉②〈原因〉③「対象+原因」④〈ゆく先〉⑤〈対象+ゆく先〉の5つに分けている	デ格との置き換えテストで〈原因〉を判断し、ヘ格との置き換えテストで〈ゆく先〉を判断	④〈ゆく先〉と⑤〈対象+ゆく先〉との違いを明確にしていない また、置き換えテストに問題もある 例えば、「商品の多様さに {?} で <u>驚いた</u> 」のように、デ格に置き換えられない〈原因〉のニ格もある

このように、先行研究では主に心理動詞のヲ格、ニ格が〈対象〉と〈原因〉のどちらを表すかをめぐって考察している。その判断基準として、主に直接受身化ができるか否かで〈対象〉を判断し、交替使役化できるか否か、またはデ格と置き換えられるか否かで〈原因〉を判断している。このうち、直接受身化できる場合は〈対象〉を表し、できない場合は〈対象〉を表さないとしている。また、交替使役化できる場合は〈原因〉を表し、できない場合は〈原因〉を表さないとしている。さらに、デ格と置き換えられる場合は〈原因〉を表し、デ格と置き換えられない場合は〈原因〉を表さないとしている。

しかし、先述したように先行研究では「飽きる」「呆れる」のニ格のような〈対象〉も〈原因〉も表す場合を見逃しているものが多く、また、判断基準を立てていないものや、基準を立てていてもふさわしくないものがある。

そこで、本研究では心理動詞のヲ格、ニ格だけでなく、「ひらめく」「癩に障る」「見える」などの心理動詞のとりガ格も対象として、格の観点から心理動詞の各下位分類における経験者と心理対象との間の働きかけ性を考察することによって、心理動詞は状態性が高いものから動作性が高いものまで様々なものがあることを検証する。

## 2.5 本研究の考察の立場

以上、日本語の心理動詞に関する先行研究を概観し、その問題点を指摘した。以下、問題点を踏まえた上で、本研究の考察の立場を示す。

まず、心理動詞の内部分類に関する先行研究については、2.1節で述べたように意味特徴、持続性と他動性、テンス・アスペクト、人称制限、文の意味機能などの観点から心理動詞を分類しているが、分類に恣意性が感じられる点や、ポテンシャル（潜在時）な事態を見逃している点に問題があることを指摘した。そこで本研究では、テンス・アスペクト、人称制限、文の意味機能の観点から心理動詞を再分類することとする。

また、心理動詞の位置付けに関する先行研究については、①〈状態〉を表すとする立場、②〈動き〉を表すとする立場、③〈状態〉と〈動き〉の間であるとする立場、という3つの立場のうちのどれかをとるものがほとんどであった。しかし、心理動詞は均質なものではなく、連続しているバリエーションであるため、本研究では④状態

性の高いものから動作性の高いものまで様々なものがあるとする立場をとることとする。

また、心理動詞の自己制御性、及び即時性については、本研究では両者を合わせて考察することとする。

さらに、心理動詞の格に関する先行研究については、直接受身化テストと交替使役化テストのいずれか一方のみで判断する点に問題があることを指摘し、本研究では両者を用いて考察することとする。

次章では、テンス・アスペクト、人称制限、文の意味機能の観点から心理動詞を分類していく。



## 第三章 心理動詞の7分類

### 3.1 はじめに

本章ではテンス・アスペクト、人称制限、文の意味機能の観点から日本語の心理動詞を分類する。前章で述べたように、工藤（1995）は日本語の動詞を外的運動動詞、内的情態動詞（本稿の「心理動詞」に相当する）、静態動詞の3つに分類し、このうち内的情態動詞をさらに意味特徴から思考動詞、感情動詞、感覚動詞、知覚動詞の4つに分けている。しかし、同じ感情動詞や感覚動詞などの中にもテンス・アスペクトの観点から性質が異なるものが混じっている。例えば、工藤（1995）は「悩む」と「心配する」を同じ感情動詞に分類しているが、(3-1)のように「悩む」はスル形で現在の感情を表すのに対し、「心配する」はスル形で現在の感情を表さないという違いがある。また、工藤（1995）は「痺れる」と「痛む」を同じ感覚動詞に分類しているが、(3-2)のように「痺れる」はシタ形で現在の感情を表すのに対し、「痛む」はシタ形で現在の感情を表さないという違いがある。

(3-1) 「ああ、悩む／\*心配する」

(3-2) 「ああ、足が痺れた／\*頭が痛んだ」

この他、吉永（2008）や山岡（2000）も心理動詞の分類を行っているが、2.1節で述べたように分類基準が曖昧で不十分なところがある。そこで本研究ではテンス・アスペクト、文の意味機能の観点から心理動詞を7つのタイプに分類し、心理動詞内部の連続性、および外部の〈動き〉を表す外的運動動詞（「食べる」「走る」など）や、〈状態〉を表す静態動詞（「ある」「いる」「聳える」など）との関連性を考察する。

### 3.2 本研究における心理動詞の分類

第1章で述べたように、本研究で考察対象とする語は工藤（1995）と山岡（2000）

で挙げられた心理動詞 123 語である。本研究では、コーパスの実例<sup>15</sup>に基づき、趙 (2016) や呉 (2017) を参考にした上で、趙 (2016) や呉 (2017) で見逃されているポテンシャル (潜在時) な事態の場合や、アスペクト性の違いなども考慮に入れながら、心理動詞を以下の 3 つの基準で分けた。

1. 完成相と継続相がそれぞれアクチュアル (個別時) な事態かポテンシャル (潜在時) な事態か
2. スル、シタ、シテイル/シテイタがアクチュアルな事態を表す場合に、一人称主語か三人称主語か
3. スル形、シタ形、シテイル/シテイタ形でどのような意味機能を表す文を構成するか

これにより、心理動詞をタイプ I ~ VII の 7 つに分けることができた。これを表 3-1 に示す。表中の×印の部分は該当する形式がないことを示す。

---

<sup>15</sup> 本章では『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』、『Google ブックス』およびウェブ検索で例文を収集した。

表 3-1 本研究における心理動詞の7分類

タイプ	分類指標 語例・語数	アクチュアル(個別時)な事態						ポテンシャル (潜在時)な事態			
		一人称			三人称			スル	シテイル		
		スル	シタ	シテイル/シテイタ	スル	シタ	シテイル/シテイタ				
I	考える、恨む等(28)	①意志表出 (T:未来 A:完成相) ②心理表出 (T:現在 A:完成相)	確認・記述 (T:過去 A:完成相)	確認・記述 (T:現在/過去 A:動作継続相)	予測 (T:未来 A:完成相)	×	確認・記述 (T:現在/過去 A:動作継続相)	確認・記述 (主に経験者 の属性)	×		
II	喜ぶ、恐れる等(6)	予測 (T:未来 A:完成相)	①確認・記述 (T:過去 A:完成相) ②心理表出 (T:現在 A:パーフェクト相)	確認・記述 (T:現在/過去 A:結果継続相)			確認・記述 (T:現在/過去 A:結果継続相)			確認・記述 (T:現在/過去 A:動作継続相)	確認・記述 (主に対象/ 経験者の 属性)
III	ひらめく、思いつく等(4)						確認・記述 (T:現在/過去 A:結果継続相)				
IV	悩む、痛む等(36)	①予測 (T:未来 A:完成相) ②心理表出 (T:現在 A:完成相)	確認・記述 (T:過去 A:完成相)	確認・記述 (T:現在/過去 A:動作継続相)			確認・記述 (T:現在/過去 A:動作継続相)	確認・記述 (対象の 属性)		確認・記述 (対象の 属性)	
V	分かる、驚く等(36)		①確認・記述 (T:過去 A:完成相) ②心理表出 (T:現在 A:パーフェクト相)	確認・記述 (T:現在/過去 A:結果継続相)			確認・記述 (T:現在/過去 A:結果継続相)				
VI	音がする等(7)		確認・記述 (T:過去 A:完成相)	確認・記述 (T:現在/過去 A:動作継続相)			×				
VII	ザラザラする等(6)		確認・記述 (T:過去 A:完成相)	確認・記述 (T:現在/過去 A:動作継続相)							

(表 1-1 の再掲)

まず、アクチュアル（個別時）な事態とポテンシャル（潜在時）な事態の違いについて説明する。工藤（1995）では、アクチュアルな事態は、動作や状態が特定の時間に現れることを意味するのに対し、ポテンシャルな事態は、時間の特定性が捨象され、その主体が潜在的にその動作・状態を持っていることを意味すると述べている。例えば、(3-3) は特定の人物である「花子」が特定の時間に「死んだ」ということを表し、アクチュアルな事態であるのに対し、(3-4) は不特定の人物である「人」が潜在的に「死ぬ」という属性を持っているということを表し、ポテンシャルな事態である。

(3-3) 花子が死んだ。(アクチュアルな事態)

(3-4) 人は死ぬ。(ポテンシャルな事態)

次に、人称について説明する。工藤(1995)や外崎(2006)など、多くの先行研究において心理動詞は、主語に人称制限がかかると指摘している。例えば、(3-5) のように一人称の場合は、心理動詞のスル形もシテイル形も成り立つのに対し、(3-6) のように三人称の場合は、心理動詞のスル形は成り立たず、シテイル形のみが成り立つという違いがある。また、(3-7) のように二人称の場合は、スル形もシテイル形も成り立たず、疑問文にしなければならないため、本研究では二人称を考察の対象外とし、一人称と三人称のみを考察する。

(3-5) a. 私はあの男は無罪だと思う。(外崎 2006 : 149)

b. 私はあの男は無罪だと思っている。

(3-6) a. \*彼はあの男は無罪だと思う。(外崎 2006 : 149)

b. 彼はあの男は無罪だと思っている。

(3-7) a. \*あなたはあの男は無罪だと思う。

b. \*あなたはあの男は無罪だと思っている。

c. あなたはあの男は無罪だと思うの？

このように、心理動詞は人称制限がかかるが、それはアクチュアルな事態の場合のみであり、ポテンシャルな事態の場合は、人称は総称的な三人称であるため、人称制

限が問題にならない。例えば、(3-8) はポテンシャルな事態を表し、主体の「親」は不特定かつ総称的な三人称である「親」という集合である。(3-9) も同様である。そのため、本研究では表 3-1 のようにアクチュアルな事態の場合、一人称と三人称を分けて考察するが、ポテンシャルな事態の場合は人称を分けて考察しないこととする。

(3-8) 親は子どもに期待する。

(3-9) 天才は新しいアイデアをどんどん思いつく。

最後に、文の意味機能については、スル形、シタ形、シテイル／シテイタ形でどのような意味機能を表すかを見る。本研究では意味機能を以下の「予測<sup>16</sup>」、「表出」、「確認・記述」の3つに分類する。

予測：未実現の心理活動を仮想する意味機能。

(3-10) 太郎が合格したら、私も（きっと）喜ぶ（でしょう／と思う）。

表出：話者が未実現の心理活動を予告したり（意志表出）、発話時の自らの心理活動を述べたり（心理表出）する意味機能。

(3-11) わからなかったら、私も一緒に考える。

(3-12) この提案が一番ふさわしいと考える。

確認・記述：過去または現在の心理活動を第三者的立場から確認したり描写したりする意味機能。

(3-13) 太郎は喜んでいる。

次節から、まずアクチュアル（個別時）な事態の場合について、タイプ I～VII の順番に見る。次に、ポテンシャル（潜在時）な事態の場合について、タイプ I～VII の順番に見る。

<sup>16</sup> 本研究は工藤（1995）を参照し、〈予測〉という用語を用いる。

### 3.2.1 アクチュアル（個別時）な事態の場合

本節では、アクチュアル（個別時）な事態における各タイプのテンス・アスペクト、人称制限、文の意味機能の特徴についてタイプⅠ～Ⅶの順に考察する。各タイプともスル形、シタ形、シテイル／シテイタ形の順にその特徴について論じる。

#### 3.2.1.1 タイプⅠ

まず、タイプⅠについて見る。タイプⅠの心理動詞は表 3-2 に示すように、「諦める」「考える」など 28 語ある。

表 3-2 タイプⅠの心理動詞

語彙リスト
諦める、考える、反省する、判断する、推測する、評価する、祈る、疑う、思う、(と／ように) 見る、確信する、期待する、希望する、察する、信じる、信用する、推察する、願う、望む、恨む、感謝する、敬服する、軽蔑する、嫉妬する、尊敬する、同意する、同情する、憎む(28 語)

まず、タイプⅠの心理動詞は一人称の場合、スル形で未来の心理に対する〈表出〉と発話時現在の心理活動に対する〈表出〉を表すという特徴がある。3.2 節で述べたように、未来の心理活動に対する〈表出〉とは話し手が未実現の心理活動を予告する意味機能である。例えば、(3-14) の「考える」は「考えることにする」に置き換えられることから、話し手がこれから「兄と会わないようにするかどうかを考えるつもりである」という意志表出を表していると考えられる<sup>17</sup>。(3-15) (3-16) も同様である。

(3-14) 「はい」「とにかく一どんなに隠してるつもりでも、社内のそういうことは  
すぐ知れ渡るものよ。当分、兄と会わないようにした方がいいわ」「よく

<sup>17</sup> 柏崎 (2001) は「ことにする」の用法を「事態の決定」と「取り決めた帰結」の2つに分けている。前者は (3-i) のように「意志動詞／意志的表現＋ことにする」のような表現形式をとり、後者は (3-ii) のように「{無意志動詞、状態動詞、動詞「た形」、「名詞＋という」、形容詞、「文＋という」}＋ことにする」のような表現形式をとっている。両者いずれも動作主体の意志決定（取り決め）を表すと考えられる。そのため、本研究では「動詞＋ことにする」と置き換えられるかどうかをテストフォームとして動詞が意志表出を表すかを判断する。

(3-i) 「実はね、私、今度、勤めに出ることにしたの」

(『太郎物語』) (柏崎 2001 : 35)

(3-ii) 「(前略) あんたがこの家を出ていってからどうなろうと、あては知らんことにする」

(『新撰組』) (柏崎 2001 : 37)

考えます」「ええ、そうして。じゃ、私、バスに乗るから」

(『利休鼠のララバイー長編青春ミステリー』赤川次郎)

⇨よく考えることにする

(3-15)「鎮静剤を打って、保護室に入れますか？」と訊いた。「診てから判断する」

短く答えて、榊は階段をくだった。

(『症例 A』多島斗志之)

⇨診てから判断することにする

(3-16)「いけ……おじ？」

久しぶりに聞きなれない単語を聞いて首をひねる。

「あー……説明必要？」

「待って、推測するわ」

(中略)「まずは俳優がカッコいいって説明が合ったから、おじは多分オジ

さん、中高年の男性よね」

「そうそう、合ってるわ」

(<https://ncode.syosetu.com/n1925hb/69/>) 2022. 9. 27 閲覧

⇨推測することにする

ただし、一部のタイプ I の心理動詞は (3-17) ～ (3-19) のように、スル形で意志

的〈表出〉を表す場合には条件節<sup>18</sup>が前接することが多い。例えば、(3-17)の「評価する」は前に「この仕事をやったら」という条件節が来て、「この仕事をやったら評価することにするよ」に置き換えられることから、未実現の感情認識を予告していることがわかる。

(3-17)「ロボットの研究なんかしてもうだつがあがらない。けれど、この仕事をやったら評価するよ」と言われたら、ふつうなら出世街道を選ぶ場合がほとんどでしょう。

(『宇宙の根っこにつながる瞑想法』天外伺朗)

≡この仕事をやったら評価することにする

<sup>18</sup> 前田 (2009) では条件文の「条件的用法」(「～もあれば、～もある」のような「非条件的用法」を除いて)を以下の表3-iのように分類している。

表3-i 前田 (2009 : 40) における条件文の「条件的用法」の分類

			前件	後件	タイプ	
仮定的	反事実	事実的	事実	反事実	①	
		反事実	反事実	反事実	②	
	仮説	反事実	仮説	仮説	③	
		事実的	事実	仮説	④	
非仮定的	多回的	一般・恒常	(不問)	(不問)	⑤	
		反復・習慣			⑥	
	一回的	様々な状況	連続	事実	事実	⑦
			きっかけ			⑧
			発現			⑨
			発見			⑩

このうち、「もっとも典型的・中心的な用法」(p. 43)はタイプ③の「仮説的用法」であり、「未来の事態、まだ生起していない未実現の事態間の因果関係を表すものである」(p. 43)としている。また、「仮説的用法」には(3-iii)のように後節に聞き手に対する働きかけが来る場合と、(3-iv)のように推量の表現が来る場合があると述べている。

(3-iii)「(前略)それを、もし僕が死んだら、君にあげる。」

(『草の花』) (前田 2009 : 43)

(3-iv)自分は一方も足を踏み出せないのだ。足を踏み出したら、やたら何かにぶつかるだろう。

(『崖』) (前田 2009 : 43)

本研究でいう「条件節」はこのような用法に用いられる条件節のことを指す。

また、タイプ⑤の「一般条件文」は「具体的な時間軸には位置づけられないポテンシャル」(p. 48)な事態を表し、(3-v)のように「主体が特定の具体的なものではなく、不定であったり、物のクラスである」(p. 48)場合であると指摘している。

(3-v)「(前略)人間、本当にいやだたら、いくら仕事でも続くわけないわ」

(『夫婦の情景』) (前田 2009 : 48)

このように、ポテンシャルな事態を表す条件文もあるが、本研究は3.2.2節で最も典型的にポテンシャルな事態を表すものである「～ハ」主題文を例として、心理動詞がポテンシャルな事態を表す場合について考察する。



(3-18) 「それじゃ、それを見せてよ。見せてくれたら信用する」

(『将軍家の秘宝 献上道中騒動記』 出久根達郎)

≡見せてくれたら信用することにする

(3-19) 「俺、あとで絶対怒られる……給料減らされたら、恨みますからね」

(『おかしな転生 第1巻』 古流望、珠梨やすゆき)

≡給料減らされたら、あなたを恨むことにする

このようにスル形が未実現の事態の予告を表すという機能は外的運動動詞と共通している。例えば、(3-20) の「送る」は「私」のこれからの行為への意志表出を表している。(3-21) (3-22) も同様である。しかし、タイプ I の心理動詞の一部は条件節が前接しないと意志表出を表しにくいのに対し、外的運動動詞は条件節が来なくても意志表出を表すことができるという点で違いが見られる。

(3-20) 今すぐメールで送るね。

(3-21) 明日かけ直す。

(3-22) 先にシャワーを浴びるわ！

タイプ I は一人称の未実現の心理活動を予告する機能を持っているという特徴から、経験者の心理活動へのコントロールや、対象への働きかけ（心的作用）が相対的に強いと考えられる。例えば、上の (3-14) の「考える」は話し手の未実現の思考に対する意志表出を表し、「考えるように努める」ことができることから、自分の思考活動へのコントロールが相対的に強いことが分かる。また、(3-17) の「評価する」は「あなたがこの仕事をやったら、私はあなたを評価する」という意味を表し、聞き手という対象者に「この仕事をやってもらう」ように努めていることを表し、対象への働きかけ（心的作用）が相対的に強いことが分かる。

このように、タイプ I はスル形で一人称の未実現の心理活動を予告する機能を持っている。この他、タイプ I はスル形で一人称の発話時現在の心理活動を表す意味機能

も持っている<sup>19</sup>。例えば、(3-23)の「考える」はスル形で一人称「おれ」の発話時現在の考えを表明している。

(3-23) 「もちろん、そういう理屈にはなるが、早乙女先生は予定通りに殺された  
と、おれは考える」 鳴海さんは首を振った。

(『ラグナロク洞-《あかずの扉》研究会影郎沼へ』霧舎巧)

次に、一人称のシタ形の場合は過去の態度や感情・感覚を振り返るように記述するという意味機能を表す。例えば、(3-24)の「考えた」は話し手の過去の思考を振り返るように聞き手に伝えることを表している。

(3-24) インターハイ千五百メートル2位の森(桂)とのエース対決が注目されたが、力強いストライドでスタート直後から飛ばし一度も先頭を譲らなかった。「今は絶好調。誰に勝つとか、何位とか考えずただ自分の走りだけを考えた」と胸を張った。

(『京都新聞 朝刊』2005/11/7 京都新聞社)

また、一人称のシテイル/シテイタ形の場合は、現在または過去における心理活動の進行局面の継続性を記述するという意味機能を表す。例えば、(3-25)の「考えている」は話し手の「考え始めた」後の現在における継続的な思考活動の進行局面を表しており、(3-26)の「考えていた」は一人称「私」の過去における継続的な思考活動の進行局面を表している。

(3-25) 検察側が実刑判決だった場合の覚悟を問うと、「当然考えています」と答えた。保釈後の暮らしについては「百円玉を大切に使おうという当たり前のことを一からやり直したい」と述べた。

(Yahoo!ブログ)

<sup>19</sup> タイプIは「そうなったら、私も考えると思う/諦めるだろう」など、未来の事態への〈予測〉を表す場合もあるが、「と思う」や「だろう」などのモダリティ表現が必要であり、スル形だけでは未来の事態への〈予測〉を表すことが難しい。

(3-26) 「ありがとう、そんなふうに言ってくれて。私も海岸を歩きながら、ずっと同じことを考えていたのよ」「本当？ そうなら嬉しいわ」

(『水曜の朝、午前三時』 蓮見圭一)

上のように、タイプ I の心理動詞はスル形でもシテイル形でも一人称の現在の心理活動を表すが、次の2点で異なっている。1つはスル形とシテイル形の性質に関わり、スル形は完成相であるのに対し、シテイル形は継続相であるという点で異なる。例えば、(3-27) のように「考える」の前には「ずいぶん前から」「最近」などの時間幅を表す副詞的成分が来ないのに対し、(3-28) のように「考えている」の前に時間幅を表す副詞的成分が来る。このことから、スル形は時間幅のない現在時点を表すのに対し、シテイル形は一定の時間幅、即ち継続性を表すことが分かる。

(3-27) \*これが一番ふさわしい提案だと {ずいぶん前から／最近} 考える。

(3-28) これが一番ふさわしい提案だと {ずいぶん前から／最近} 考えている。

もう1つはスル形は話し手が自らの心理活動を内面から表すという〈表出〉の意味機能を表すのに対し、シテイル形は話し手が心理活動を外面から描写するという〈確認・記述〉の意味機能を表すという違いである。山岡 (2014) で指摘されているとおり、一人称の心理動詞のシテイル形は先の1点目で述べたように過去から現在までという一定の時間幅を持っているため、「過去」の部分の回想によって自身の感情に「ある種の客観性」が与えられている」(p. 33)。これに対し、スル形の場合は発話時点の心理活動をそのまま吐露するため、主観性を持っている。

このように、タイプ I の心理動詞はスル形でもシテイル形でも一人称の現在の心理活動を表すが、アスペクトの面でも文の意味機能の面でも異なっている。

次に、タイプ I は三人称の場合、スル形で未来の心理活動に対する〈予測〉を表す。例えば、(3-29) において、三人称の「なつき」は「父さんが反対だと言え、考える」という未来への〈予測〉の意味を表している。

(3-29) 「(前略) 父さんが反対だと言え、なつきもきっと考えるよ」

(『フルコース夫人の冒険』 赤川次郎)

また、三人称のシタ形の場合は話し手が三人称に感情移入してその心理活動を一人称のように体験的に表すため、一般的には成り立たない。感情移入については、西尾(1972)や工藤(1995)も論じている。西尾(1972)では(3-30)の感情形容詞「欲しい」は「書き手(話し手)が第三者の気持ちにはは<sup>ママ</sup>いり込んで、自分のことのように表現するばあい」(p. 26)であり、「例外的なばあい」(p. 26)であると述べている。また、工藤(1995)では(3-31)の心理動詞「悲しむ」は「山椒魚」を擬人化すると同時に、三人称「山椒魚」に感情移入してその悲しい気持ちを一人称のように表し、「日常会話では許されない」(p. 95)表現であると述べている。そのため、三人称のシタ形の場合は成り立たない。

(3-30) 時雄は常に苛々して居た。書かなければならぬ原稿が幾種もある。書肆からも催促される。金も欲しい (後略)。

(田山花袋『蒲団』) (西尾 1972 : 26)

(3-31) 山椒魚は悲しんだ。

(『山椒魚』井伏鱒二) (工藤 1995: 95)

さらに、三人称のシテイル／シテイタ形の場合は一人称と同様に、現在または過去の思考・感情・感覚の進行局面の〈継続性〉に対する〈確認・記述〉を表す。例えば、(3-32)の「考えている」は三人称「善行さん」の「考え始めた」後の現在における継続的な思考活動の進行局面を記述しており、(3-33)の「考えていた」は三人称「息子」の過去における継続的な思考活動の進行局面を表している。

(3-32) 「どうやら俺たちはそう簡単には死なないみたいだぞ。善行さんは戦後の軍事裁判のことまで考えている」

(『ガンパレード・マーチ 5121 小隊九州撤退戦 (下)』榊涼介)

(3-33) 「いま通りすぎた古い家のなかには、半身不随で二十年も生きつづけている老人が、二階の窓ぎわにいる。階下では息子が、なんとか自分たち夫婦が疑われずに、おやじを殺す方法はないものか、と考えていたよ」

(『銀河盗賊ビリイ・アレグロ／暗殺心』都筑道夫)

それでは、なぜ一人称の場合はスル形で現在を表せるのに対し、三人称の場合はスル形で表せずシテイル形では表せるかということ、先に述べたようにスル形は話し手が自らの心理活動を内面から表すという〈表出〉の意味機能を表すのに対し、シテイル形は心理活動を外面から描写するという〈確認・記述〉の意味機能を表すという違いによると考えられる。一人称の場合は話し手がスル形で内面から発話時点の心理をそのまま吐露することもできるし、シテイル形で外面から一定の時間幅を持つ過去から現在までの心理を描写することもできるのに対し、三人称の場合はスル形で内面から発話時点の心理をそのまま吐露することができず、シテイル形で外面から一定の時間幅を持つ過去から現在までの心理を描写することのみができるというアスペクト的な違いがあるからだと思われる。

以上、タイプⅠの心理動詞のテンス・アスペクト的特徴を見てきた。タイプⅠの心理動詞は一人称の場合、スル形で未来の意志に対する〈表出〉と発話時現在の心理の〈表出〉を表し、シタ形で過去の事態の〈確認・記述〉を表し、シテイル／シテイタ形で現在または過去における継続的事態の進行局面の〈確認・記述〉を表す。また、三人称の場合、スル形で未来に対する〈予測〉を表し、シテイル／シテイタ形で現在または過去における継続的事態の進行局面の〈確認・記述〉を表す。

### 3.2.1.2 タイプⅡ

次に、タイプⅡについて見る。タイプⅡの心理動詞は表 3-3 に示すように、「心配する」「恐れる」など6語ある。

表 3-3 タイプⅡの心理動詞

語彙リスト
心配する、恐れる、怒る、後悔する、喜ぶ、苦しむ(6語)

このタイプの心理動詞は、スル形で一人称の未来の意志に対する〈表出〉や発話時現在の心理の〈表出〉を表さず、未来の心理に対する〈予測〉を表すという点でタイプⅠと異なる。以下、一人称、三人称の順番に論じる。まず、一人称の場合はスル形で未来の感情に対する〈予測〉を表す。例えば、タイプⅠは例(3-34)の「考える」

のように「考えることにする」に置き換えられるのに対し、タイプⅡの場合は、(3-35)の「心配する」のように「心配することにする」に置き換えられない。このことから、タイプⅠは話し手の意志表出を表すことができるのに対し、タイプⅡは話し手の意志表出を表すことができないのだと考えられる。また、タイプⅡは(3-35)のように「心配する」を「心配すると思う」に置き換えることができることから、タイプⅡは話し手の意志表出を表すのではなく、未実現の事態に対する〈予測〉を表すと考えられる。

(3-34) 「はい」「ともかく一どんなに隠してるつもりでも、社内のそういうことはすぐ知れ渡るものよ。当分、兄と会わないようにした方がいいわ」「よく考えます」「ええ、そうして。じゃ、私、バスに乗るから」

((3-14) の再掲)

≡よく考えることにする

(3-35) 「(前略) でも何も言わずに帰ってこないと、私も心配するわよ。数日間でも、凄く長く感じたな……」

(<https://syosetu.org/novel/86108/10.html>) 2022. 9. 27 閲覧

≠私も心配することにする

≡私も心配すると思う

このように、タイプⅠは経験者の心理活動へのコントロールや、対象への働きかけ(心的作用)が相対的に強いのに対し、タイプⅡは経験者の心理活動へのコントロールや、対象への働きかけ(心的作用)が相対的に弱いことが分かる。

また、一人称のシタ形の場合は、タイプⅠと同様に一人称の過去の事態の〈確認・記述〉を表す。例えば、(3-36)の「心配した」は話し手である「医者」が自分の過去の感情を回想することを表している。

(3-36) 「助かるんでしょうか？」由美は、医者顔を見つめた。「出血が多かったので心配しましたが、多分、大丈夫だと思いますよ。(後略)」

(『京都婚約旅行殺人事件』山村美紗)

さらに、一人称のシテイル／シテイタの場合もタイプ I と同様に、現在または過去における継続的事態の進行局面の〈確認・記述〉を表す。例えば、(3-37) の「心配している」は話し手の「心配し始めた」後の発話時における感情の進行局面の継続性を表し、(3-38) の「心配していた」は話し手の過去における感情の進行局面の継続性を表している。

(3-37) 「大丈夫。由里子には言わないから」「脅かしてるのか」「心配してるのよ。  
水島さん真面目だから、由里子にしゃべっちゃうんじゃないかと思って。  
こんなことで婚約破棄になんかなったら、由里子が可哀相なもの」  
(『昼間のパパと夜明けの息子』ねじめ正一)

(3-38) 「何してたのよ？心配してたのよ。どこに行ってたの。あなた、方向音痴だから、海の上で迷ってたんじゃないの。まったく。」  
(『平将門の叔父：他三編』太田悠)

それでは、なぜ一人称の場合、上のタイプ I はスル形で発話時現在の感情〈表出〉を表し、シテイル形で現在の継続的感情の〈確認・記述〉を表すという継続性があるか否かの対立を持っているのに対し、タイプ II はスル形で発話時現在の感情〈表出〉を表すことができず、シテイル形で現在の継続的感情の〈確認・記述〉を表すのみがあるように、継続性があるか否かの対立を持たないかという点、次の (3-39) のようにタイプ II は同語根の感情形容(動)詞があるものが多く、(3-40) のように継続性がない発話時の感情〈表出〉は感情形容(動)詞が表しているからだと考えられる。

(3-39) a. 心配する→心配だ  
b. 恐れる→恐ろしい  
c. 苦しむ→苦しい

(3-40) a. あなたのこと { \*を心配する／が心配だ }。〈表出〉  
b. あなたのことを心配している。〈確認・記述〉

同語根の感情形容詞と感情動詞の継続性の有無の違いについて、小竹(2011)が述べたとおり、(3-41) のように事態が一時的に継続している時に、他の事態が発生す

る「同時性」を表す文の場合、感情形容詞より感情動詞のシテイル形が選好されるといいう使い分けがあることから、感情形容詞より感情動詞のシテイル形が継続性があることが分かる。

(3-41) 高熱で {苦しい / 苦しんでいる} あいだに、せっかくの連休が終わってしまった。

(小竹 2011 : 47)

次に、三人称の場合は、スル形で未来の感情に対する〈予測〉を表す<sup>20</sup>。例えば、(3-42)の「心配する」は「心配することにする」に置き換えられないのに対し、「心配するでしょう／と思う」に置き換えられることから、「あんまりゆっくりしてると、母さんが心配すると思う」という三人称「母さん」の未実現の感情に対する〈予測〉を表すことが分かる。

(3-42) 「釣りは朝に限るっていったじゃないか。それに、あんまりゆっくりしてると母さんが心配するよ」(『孤狼の絆』香納諒一)

≠母さんが心配することにする

≒母さんが心配するでしょう／と思う

また、三人称のシテイル／シテイタ形の場合も一人称と同様に、現在または過去における継続的事態の進行局面の〈確認・記述〉を表す。例えば、(3-43)の「心配している」は「お父さん」の「心配し始めた」後の現在における感情の進行局面の継続性を表し、(3-44)の「心配していた」は「おっかさん」の「私の姉が嫁いだあと」という過去における感情の進行局面の継続性を表している。

<sup>20</sup> ただし、(3-vi)のようにタイプIIの「恐れる」などは三人称の未来の感情を表す場合、スル形だけでは成り立ちにくく、「だろう」「でしょう」「かもしれない」などのモダリティ表現を必要としている。もし(3-40)を「国民は恐れる」のようにモダリティ表現のない文にすると、未来の感情ではなく、「一般的に国民は恐れる」という意味になり、アクチュアルな事態ではなくポテンシャルな事態として捉えられる。

(3-vi) 「なぜなら国民は、減税によって今受け取ったお金が、将来の増税によって『没収されるだけ』だと恐れるだろうから」と(実証ではなく理論に基づいて)論じています。  
(『リフレが正しい。FRB議長ベン・バーナンキの言葉』高橋洋一)



(3-43) 十分ほど待っていると、母がソワソワしながら、「あかん。お父さん心配して  
るわ。私、もう戻る」。そう言って父の病室に戻ってしまった。

(『死なさない絶対に！！—生体肝移植を選んだドナーと家族の葛藤』中津洋平)

(3-44) 「(前略)ただ、私の姉が嫁いだあとも、やっぱりおっかさんは心配してた  
し、私たちが江戸に来たあとも、ずっとずっと心配してくれてる」

(『きよのお江戸料理日記3』秋川滝美, 丹地陽子)

このように、タイプⅡの心理動詞は一人称の場合、スル形で未来の事態に対する〈予測〉を表し、シタ形で過去の事態の〈確認・記述〉を表し、シテイル／シテイタ形で現在または過去における継続的事態の進行局面の〈確認・記述〉を表す。一方、三人称の場合、スル形で未来の事態への〈予測〉を表し、シテイル／シテイタ形で現在または過去の継続的事態の進行局面の〈確認・記述〉を表す。

### 3.2.1.3 タイプⅢ

次に、タイプⅢについて見る。表 3-4 に示すように、タイプⅢは「思いつく」「気がつく」「ひらめく」「さとる」の4語がある。

表 3-4 タイプⅢの心理動詞

語彙リスト
思いつく、気がつく、ひらめく、さとる(4語)

このタイプの心理動詞はスル形ではなくシタ形で一人称の発話時現在の心理の〈表出〉を表すという点、及びシテイル／シテイル形で一人称と三人称の現在または過去における継続的心理の結果状態の〈確認・記述〉を表すという点でタイプⅡと異なる。以下、一人称、三人称の順番に論じる。まず、一人称の場合はスル形で未来の心理に対する〈予測〉を表す。例えば、(3-45)の「思いつく」は「ことにする」とは共起せず、「と思う」とは共起するため、話し手「伯母」の未実現の心理に対する〈予測〉を表していると考えられる。このことから、タイプⅢもタイプⅡと同様に、経験者の心理活動へのコントロールや、対象への働きかけ(心的作用)が相対的に弱いことが分

かる。

(3-45) 伯母がその場にふさわしい言葉を探しながら、長いあいだこちらを見つめていたのを覚えている。結局、言葉は見つからず、伯母はこうつぶやいただけだった。「そのうち何か思いつくわ」(後略)

(『死の記憶』トマス・H・クック (著) / 佐藤和彦 (訳))

≠そのうち何か思いつくことにする

≡そのうち何か思いつくと思う

また、一人称のシタ形は過去の事態の〈確認・記述〉だけでなく、発話時現在の心理の〈表出〉を表すこともできる。一人称の過去の事態の〈確認・記述〉を表す場合とは、例えば、(3-46)の「思いついた」のように、話し手が自分の過去の心理活動を回想することを表している。

(3-46) 「私が提案したアイデアには多くの自転車が必要になるので、調達方法を悩みました。名古屋市には放置自転車が多いという課題もあると知って、それを活用するアイデアを思いつきました。」

(<https://contest.resas-portal.go.jp/2022/interview3.html>) 2022. 9. 27 閲覧

この他、シタ形で一人称の発話時現在の心理の〈表出〉を表す場合もある。タイプⅢの心理動詞は山岡(2000: 201)で指摘されているように、「何らかの外的要因によってもたらされた感情の変化」という語彙的意味を表すものであり、シタ形で「過去に起きた変化そのもの」と「その変化結果が持続する現在の状態」の2つの意味を同時に表す。特に後者の「その変化結果が持続する現在の状態」という意味によって〈表出〉たり得るのであり、その場合、「変化が生じた過去」は「現在と隣接する直近の過去である」と述べている。このように、タイプⅢの心理動詞はシタ形で一人称の現在の心理活動を表す場合、その心理変化が発話時現在と隣接する直近の過去に生じ、発話時現在にも存続しているという「パーフェクト性」を表す。例えば、「思いついた」は(3-47)のように話し手の「辰三」が「いいことを思いついた」直後の思考結果という変化をその場で表出している。

(3-47) すると、辰三がきゆうに顔をあげ、「いいことを思いついたぞ。これはおもしろいぞ！」と言って、腕ぐみをしました。

(『星をまく人』竹田弘)

さらに、一人称のシテイル／シテイタ形の場合はタイプⅠ、Ⅱと違い、現在または過去における心理活動の進行局面の継続ではなく、心理活動の結果状態の持続の〈確認・記述〉を表すと思われる。例えば、上の(3-37)のようにタイプⅡの「心配している」は「心配し始めた」後の事態の進行を表すのに対し、(3-48)のようにタイプⅢの「思いついている」は「思いついた」後の結果状態の持続を表すという違いがある。同様に(3-49)の「思いついていた」も過去の結果状態の継続性を表す。

(3-48) 「(前略) 私、あることを思いついていますの、やっと、私のとるべき道がはっきりわかりましたの」

(『潮』第13～18号潮出版社)

(3-49) 「年齢階段に沿って首をずらす方法は俺も思いついていましたけど、それを忘れるくらい両角さんは迫力がありました」

(『あと十五秒で死ぬ』榊林銘)

次に、三人称の場合、タイプⅢはタイプⅡと同様にスル形で未来の心理に対する〈予測〉を表す。例えば、(3-50)の「思いつく」は三人称「彼女」の未実現の心理活動に対する〈予測〉を表している。

(3-50) 「彼女にもう少し時間をあげて。そのうち彼女は何か思いつくわ」(作例)

また、三人称のシテイル／シテイタ形も一人称と同様に、現在または過去における心理活動の結果状態の持続の〈確認・記述〉を表す。例えば、(3-51)の「思いついている」は三人称の「梶さん」の「思いついた」後という現在における心理活動の結果状態の持続の〈確認・記述〉を表し、(3-52)の「思いついていた」は三人称の「先人」の過去における心理活動の結果状態の持続の〈確認・記述〉を表している。

(3-51) 「でも華さん。梶さんが思いついてるんですよ？」 玄が言う。

(『成金』 堀江貴文)

(3-52) それは「先人は思いついていたが誰もやる必要性を感じなかったため、やらなかった」のである。

([www.amazon.co.jp/hz/reviews-render/lighthouse/B009MIDSP0?filterByKeyword=%E6%94%B9%E5%A4%89&pageNumber=](http://www.amazon.co.jp/hz/reviews-render/lighthouse/B009MIDSP0?filterByKeyword=%E6%94%B9%E5%A4%89&pageNumber=)) 2022. 9. 27 閲覧

このように、タイプⅢの心理動詞は一人称の場合、スル形で未来の心理に対する〈予測〉を表し、シタ形で過去の事態の〈確認・記述〉と、現在の心理の〈表出〉を表し、シテイル／シテイタ形で現在または過去における心理活動の結果状態の持続の〈確認・記述〉を表す。一方、三人称の場合、スル形で未来の心理に対する〈予測〉を表し、シテイル／シテイタ形で現在または過去における心理活動の結果状態の持続の〈確認・記述〉を表す。

### 3.2.1.4 タイプⅣ

次に、タイプⅣについて見る。タイプⅣの心理動詞は表 3-5 に示すように、「悩む」「痛む」など 36 語ある。

表 3-5 タイプⅣの心理動詞

語彙リスト
悩む、憧れる、怒りを覚える、イライラする、ウキウキする、気になる、緊張する、クラクラする、白ける、じれる、癩に触る、ゾクゾクする、ゾツとする、照れる、ドキドキする、恥じる、ハラハラする、迷う、むかつく、めげる、ワクワクする、痛む、うずく、ガクガクする、キリキリする、カサカサする、(目が)くらむ、ショボショボする、ズキズキする、チカチカする、チクチクする、ヒリヒリする、震える、ほてる、ムカムカする、ムズムズする(36 語)

このタイプの心理動詞は、一人称のスル形は未来の心理に対する〈予測〉だけでなく、発話時現在の心理の〈表出〉も表す点、一人称のシタ形は現在の心理の〈表出〉を表さない点、及び一人称と三人称のシテイル／シテイタ形は現在または過去における心理の進行局面の継続性を表すという点でタイプⅢと異なる。以下、一人称、三人称の順番に論じる。まず、一人称の場合はスル形で未来の感情や感覚に対する〈予測〉という意味を表すことができる。例えば、(3-53) の「悩む」は「ことにする」とは共

起せず、「と思う」とは共起するため、一人称である「愛玲」の未実現の感情に対する〈予測〉を表すと考えられる。このことから、タイプIVも経験者の心理活動へのコントロールや、対象への働きかけ（心的作用）が相対的に弱いことが分かる。

(3-53) 「ご一緒にいかがですか？」さりげなく愛玲を誘う。「遠慮するわ。耀東さまやったら悩むけどな」明るく断る愛玲。

(『冥界武俠譚 其の一 立原透耶著作集 3』立原透耶)

≠耀東さまやったら悩むことにする

≡耀東さまやったらきっと悩むと思う

この他、タイプIと同様に一人称のスル形で発話時現在の心理の〈表出〉を表すこともできる。例えば、(3-54)の「悩む」は話し手の発話時における「悩む」気持ちの表出を表している。(3-55)の「照れる」と(3-56)の「緊張する」も同様である。

(3-54) 「何作ろう…真剣に悩む」

(『C a n C a m』2002年12月号 西道倫子)

(3-55) 「こう改めて二人きりで話すと、なんか照れるなあ」とお互い言いながら、なんとなく世間話を始めた。

(『不登校と向き合う-ある学校の13年の軌跡』中野美穂、菅野純)

(3-56) 道子さんは、馬の向きを替えさせる。由里岡さんの足元を見ると、ハイキングのためにでも用意して来たらしい運動靴を履いている。「いや、どうも、緊張するなあ」由里岡さんは、おっかなびっくり鞍に手をかける。馬は、激しく後ろ足で地を蹴った。

(『街の灯』北村薫)

また、一人称のシタ形の場合は過去の態度や感情・感覚に対する〈確認・記述〉を表す。例えば、(3-57)の「悩んだ」は話し手である「次女」の過去の感情を回想することを表している。

(3-57) 次女は今日がテストの最終日なので、早いのだ。わたしが、冷蔵庫に物を

しまっているときに、「あ、そうそう、肉まんじゅう買ってあるから・・・」  
 「肉まんじゅう？なにそれ？」本気でわからないのか、こいつ、と思った  
 が、「肉まんじゅうといたら肉まんのことに決まってるじゃない！」(中  
 略)「なんか、肉団子とか、まんじゅうとか頭の中ぐるぐるしてわけわから  
 なかった。本気で悩んだ」そんなに悩むかねえ。

(Yahoo! ブログ)

さらに、一人称のシテイル/シテイタ形の場合は現在または過去における継続的な  
 思考・感情・感覚の進行局面の〈確認・記述〉を表す<sup>21</sup>。例えば、(3-58)の「悩んで  
 いる」は「私」の「悩み始めた」後の現在における継続的な感情の進行局面を表し、  
 (3-59)の「悩んでいた」は話し手の過去における継続的な感情の進行局面を表して  
 いる。

(3-58) 「私はいま、ダイエットに悩んでいます。高校3年生のころから、太り出  
 しました」

(『アフィリエイトで稼ぐ1年目の教科書: これから始める人が必ず知りたい70  
 の疑問と答え』川端美帆)

(3-59) 「どんなこと?…一人で悩んでいるより話しちゃった方がいいよ」「そんな  
 簡単なことじゃないわ。言えばゴローから嫌われるんじゃないか、とそれ  
 が一番心配で悩んでいたの」

(『黒いコンドル-泣くな! 海外駐在課長』仁科透)

次に、三人称のスル形の場合は未来の感情や感覚に対する〈予測〉を表す。例えば、  
 (3-60)の「悩む」は「ことにする」とは共起せず、「と思う」とは共起するため、三  
 人称の「ディアナ」の未実現の感情に対する〈予測〉を表していると考えられる。

(3-60) 「ディアナは『紅薔薇様』だよ。王様の側室の中で、一番偉い人。仮に誰か  
 を好きになったら、ディアナはきっと悩む」

<sup>21</sup> 「ゾットする」は吉永(2008)や関口(2014)が指摘しているように、短期的瞬間的な感覚変化を表すため、一人称の「ゾットしている」のようなテイル形は成り立たない。

(『悪役令嬢後宮物語』 涼風、鈴ノ助)

≠ディアナは悩むことにする

≡ディアナは悩むと思う

また、三人称のシテイル／シテイタ形は一人称と同様に、現在または過去の継続的な思考・感情・感覚の進行局面の〈確認・記述〉を表す。例えば、(3-61)の「悩んでいる」は三人称「彼」の「悩み始めた」後の現在における継続的な感情の進行局面を表しており、(3-62)の「悩んでいた」は三人称「きみのお父さん」の過去における継続的な感情の進行局面を表している。

(3-61) 「直也は父親の前では何も言えなくてすごい悩んでるよ。あいつかわいそうだよ」

(『教育』第52巻、第672～677号 国土社)

(3-62) 「きみの父さんは悩んでいたがね」「何を悩んでいたのです?」「自分がバスケ人であるのか、日本人であるのか、というアイデンティティの問題だよ。  
(後略)」

(『冬の翼』 森詠)

このように、タイプIVの心理動詞は一人称の場合、スル形で発話時現在の心理の〈表出〉と、未来の心理に対する〈予測〉を表し、シタ形で過去の態度や感情・感覚の〈確認・記述〉を表し、シテイル／シテイタ形で現在または過去における継続的事態の進行局面の〈確認・記述〉を表す。一方、三人称の場合、スル形で未来の心理に対する〈予測〉を表し、シテイル／シテイタ形で現在または過去における継続的事態の進行局面の〈確認・記述〉を表す。

### 3.2.1.5 タイプV

次に、タイプVについて見る。タイプVの心理動詞は表3-6に示すように、「感動する」「分かる」「疲れる」など36語ある。

表 3-6 タイプVの心理動詞

語彙リスト
感動する、分かる、見当がつく、あきあきする、飽きる、呆れる、焦る、頭にくる、安心する、いやになる、ウンザリする、驚く、ガッカリする、感心する、幻滅する、困る、懲りる、痺れる、退屈する、疲れる、ビックリする、ホッとする、まいる、弱る、(のどが)渴く、くたびれる、(肩が)凝る、(お腹が)空く、(足が)つる、(腹が)減る、(胃が)もたれる、見える、聞こえる、感じる、鼻につく、目につく(36語)

このタイプの心理動詞は、一人称のシタ形が過去の事態の〈確認・記述〉だけでなく発話時現在における心理の〈表出〉も表す点と、一人称と三人称のシテイル／シテイル形が現在または過去における心理の結果状態の維持の〈確認・記述〉を表すという点でタイプIVと異なる。以下、一人称、三人称の順番に論じる。まず、一人称の場合はスル形で未来の心理に対する〈予測〉を表すことができる。例えば、(3-63)の「感動する」は「ことにする」とは共起せず、「と思う」とは共起するため、一人称「僕」の未実現の感情に対する〈予測〉を表していると考えられる。このことから、タイプVも経験者の心理活動へのコントロールや、対象への働きかけ(心的作用)が相対的に弱いことが分かる。

(3-63)「僕は女の子の家に呼ばれてあげたてのコロッケが出てきたら感動するけどね。(略)」

(『村上春樹全作品』村上春樹)

≠感動することにする

≡感動と思う

この他、一人称のスル形は発話時現在の心理の〈表出〉を表すこともできる。例えば、(3-64)の「感動する」は心配りがあることをきっかけとして話し手に生じた「感動する」気持ちを〈表出〉している。

<sup>22</sup> (3-61)のように心理動詞が未来を表す場合、条件節と共起する例が多く見られる。その理由としては、「\*明日雨が降る」は成り立ちにくいのに対し、「明日低気圧が接近すれば、雨が降る」は成り立つように、非意志的な動詞は条件節と共起すれば未来を表しやすくなるということから、心理動詞のような話者の意志によってコントロールしにくい動詞も未来を表す場合には条件節と共起する例が多く見られるということが考えられる。ただ、条件節は基本的に「PならばQ」という時間を超えたところで成立することを表すため、心理動詞はこの構造に支えられて消極的に未来を表していると思われる。



(3-64) 「いろいろの場所に『貼り紙』が沢山あって変ったペンションですね。でも  
心配りがあってとても感動します」

(『「ペンションを継ぐ!」という君へ』 神田清剛)

また、一人称のシタ形は過去の心理の〈確認・記述〉を表すことができる。例えば、(3-65)の「感動する」は話し手の「その時」という過去における感情を回想することを表している。

(3-65) 「(前略) こんなことがあるのかと思って、とてもその時感動した。」と、のちに松川運動にうちこむきっかけを語っている。

(『松川十五年：真実の勝利のために』 松川事件対策協議会松川運動史編纂委員会)

この他、一人称のシタ形は現在の心理の〈表出〉を表すこともできる。タイプVの心理動詞はシタ形で一人称の現在の心理を表出する場合もタイプIIIと同様に、その心理変化が発話時現在と隣接する直近の過去に生じ、発話時現在にも存続しているという「パーフェクト性」を表す。例えば、(3-66)の「感動した」は話し手の「予備校生」が演説を聞いて生じた感情変化をそのまま吐露することを表している。

(3-66) 「鈴木さん、お話を感動しました」演説後、(筆者注：鈴木さんの) 周囲を予備校生が取り囲む。

(『夕刻のコペルニクス』 鈴木邦男)

さらに、一人称のシテイル／シテイタ形は現在または過去における心理活動の結果状態の維持の〈確認・記述〉を表す点でタイプIVと異なる。例えば、(3-67)の「感動している」は一人称の「おれ」の「感動した」後の現在における結果状態の維持を表しており、(3-68)の「感動していた」は話し手の過去における結果状態の維持を表している。

(3-67) 「お、おれは今、もうれつに感動している」飛雄馬が、マウンド上、心の中

でそう呟いている。

(『巨人の星』に必要なことはすべて人生から学んだ。あ。逆だ。』堀井憲一郎)

(3-68) 「……辛かった?」「違います。あの、言葉にしたら私って意外と頑張れるんだなって気付いて……自分に感動していました」

(『旦那様、甘く甘く囁いて』深森ゆうか)

このように、タイプVの心理動詞は一人称の場合、スル形、シタ形、シテイル形の三形式でいずれも現在の心理状態を表すことができるが、以下の4つの点で異なっていると思われる。

第一に、シテイル形の場合は4.1節で述べたように、一人称を三人称のように外面からその継続的な心理状態を描出し、「完成相」であり、かつ〈確認・記述〉という意味機能を表すのに対し、スル形とシタ形の場合は話し手の発話時点における心理状態をそのまま吐露し、「継続相」であり、かつ〈表出〉という意味機能を表す。

第二に、スル形もシタ形も〈表出〉を表すが、先に述べたように、スル形は「完成相」であるのに対し、シタ形は「パーフェクト相」であるという違いがある。

第三に、スル形とシタ形の用例の意味も異なる。スル形は話し手が聞き手に自分の感情や評価を伝える意味機能を表すのに対し、シタ形は話し手の心理を独り言のように吐露する意味機能を表すという違いがある。例えば、(3-69)の「困る」の場合、話し手は相手に自分の「困っている」という心情を伝えているのに対し、(3-70)の「困った」の場合は、話し手は発話時点における「困っている」という心情を独り言のように吐露している。(3-71)の「疲れる」と(3-72)の「疲れた」も同じような違いがある。

(3-69) 「困るわ。あなたにそういうことを云われると、途方に暮れてしまうわ。わたし、行くところも、泊まるところもないのよ。お金だって持っていないし」

(『銀幕座二階最前列』阿久悠)

(3-70) 「(前略) ぼくはね、香取さんのような女性が人を殺したとは信じられないんですよ」「それじゃ、どんな女に見えますの?わたし…」「困ったな…まず、何よりも美人だし、それに…」日比野記者は、言葉を探るような顔を

した。

(『不在証明は女たちのゲーム』和久峻三)

(3-71) 話し疲れた真也君は、恵子さんに、「もうよぶなあ、つかれるう」と、悲鳴をあげた。

(『夢がかなう日-その時輝いた7人の子どもたち』清水久美子)

(3-72) 「ああ疲れた。トミちゃん、なにか食うものないか」

(『青春の門-放浪篇』五木寛之)

第四に、(3-73) のように、工藤 (1995) や山岡 (2000) が述べているとおり、スル形は「一語文的」な形式が少ないのに対し、シタ形は感情の極めて直接的な〈表出〉であるためか、「一語文的」な形式が非常に多いという違いが見られる。

(3-73) a. 「お前の馬鹿にも呆れるね」

b. 「まあ、呆れた！よくそんな勝手なことが言えるわね」

このように、タイプVはスル形、シタ形、シテイル形の三形式がいずれも一人称の現在の心理状態を表す点で共通しているが、上の4つの点で異なっている。

次に、タイプVは三人称の場合、スル形で未来の心理に対する〈予測〉を表す。例えば、(3-74) の「感動する」は「ことにする」とは共起せず、「と思う」とは共起するため、三人称の「染五郎」の未実現の感情に対する〈予測〉を表していると考えられる。

(3-74) 「いま初めのほうだけを拝見したんだけど、すごいね、これ。染五郎もきつと感動しますよ。いや、たいへんな労作だ。(後略)」

(『演劇界』第59巻 日本演劇社)

≠染五郎も感動することにする

≡染五郎も感動すると思う

また、三人称のシテイル／シテイタ形は一人称と同様に、現在または過去における心理活動の結果状態の維持の〈確認・記述〉を表す。例えば、(3-75) の「感動してい

る」は三人称の「アドビの製品担当者」の「感動した」後の現在における結果状態の維持を表しており、(3-76)の「感動していた」は三人称の「姉」の過去における結果状態の維持を表している。

(3-75) 「1つのディスプレイ環境の中でCreative Cloudの各作業が完結し、生産性が非常に高い。しかも値段を聞いて驚いた。個人的に買いたいし、アドビの製品担当者も感動している」

(www.itmedia.co.jp/pcuser/articles/1403/04/news106\_2.html)

2022. 9. 27 閲覧

(3-76) 「ありがとう。君の姉さんのおかげだ」(中略)「姉も一感動してました。(後略)」

(『恋占い』赤川次郎)

このように、タイプVの心理動詞は一人称の場合、スル形で現在の心理の〈表出〉と未来の心理に対する〈予測〉を表し、シタ形で過去の心理の〈確認・記述〉と現在の心理の〈表出〉を表し、シテイル／シテイタ形で現在または過去における心理活動の結果状態の維持の〈確認・記述〉を表す。一方、三人称の場合はスル形で未来の心理に対する〈予測〉を表し、シテイル／シテイタ形で現在または過去における心理活動の結果状態の維持の〈確認・記述〉を表す。

### 3.2.1.6 タイプVI

次に、タイプVIについて見る。タイプVIは表3-7に示すように、「音がする」「声がする」など7語ある。

表3-7 タイプVIの心理動詞

語彙リスト
音がする、声がする、香りがする、匂う、鼻をつく、プンプンする、ムンムンする(7語)

このタイプの心理動詞は上のタイプI～Vと違い、経験者格が文に現れにくい。この場合、一人称経験者格は潜在的に存在しており、三人称経験者格は潜在的にも存在しない。例えば、(3-77) (3-78)のように、タイプVの「聞こえる」は経験者格(「私

に「彼に」) が文に現れることができるのに対し、タイプVIの「音がする」は経験者格が文に現れにくい。また、(3-79)のように経験者格が文に現れないとき、必ず一人称の知覚を表すため、タイプVIの心理動詞は一人称の知覚を表し、三人称の知覚を表さない。

(3-77) 私には妙な音が {聞こえる / <sup>?</sup>する}。

(3-78) 彼には妙な音が {聞こえている / <sup>?</sup>している}。

(3-79) 妙な音が {聞こえる / する}。(一人称)

テンス・アスペクトについては、まず、スル形の場合は一人称の未来の知覚に対する〈予測〉を表すことができる。例えば、(3-80)の「音がする」は「ことにする」と共起せず、「と思う」と共起できるため、話し手「ならの木」の未実現の知覚に対する〈予測〉を表していると考えられる。

(3-80) 「鈴がいいかな。枝にぶらさげたら、いい音がするよ」ならの木はうれしくて、またさらさらと青い若葉を鳴らしました。

(『日本児童文学』第52巻 児童文学者協会)

≠いい音がすることにする

≡いい音がすると思う

この他、スル形の場合は話し手の現在の知覚の〈表出〉を表すこともできる。例えば、(3-81)の「音がする」は話し手の発話時現在の知覚を表している。

(3-81) 「うしろで、ボン、ボンて音がするのよ」「笹山のおじさんが鉛、じゃなくて銅の弾でノックしてるんだよ」

(『なで肩の狐』花村萬月)

次に、シタ形の場合は一人称の過去の知覚に対する〈確認・記述〉を表す。例えば、(3-82)の「音がした」は話し手の過去の「ジージーと軽い静かな音がした」という知覚を回想することを表している。

(3-82) 「その箱に、そつと顔をよせると、香料の利いたミシン油の臭いが軽く鼻をつき、手廻しのとつてをまわすと、ジージーと軽い静かな音がした」

(『文章読本』丸谷才一)

最後に、シテイル／シテイタ形の場合は一人称の現在または過去の継続的な知覚の進行局面の〈確認・記述〉を表す。例えば、(3-83)の「音がしている」は話し手の現在における継続的な知覚の進行局面を表している。同様に(3-84)は話し手の過去における継続的な知覚の進行局面を表している。

(3-83) 「ここから海が見えるんです」とわたしは言った。「夜になると暗くて、真っ黒にしか見えませんが。今も少し、波の音がしています」

(『一角獣』小池真理子)

(3-84) 翌日、というかその日、昼前になってシーツの袋から這い出した私は、さっそくとなりの青年に、「ゆうべなにやら音がしていたが」と切り出した。

(『文學』岩波書店)

このように、タイプVIの心理動詞の場合、一人称経験者格は潜在的に存在しているのに対し、三人称経験者格は顕在的にも潜在的にも存在しない。また、スル形で話し手の現在の知覚の〈表出〉と、未来の知覚に対する〈予測〉を表し、シタ形で一人称の過去の知覚の〈確認・記述〉を表し、シテイル／シテイタ形で一人称の現在または過去の継続的な知覚の進行局面の〈確認・記述〉を表す。

### 3.2.1.7 タイプVII

最後に、タイプVIIの心理動詞について見る。表3-8に示すように、タイプVIIは「ゴワゴワする」「ザラザラする」など知覚動詞6語ある。

表3-8 タイプVIIの心理動詞

語彙リスト
ベトベトする、ザラザラする、スベスベする、ツルツルする、ヌルヌルする、ネバネバする(6語)

このタイプの心理動詞はアクチュアル（個別時）な事態においてはタイプVIと同様であり、(3-85) (3-86) のように一人称経験者は潜在的に存在しているのに対し、三人称経験者は顕在的にも潜在的にも存在しない。

(3-85) \* {私／彼} には床がベトベトする。

(3-86) 床がベトベトする。(一人称)

テンス・アスペクト的特徴については、まず、スル形の場合は一人称の未来の知覚に対する〈予測〉を表すことができる。例えば、(3-87) 「ベトベトする」は「ことにする」と共起せず、「と思う」と共起できることから、一人称「甚」の触覚に対する〈予測〉を表していると考えられる。

(3-87) 甚「やったことあるのか」女「へえ、けどあれはうるそうおまんナア。もう風が吹いたら目へ入るし、雨が降ったらベトベトするし、髪についたらややこしいてどうもならん」

〔『米朝落語全集』桂米朝〕

≠雨が降ったらベトベトすることにする

≡雨が降ったらベトベトと思う

この他、一人称の現在の知覚の〈表出〉を表すこともできる。例えば、(3-88) の「ベトベトする」は話し手の発話時の触覚を表している。

(3-88) 「ベトベトする～も～ポテトチップス食べたら、拭いてからやってよ～」

(Yahoo! ブログ)

次に、シタ形の場合は一人称の過去の知覚の〈確認・記述〉を表す。例えば、(3-89) の「ベトベトした」は「稲葉篤紀外野手」の過去の触覚を表している。

(3-89) 本ハム稲葉篤紀外野手 (39) が (中略) 袖を通した名球会ブレザーの着心地について聞かれると「若干、汗をかいていたので…ベトベトしました」

と笑いを誘っていた。

([www.nikkansports.com/baseball/news/f-bb-tp0-20120523-955875.html](http://www.nikkansports.com/baseball/news/f-bb-tp0-20120523-955875.html))

2022. 7. 29 閲覧

最後に、シテイル／シテイタ形の場合は一人称の現在または過去における継続的な知覚の進行局面の〈確認・記述〉を表す。例えば、(3-90)の「ベトベトしている」は話し手の現在における継続的な知覚の進行局面を表している。同様に(3-91)は話し手の過去における継続的な知覚の進行局面を表している。

(3-90) 花を分解していた別の生徒は「なんだかベトベトしている。蜜ではないか。」

( (2-59) の再掲)

(3-91) 「(筆者注：原爆投下後、母が) 弟を捜して川のほとりを歩いている時に、  
「黒い雨」も浴びたという。「嫌な雨だった」「臭くて、べとべととしていた」  
……。

([www.asahi.com/articles/ASP8633SLP84PITB00Q.html](http://www.asahi.com/articles/ASP8633SLP84PITB00Q.html)) 2022. 9. 27 閲覧

このように、タイプⅦの心理動詞はアクチュアル（個別時）な事態においてはタイプⅥと同様である。人称については、一人称経験者格は潜在的に存在しているのに対し、三人称経験者格は顕在的にも潜在的にも存在しない。また、テンス・アスペクトについては、スル形で一人称の現在の知覚の〈表出〉と、未来の知覚に対する〈予測〉を表し、シタ形で一人称の過去の知覚の〈確認・記述〉を表し、シテイル／シテイタ形で一人称の現在または過去における継続的な知覚の進行局面の〈確認・記述〉を表す。

### 3.2.2 ポテンシャル（潜在時）な事態の場合

前節では、アクチュアル（個別時）な事態における各タイプのテンス・アスペクトの特徴を見てきた。本節では、ポテンシャル（潜在時）な事態における各タイプのテンス・アスペクトの特徴について例を挙げながら考察する。



## 3.2.2.1 タイプI～V

まず、タイプI～Vについて見る。ポテンシャル（潜在時）な事態において、タイプI～Vの心理動詞はスル形で属性に対する〈確認・記述〉を表せるが、シテイル形で属性に対する〈確認・記述〉を表せない。例えば、(3-92)のようにタイプIの「期待する」はスル形で「親は子どもに期待するものだ」とほぼ同じ意味を表し、経験者である「親」の属性に対する〈確認・記述〉を表すのに対し、シテイル形では「親」の属性を表さず、個別のある親の継続的な心理活動を表す。タイプII～Vの(3-93)～(3-96)も同様である。

- (3-92) 親は子どもに{期待する／#期待している}。 (タイプI)  
 (3-93) 人は死を{恐れる／#恐れている}。 (タイプII)  
 (3-94) 天才は新しいアイデアを{思いつく／#思いついている}。 (タイプIII)  
 (3-95) 女の子は洋服の選択に{迷う／#迷っている}。 (タイプIV)  
 (3-96) 日本人は国産品に{安心する／#安心している}。 (タイプV)

一方、上のように経験者の属性を表す場合ではなく、対象の属性を表す場合、シテイル形では依然として対象の属性を表せないが、スル形ではタイプI～IIIは対象の属性をほぼ表せないのに対し、タイプIV、タイプVは対象の属性を表す傾向がある。例えば、(3-92')のように「期待する」は対象の「子ども」の属性を表せず、受身形の「期待される」が使われる。(3-93')の「恐れる」と(3-94')の「思いつく」も同様である。これに対し、(3-95')のように「迷う」は「洋服の選択は女の子を迷わせるものだ」という意味を表し、感情対象の「洋服の選択」の属性を表す。(3-96')の「安心する」も同様である。

- (3-92') 子どもは{\*期待する／親に期待される}。 (タイプI)  
 (3-93') 死は{\*恐れる／人に恐れられる}。 (タイプII)  
 (3-94') 新しいアイデアは{\*思いつく／天才によって思いつかれる}。 (タイプIII)  
 (3-95') 洋服の選択は迷う。 (タイプIV)  
 (3-96') 国産品は安心する。 (タイプV)

このように、タイプⅠ～Ⅲはほぼスル形で対象の属性を表せないのに対し、タイプⅣ、タイプⅤはスル形で対象の属性を表す傾向があるという違いがある<sup>23</sup>。ただし、例外も存在する。例えば、(3-97)の「がっかりする」はタイプⅣであるが、(3-97')のようにル形で対象の属性を表すのは許容されにくく、堀川(1992)でも指摘されているように名詞述語の「がっかりだ」の方がより自然である。(3-98)の「びっくりする」も同様である。

(3-97) 人間は予想外の失敗にがっかりする。

(3-97') 予想外の失敗は {?がっかりする / \*がっかりされる / がっかりだ}。

(3-98) 大人は子供の成長の早さにびっくりする。

(3-98') 子供の成長の早さは {?びっくりする / \*びっくりされる / びっくりだ}。

以上のように、タイプⅠ～Ⅴはスル形では属性を表せるのに対し、シテイル形では属性を表せない。また、スル形で属性を表す場合、タイプⅠ～Ⅲはほぼ経験者の属性しか表さないのに対し、タイプⅣ、タイプⅤは経験者の属性だけでなく、対象の属性も表せる傾向があるということを見てきた。

### 3.2.2.2 タイプⅥ、タイプⅦ

次に、タイプⅥ、タイプⅦについて見る。まず、タイプⅥはスル形の場合は澤田(2012)が述べたように、知覚対象を主題化して属性を表すことが可能である。例えば、(3-99)は「この楽器」の「おもしろい音がする」という属性に対する〈確認・記述〉を表している。(3-100)も同様である。

(3-99) この楽器はおもしろい音がする。

(3-100) この紅茶はさわやかな味がする。

<sup>23</sup> 堀川(1992)では、「対象ハ 心理動詞スル」のようにスル形で対象の属性を表す用法を「形容詞的用法」と呼んでいる。このことから、タイプⅣ、ⅤはタイプⅠ～Ⅲより〈状態〉を表す形容詞に近いことが分かる。以下のタイプⅥ、ⅦもタイプⅣ、Ⅴと同様である。

(澤田 2012 : 205)

また、タイプVIの心理動詞のうち、「音がする」「味がする」などは、「～ガシテイル」の形の場合、3.4節で述べたように話し手の継続的な知覚を表すが、「～ヲシテイル」の形になると、知覚対象の属性を表すようになる。例えば、(3-101)は知覚対象「この楽器」の「おもしろい音をしている」という属性に対する〈確認・記述〉を表している。(3-102)も同様である。

(3-101) この楽器はおもしろい音をしている。(3-102) この紅茶はさわやかな味をしている。

(澤田 2012 : 204)

次に、タイプVIIについて見る。タイプVIIはスル形だけでなくシテイル形も対象の属性に対する〈確認・記述〉を表すことができるという点ではタイプVIと異なる。まず、スル形の場合は(3-103)のように、主題提示を表す「って」を使うことにより知覚対象である「海風」を主題化してその「ベトベトする」という属性に対する〈確認・記述〉を表している。(3-104)の「スベスベする」も同様である。

(3-103) 「海風ってベトベトする」 ((2-58)の再掲)(3-104) 「瀬戸物はすべすべするので、つい落してこわしちゃった。(後略)」

(『童話実作入門』後藤檜根)

また、シテイル形の場合は(3-105)のように知覚対象である「小麦」の「葉」を主題化してその「ベトベトしている」という属性に対する〈確認・記述〉を表している。

(3-106)の「スベスベしている」も同様である。

(3-105) 1・2年生は、学校農園で小麦の観察をしました。(中略)「葉はざらざらして、ベトベトとしている」(中略)などの発見がありました。

(swa.edu.city.atsugi.kanagawa.jp/weblog/index.php?id=108&amp;type=1&amp;column\_id=145317&amp;category\_id=145&amp;date=20190514) 2022.9.27 閲覧

(3-106) 「トマトはすべすべしている」

([www.mizuta-koinoki.jp/mizuta-youjien/kondata0206.pdf](http://www.mizuta-koinoki.jp/mizuta-youjien/kondata0206.pdf)) 2022. 9. 27 閲覧

ただし、タイプVIIの心理動詞はスル形もシテイル形も属性を表せるが、鈴木(2017)が指摘しているとおりに、属性を表す場合は(3-107)(3-108)のようにスル形のほうがやや許容度が下がる。

(3-107) 梨地織の布は {<sup>(?)</sup> ざらざらする / ざらざらしている}。

(3-108) 樹液は {<sup>(?)</sup> べたべたする / べたべたしている}。

(鈴木 2017 : 127)

### 3.3 本章のまとめ

以上、心理動詞をテンス・アスペクト、人称制限、文の意味機能の観点から7つに分けた。その結果を表3-9に示す。

表 3-9 本研究における心理動詞の7分類

タイプ	分類指標 語例・語数	アクチュアル(個別時)な事態						ポテンシャル (潜在時)な事態		
		一人称			三人称			スル	シテイル	
		スル	シタ	シテイル/シテイタ	スル	シタ	シテイル/シテイタ			
I	考える、恨む等 (28)	①意志表出 (T:未来 A:完成相) ②心理表出 (T:現在 A:完成相)	確認・記述 (T:過去 A:完成相)	確認・記述 (T:現在/過去 A:動作継続相)	予測 (T:未来 A:完成相)	×	確認・記述 (T:現在/過去 A:動作継続相)	確認・記述 (主に経験者 の属性)	×	
II	喜ぶ、恐れる等 (6)	予測 (T:未来 A:完成相)	①確認・記述 (T:過去 A:完成相) ②心理表出(現在) (T:過去 A:パーフェクト相)	確認・記述 (T:現在/過去 A:結果継続相)			確認・記述 (T:現在/過去 A:結果継続相)			確認・記述 (T:現在/過去 A:動作継続相)
III	ひらめく、思いつく等 (4)						確認・記述 (T:現在/過去 A:結果継続相)			
IV	悩む、痛む等 (36)	確認・記述 (T:過去 A:完成相)	確認・記述 (T:現在/過去 A:動作継続相)	確認・記述 (T:現在/過去 A:動作継続相)			確認・記述 (対象の 属性)			
V	分かる、驚く等 (36)	①予測 (T:未来 A:完成相) ②心理表出 (T:現在 A:完成相)	①確認・記述 (T:過去 A:完成相) ②心理表出(現在) (T:過去 A:パーフェクト相)	確認・記述 (T:現在/過去 A:結果継続相)				確認・記述 (T:現在/過去 A:結果継続相)		
VI	音がする等 (7)	確認・記述 (T:過去 A:完成相)	確認・記述 (T:現在/過去 A:動作継続相)	確認・記述 (T:現在/過去 A:動作継続相)			×	確認・記述 (対象の 属性)		確認・記述 (対象の 属性)
VII	ガラガラする等 (6)									

(表 1-1 の再掲)

このうち、タイプⅠは外的運動動詞（「行く」「乗る」「戻る」など）と同様にスル形で一人称の未来の意志〈表出〉を表すことができる。また、一人称の場合、スル形で現在の心理の〈表出〉を表すこともでき、シタ形で過去の心理の〈確認・記述〉を表し、シテイル／シテイタ形で現在または過去における継続的事態の進行局面の〈確認・記述〉を表す。さらに、三人称の場合、スル形で未来の心理に対する〈予測〉を表し、シテイル／シテイタ形で現在または過去における継続的事態の進行局面の〈確認・記述〉を表す。

タイプⅡは一人称のスル形が未来の意志〈表出〉を表さず、未来の心理に対する〈予測〉のみを表すという点でタイプⅠと異なる。

タイプⅢは一人称のシタ形で過去の心理の〈確認・記述〉だけでなく、現在の心理の〈表出〉を表すこともできるという点と、一人称と三人称のシテイル／シテイタ形で現在または過去における継続的心理の結果状態の〈確認・記述〉を表すという点でタイプⅡと異なる。

タイプⅣは一人称のスル形で未来の心理に対する〈予測〉だけでなく、発話時現在の心理の〈表出〉を表すこともできるという点と、シタ形で過去の心理の〈確認・記述〉のみを表すという点、及び一人称と三人称のシテイル／シテイタ形は現在または過去における心理の進行局面の継続性を表すという点でタイプⅢと異なる。

タイプⅤは一人称のスル形だけでなくシタ形も〈表出〉を表すことができるという点と、一人称と三人称のシテイル／シテイル形が現在または過去における心理の結果状態の維持の〈確認・記述〉を表すという点でタイプⅣと異なる。

タイプⅥは上のタイプⅠ～タイプⅤと違い、三人称の場合は顕在的にも潜在的にも存在しないという点で異なる。

最後に、タイプⅦは三人称の場合が成立しないだけでなく、シテイル形で属性を表すことができる点においてタイプⅠ～タイプⅥと異なり、静態動詞（「聳える」「優れる」など）と接近している。

このように、心理動詞はテンス・アスペクト、人称制限、文の意味機能から見ると、均質なものではなく動作性の高いものから状態性の高いものまで7つのタイプに分けられる。

次に、第四章ではこの7つのタイプにおける自己制御性と即時性の違いについて論じる。

## 第四章 心理動詞の各タイプの自己制御性と即時性

### 4.1 はじめに

前章ではテンス・アスペクト、人称制限、文の意味機能の観点から心理動詞を7つに分類した。本章では、前章で分類した各タイプの心理動詞の自己制御性と即時性について考察し、テンス・アスペクトとの関連性を踏まえた上で、各タイプの心理動詞と〈動き〉を表す語や、〈状態〉を表す語との関係を見ることにより、心理動詞の位置付けや、心理動詞内部の各タイプの連続性を明らかにする。

前章で述べたように、タイプⅠの心理動詞は経験者の心理活動へのコントロールや、対象への働きかけ（心的作用）が相対的に強く、「食べる」などの「外的運動動詞」に近いのに対し、タイプⅡ～Ⅶの心理動詞は経験者の心理活動へのコントロールや、対象への働きかけ（心的作用）が相対的に弱く、「外的運動動詞」から離れていくという違いがある。経験者の心理活動へのコントロールについて、命令形になるかどうかで違いが見られる。

例えば、(4-1)の「食べる」などの「外的運動動詞」は命令形になる。同様に(4-2)のタイプⅠの「尊敬する」も命令形になる。これに対し、同じ心理動詞でも(4-3)のタイプⅡの「心配する」は命令形になりにくいという違いがある。このことから、「尊敬する」の場合、経験者はその感情の生起をコントロールでき、「外的運動動詞」に近いのに対し、「心配する」以下の動詞では、経験者は感情の生起をコントロールしにくく、「外的運動動詞」と離れていることが分かる。

(4-1) 食べろ／渡せ／走れ／勉強しろ！（外的運動動詞）

(4-2) 尊敬しろ／考えろ／諦めろ／反省しろ！（タイプⅠ）

(4-3) <sup>??</sup>心配しろ<sup>24</sup>／<sup>??</sup>思いつけ／<sup>??</sup>ムカつけ／<sup>??</sup>困れ／\*音がしろ／\*スベスベしろ！

<sup>24</sup> 「親だったらもっと子供のことを心配しろ！」「もっとマシなアイデアを思いつけよ！」「子供のことをバカにされたんだから、もっとムカつけよ！」のように、相手に対してそうなってほしいという願望を表す場面では許容度が上がるが、場面を想定しにくい場合が多いため、「??」にした。



(順にタイプⅡ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ)

このうち、タイプⅡ～Ⅶは経験者の心理活動へのコントロールが相対的に弱い点で共通しているが、次のような違いもある。例えば、(4-4)のようにタイプⅡの「心配する」は否定の命令形(「スルナ」の形)になるのに対し、(4-5)のようにタイプⅤの「困る」は否定の命令形にならない。このことから、「心配する」の場合、経験者は感情の生起の防止をコントロールできるのに対し、「困る」の場合、経験者は感情の生起の防止をコントロールできないことが分かる。

(4-4) {心配する／恐れる／後悔する} な!

(4-5) {\*困る／\*ひらめく／\*見える} な!

このように、心理動詞が表す事態において、経験者の心理活動に対するコントロールの強さ、即ち2.3.1節で述べた「自己制御性」の高さはタイプによって違いが見られる<sup>25</sup>。そのため、本研究では「自己制御性」を1つの基準として7タイプと「外的運動動詞」との関係を考察し、「自己制御性」が相対的に高いほど「外的運動動詞」と

<sup>25</sup> 小竹(2011)で指摘されているように、スル形で対象の属性を表す心理動詞は、「経験者が主体的に関与せず、原因によって不可避免的に引き起こされるようなタイプの事象を表」(p.84)し、「経験者のコントロールが及ばないタイプの心理事象を表す」(p.87)ものが多い。例えば、(4-i)に挙げる心理動詞は否定命令文を形成しにくいと、このような心理動詞が表す事象においては、経験者が心理状態の生起を防止する余地がないと考えられる。この種の心理動詞はスル形で対象の属性を表す属性文を形成する。これに対し、(4-ii)の心理動詞では否定命令文を形成しやすいと、経験者が心理状態の生起を主体的に防止し得ると考えられる。これらの心理動詞はスル形で属性文を形成しにくいと指摘している。

- (4-i) a. \*急な変更に困るな。(急な変更は困る)  
b. \*味付けの濃い料理に飽きるな。(味付けの濃い料理は飽きる)

- (4-ii) a. 雷の音を恐れるな。(雷の音は恐れる)  
b. 花束のプレゼントを喜ぶな。(花束のプレゼントは喜ぶ)

(小竹 2011:88-89)

小竹(2011)からの指摘から、スル形で対象の属性を表すタイプⅣ～Ⅶは自己制御性が相対的に弱い<sup>弱</sup>のに対し、スル形で対象の属性を表さないタイプⅠ～Ⅲは自己制御性が相対的に強い<sup>強</sup>という傾向があると窺える。このように、心理動詞のテンス・アスペクトと自己制御性は関連していると考えられる。本章では各タイプの自己制御性をさらに詳しく見る。

接近していることを指摘する。

また、前章ではタイプⅡは〈表出〉という一人称の現在の心理活動を表す意味機能を持たないのに対し、他のタイプは持っているとして指摘した。例えば、(4-6)のようにタイプⅠの「恨む」は話し手の発話時現在の心理活動を表すことができるのに対し、タイプⅡの「心配する」は表すことができない。(4-7)も同様である。

(4-6) あなたを {恨む／\*心配する}。

(4-7) ああ、{迷う／\*喜ぶ}。

しかし、タイプⅡ以外の心理動詞はいずれも発話時現在の心理活動をスル形で表出することができると言っても、聞き手がいることを前提にするか独り言でも成り立つかで異なっている。例えば、(4-8)のようにタイプⅠの「恨む」は聞き手がおらず、独り言の場合は成り立たないのに対し、タイプⅣの「迷う」は独り言の場合は成り立つという違いがある。このように、独り言の〈表出〉を表すという性質、即ち2.3.2.2節で述べた「即時性」は、心理動詞のタイプによって違いが見られる。

(4-8) 「ああ、{\*恨む／迷う}」と呟いた。

また、2.3.2.2節で述べたように、松野(2016)では相手への働きかけを意図せず、独り言として成立し、かつ経験者の現在の心理活動を表す、即ち「即時性」が相対的に高いものには、(4-9)のように形容詞の場合が多いが、心理動詞の場合もあると指摘している。このように、「即時性」が相対的に高い心理動詞は、静的〈状態〉を表す形容詞に近いと考えられる。

(4-9) 「ああ、{嬉しい／悲しい／寂しい} な」と呟いた。

従って、本研究では「即時性」をもう1つの基準として7タイプと〈状態〉を表す形容詞との関係を見ることにより、「即時性」が相対的に高いほど形容詞と接近して

いることを指摘する<sup>26</sup>。

そこで、本章では、前章で分類した各タイプの心理動詞の自己制御性と即時性について考察し、各タイプの心理動詞と〈動き〉を表す語や、〈状態〉を表す語との関係を見ることにより、心理動詞の位置付けや、心理動詞内部の各タイプの連続性を明らかにする。

#### 4.2 心理動詞の各タイプの自己制御性と即時性

本節では各心理動詞が命令文や即時文に使えるかどうかを考察する。命令文に使えるということは、その心理状態になる（ならない）ように主体が事態の過程段階を制御できるということである。また、即時文に使えるということは、発話時点における主体の即時的な感情を表すことができるということである。

本研究では(4-10)のように肯定の命令形（「シロ」の形）になる場合と、(4-11)のように否定の命令形（「スルナ」の形）になる場合をいずれも命令文とする。

(4-10) 尊敬しろ／考えろ／諦めろ／反省しろ！

(4-11) {心配する／恐れる／後悔する} な！

また、(4-12) (4-13) のように「わっ／あっ／ああ」などの感動詞をつけて話し手の即時的な感情を表すことができる文を即時文とする。

(4-12) (突然雷が鳴って思わず)「わっ、ビックリした」と叫んだ。

(4-13) (どちらの料理を注文するか迷い、思わず)「ああ、迷うなあ」と呟いた。

((2-138) (2-139) の再掲)

さらに、前章で分類した心理動詞において、各タイプの語が命令文になるかどうか即時文になるかどうかを見る。結果をまとめると、以下の表 4-1 のようになる。

<sup>26</sup> また、第三章の注 23 で述べたように、タイプⅣ～Ⅶは「対象ハ 心理動詞スル」のようにスル形で対象の属性を表すという「形容詞的用法」を持っているため、〈状態〉を表す形容詞に近いと考えられる。このように、心理動詞はテンス・アスペクトにおいても即時性においても形容詞的性質が窺える。

表 4-1 本研究における各タイプの心理動詞の自己制御性と即時性

		自己制御性	
		+命令文	-命令文
即時性	一 即時 文	タイプ I : 考える、諦める、反省する、判断する、推測する、評価する、祈る、疑う、思う、(と/ように)見る、確信する、期待する、希望する、察する、信じる、信用する、推察する、願う、望む、恨む、感謝する、敬服する、軽蔑する、嫉妬する、尊敬する、同意する、同情する、憎む(28 語)	タイプ I : なし
		タイプ II : 心配する、恐れる、怒る、喜ぶ、後悔する、苦しむ(6 語)	タイプ II : なし
		タイプ III : なし	タイプ III : 気がつく(1 語)
		タイプ IV : 恥じる (1 語)	タイプ IV : 怒りを覚える、ウキウキする、気になる、震える、火照る(5 語)
		タイプ V : なし	タイプ V : 感心する、感動する、幻滅する、退屈する、鼻につく、目につく(6 語)
		タイプ VI : なし	タイプ VI : 鼻をつく、匂う(2 語)
		タイプ VII : なし	タイプ VII : なし
	十 即時 文	タイプ I : なし	タイプ I : なし
		タイプ II : なし	タイプ II : なし
		タイプ III : 思いつく、さとる(2 語)	タイプ III : ひらめく(1 語)
		タイプ IV : 懂れる、イライラする、緊張する、じれる、照れる、悩む、迷う、むかつく、めげる(9 語)	タイプ IV : 痛む、うずく、ワクワクする、ゾクゾクする、ゾツとする、白ける、癩に障る、ハラハラする、ガクガクする、カサカサする、キリキリする、クラクラする、眩む、ショボショボする、ズキズキする、チカチカする、チクチクする、ドキドキする、ヒリヒリする、ムカムカする、ムズムズする(21 語)
		タイプ V : 焦る、安心する、驚く、ガッカリする、ビックリする、ホツとする(6 語)	タイプ V : 頭に来る、ウンザリする、分かる、見当がつく、あきあきする、飽きる、呆れる、いやになる、困る、懲りる、痺れる、疲れる、まいる、弱る、(のどが)渴く、くたびれる、(肩が)凝る、(お腹が)空く、(足が)つる、(腹が)減る、(胃が)もたれる、感じる、見える、聞こえる(24 語)
		タイプ VI : なし	タイプ VI : 音がする、声がある、香りがする、プンプンする、ムンムンする(5 語)
		タイプ VII : なし	タイプ VII : ザラザラする、スベスベする、ツルツルする、ヌルヌルする、ネバネバする、ベトベトする(6 語)

以下、各タイプの心理動詞の自己制御性と即時性について見る。

### 4.2.1 タイプ I

まず、タイプ I の自己制御性と即時性について見る。タイプ I の語はすべて [+命令文, -即時文]<sup>27</sup>であるように、自己制御性が相対的に高く、即時性が相対的に低い。

表 4-2 タイプ I の自己制御性と即時性

		自己制御性	
		+命令文	-命令文
即時性	-即時文	A) 考える、諦める、反省する、判断する、推測する、評価する、祈る、疑う、思う、(と/ように)見る、確信する、期待する、希望する、察する、信じる、信用する、推察する、願う、望む、恨む、感謝する、敬服する、軽蔑する、嫉妬する、尊敬する、同意する、同情する、憎む(28語)	B) なし
	+即時文	C) なし	D) なし

自己制御性については、タイプ I は肯定の命令文も否定の命令文も成り立ちやすい。例えば、「考える」は (4-14a) のように肯定の命令文も (4-14b) のように否定の命令文も成り立つ。つまり、「考えるように努める」こともできれば、「考えないように努める」こともできる。(4-15) の「信じる」と (4-16) の「期待する」も同様である。

- (4-14) a. 優先順位を考えろ！  
 b. 失敗なんか考えるな！
- (4-15) a. 自分を信じろ！  
 b. あの人の話は信じるな！
- (4-16) a. 自分に期待しろ！  
 b. 他人に期待するな！

<sup>27</sup> 本研究では [+命令文] で命令文が成立することを表し、[-命令文] で命令文が成立しないことを表す。[+即時文] と [-即時文] も同様である。

また、「尊敬する」は(4-17a)のように肯定の命令文では許容されやすいし、(4-17b)のように否定の命令文では社会一般的な常識から許容されにくいと思われがちであるが、文法的には許容されると考えられる。(4-18)の「望む」も同様である。

(4-17) a. 他人を尊敬しろ！

b. (ヤクザの知り合いを尊敬しているという人に対して)「あんなやつのこと、尊敬するなよ！」

(4-18) a. (「オレなんか、もう出世しなくていいよ」という同僚に対して)「もっと出世を望めよ！」

b. 出世を望むな！

このように、タイプ I は自己制御性が相対的に高く、経験者が意志的に心理活動を行うことも、行わないこともコントロールできるものが多い。

また、即時性については、タイプ I の心理動詞は即時文には使われない。その代わりに、似た意味の形容詞や形容動詞が使われやすい。例えば、(4-19)のように犯人をテレビで見たら、「ああ、軽蔑する」ではなく、「ああ、酷いな」のように形容(動)詞述語文を即時的に発するのが一般的である。(4-20) (4-21) も同様である。

(4-19) (汚職事件のニュースを見て、思わず)「ああ、{\*軽蔑する/酷い}」と呟いた。

(4-20) (次回のオリンピックは北京で開催するというニュースを聞いて、思わず)「ああ、{\*期待する/楽しみだ}」と呟いた。

(4-21) (お客様からのお礼状を読んで、思わず)「ああ、{\*感謝する/嬉しい}」と呟いた。

形容(動)詞と違い、タイプ I の心理動詞は聞き手が発話現場にいる場合に使われやすい。例えば、(4-19')のように犯人が目の前にいるとき、犯人に対して「あなたを軽蔑する」と言うのは妥当になる。即ち、山岡(2000)で指摘されている聞き手に対する情意を積極的に表明する発話機能である「対人的情意表明」のことである。(4-

20') (4-21') も同様である。

(4-19') (汚職をした官僚に向かって)「あなたを軽蔑する」と言った。

(4-20') (有望な若者に向かって)「あなたの活躍に期待します」と言った。

(4-21') (協力してくれた人に向かって)「心より感謝します」と言った。

このように、即時文は発話時点における心理状態の即時的発露を表すものであるが、タイプⅠの心理動詞は主に「考える」「判断する」のような脳内での処理を経た思考活動や、「軽蔑する」「期待する」のような感情とともに評価を表すものであるため、同じ心理動詞といっても即時的な心理状態を表す動詞とは性質が異なることを示している。

#### 4.2.2 タイプⅡ

次に、タイプⅡの自己制御性と即時性について見る。タイプⅡの心理動詞は「心配する」「恐れる」などの6語がすべて [+命令文, -即時文] であるように、自己制御性が相対的に高く、即時性が相対的に低い。

表 4-3 タイプⅡの自己制御性と即時性

		自己制御性	
		+命令文	-命令文
即時性	-即時文	A) 心配する、恐れる、怒る、喜ぶ、後悔する、苦しむ(6語)	B) なし
	+即時文	C) なし	D) なし

自己制御性については、タイプⅡの心理動詞はタイプⅠと同様に命令文が成り立ち、自己制御性が相対的に高い。例えば、「心配する」は(4-22)のように肯定の命令形にも否定の命令形にもなることから、「心配するように努める」ことも「心配しないように努める」こともできるということが分かる。(4-23)の「恐れる」も同様である。

ただし、吉永（2008）で指摘されているように、このような例文は習慣的な用法が多く、タイプⅠの「考えろ」や「反省しろ」ほど自己制御性が高くないと考えられる。

(4-22) 先のことを {心配しろ／心配するな} ！

(4-23) a. 法律を恐れろ！

b. 失敗を恐れるな！

また、即時性については、タイプⅡの心理動詞もタイプⅠと同様に即時文に使われない。即時文の場合、タイプⅡと意味が対応する形容（動）詞が使われやすい。例えば、(4-24)のように友達から誕生日プレゼントをもらった際、動詞の「喜ぶ」ではなく形容詞の「嬉しい」を使って喜びの感情を表す。(4-25)も同様である。

(4-24) (友達から誕生日プレゼントをもらって、思わず)「ああ、{\*喜ぶ／嬉しい}」  
と言った。

(4-25) (最近余震が起きるおそれがあるというニュースを聞いて、思わず)「ああ、  
{\*恐れる／やだ、こわい}」と呟いた。

このように、タイプⅡの心理動詞は自己制御性が相対的に高く、即時性が相対的に低い。ただし、肯定の命令形が成り立ちにくい点でタイプⅠと異なり、経験者が感情の生起をしないようにコントロールすることは可能であるが、感情の生起をするようにコントロールすることは困難である。そのため、タイプⅠより自己制御性が低いと考えられる。

### 4.2.3 タイプⅢ

次に、タイプⅢの自己制御性と即時性について見る。タイプⅢの心理動詞は表 4-4 に示すように、「気がつく」の 1 語は [－命令文，－即時文]、「思いつく」「さとる」の 2 語は「＋命令文，＋即時文」、「ひらめく」の 1 語は [－命令文，＋即時文] である。このように、自己制御性も即時性も相対的に低いものもあれば、相対的に高いものもある。即時性が相対的に高いものがある点でタイプⅡと異なる。



表 4-4 タイプⅢの自己制御性と即時性

		自己制御性	
		+命令文	-命令文
即時性	-即時文	A) なし	B) 気が付く(1語)
	+即時文	C) 思いつく、さとる(2語)	D) ひらめく(1語)

自己制御性については、タイプⅢの心理動詞は「さとる」「思いつく」のように自己制御性が相対的に高いものもあれば、「気が付く」「ひらめく」のように相対的に低いものもある。例えば、「さとる」は(4-26a)のように肯定の命令文にも(4-26b)のように否定の命令文にも使われる。即ち、「さとるように努める」ことも「さとらないように努める」こともコントロールできる。(4-27)の「思いつく」も同様である。ただし、タイプⅡと同じように習慣的な用法が多く、タイプⅠの「考える」などの自己制御性ほど高くないと考えられる。

(4-26) a. 素人には無理だとさとれ!

b. 一々言外の意をさとるな!

(4-27) a. これくらい思いつけ!

b. そんな細かいことを一々思いつくな!

これに対し、「ひらめく」は(4-28a)のように肯定の命令文にも、(4-28b)のように否定の命令文にも使われにくい。即ち、「ひらめくように努める」ことも「ひらめかないように努める」こともコントロールしにくい。このように、「ひらめく」などの場合は自己制御性が相対的に低い。

(4-28) a. \*アイデアがひらめけ!

b. \*アイデアがひらめくな!

また、即時性については、タイプⅢの心理動詞は「思いつく」「ひらめく」「さとる」の3語は即時性が相対的に高いのに対し、「気がつく」の1語は即時性が相対的に低い。例えば、(4-29)のように質問の答えをずっと考えており、パッと思いついた瞬間、思わず「あっ、思いついた」と言うことができるように、「思いつく」は即時性が相対的に高い。(4-30)の「ひらめく」も同様である。

(4-29) (いいアイデアが思い浮かんで、思わず)「あっ、思いついた<sup>28</sup>！」と叫んだ。

(4-30) (いいアイデアが思い浮かんで、思わず)「あっ、ひらめいた！」と叫んだ。

一方、「気がつく」の場合は(4-31)のように、誰かに見られていることに気がついたら、「あっ、気がついた」と言うのは不自然である。

(4-31) (花子に見られていることに気づいて、思わず)「あっ、\*気がついた！」と言った。

このように、タイプⅢの心理動詞はタイプⅠの「考える」「判断する」などと同様に思考を表す点で共通している。しかし、タイプⅠは思考の過程を表すのに対し、タイプⅢは思考の結果を表す点で違いがある。思考の過程は相対的にコントロールしやすいのに対し、思考の結果は相対的にコントロールしにくいいため、即時文に使われやすくなると考えられる。ただし、「気がつく」は例外である。

<sup>28</sup> 本研究では本章の冒頭で述べたように、「わっ／あっ／ああ」などの感動詞をつけて話し手の即時的な感情を表すことができる文を即時文とし、心理動詞がスル形で即時文になるかシタ形で即時文になるかは区別していないが、語彙的アスペクトから見ると、(4-iii) (4-iv) のようにスル形で即時文になるものは「～(し)続ける」の形式で一回の継続的心理を表すのに対し、シタ形で即時文になるものは「～(し)続ける」の形式で一回の継続的心理を表さないという違いがあることから、スル形で即時文になるものは継続動詞であるのに対し、シタ形で即時文になるものは瞬間動詞であるという傾向があることが分かる。

(4-iii) {憧れ／悩み／いらいらし／目が眩み} 続ける。(スル形で即時文になるもの)

(4-iv) # {思いつき／驚き／がっかりし／お腹がすき} 続ける。(シタ形で即時文になるもの)

#### 4.2.4 タイプIV

次に、タイプIVの自己制御性と即時性について見る。タイプIVの心理動詞は表 4-5 に示すように、「恥じる」の1語は [+命令文, -即時文]、「怒りを覚える」「震える」などの5語は [-命令文, -即時文]、「懂れる」「イライラする」などの9語は [+命令文, +即時文]、「ワクワクする」「痛む」などの21語は [-命令文, +即時文]である。このように、自己制御性も即時性も相対的に高いものもあれば、相対的に低いものもある。

表 4-5 タイプIVの自己制御性と即時性

		自己制御性	
		+命令文	-命令文
即時性	-即時文	A) 恥じる(1語)	B) 怒りを覚える、ウキウキする、気になる、震える、火照る(5語)
	+即時文	C) 懂れる、イライラする、緊張する、じれる、照れる、悩む、迷う、むかつく、めげる(9語)	D) 痛む、うづく、ワクワクする、ゾクゾクする、ゾツとする、白ける、癩に障る、ハラハラする、ガクガクする、カサカサする、キリキリする、クラクラする、眩む、ショボショボする、ズキズキする、チカチカする、チクチクする、ドキドキする、ヒリヒリする、ムカムカする、ムズムズする(21語)

自己制御性については、タイプIVの心理動詞は肯定か否定の命令文のどちらか一方しか形成しないものもあるが、肯定の命令文も否定の命令文も形成しないもののほうがより多く存在する。例えば、「イライラする」は(4-32a)のように肯定の命令文に使われないのに対し、(4-32b)のように否定の命令文に使われる。即ち、「イライラするように努める」ことはコントロールしにくいのに対し、「イライラしないように努める」ことはコントロールしやすい。(4-33)の「照れる」と(4-34)の「悩む」も同様である。

(4-32) a. \*そのことでイライラしろ。

b. そんなにイライラするな。

(4-33) a. \*その褒め言葉に照れろ！

b. 照れるな！こっちまで恥ずかしくなる。

(4-34) a. \*進路に悩め！

b. そんな小さなことで悩むな！

一方、「ゾッとする」は(4-35a)のように肯定の命令文にも、(4-35b)のように否定の命令文にも使われにくい。即ち、「ゾッとするように努める」ことも、「ゾッとしないように努める」こともコントロールしにくい。また、(4-36)の「痛む」のように感覚を表すものも同様に自己制御性が相対的に低い。

(4-35) a. \*その話にゾッとしろ！

b. \*そんな話にゾッとするなよ！

(4-36) a. \*腕が痛め！

b. \*腕が痛むな！

ただし、(4-37)の「震える」のように、感覚を表すものも命令形に使われる場合があるが、(4-38)の「来い」と似て、命令よりも話し手の願望を表していると思われる。

(4-37) 「手は震えろ」「顔よ、赤くなれ」「汗はどんどん噴き出せ」……緊張の兆し(セルフトーク A)を感じたら、このようなセルフトーク B へと変化させます。すると、自分を客観的に見るできるようになります。

(『セルフトーク・マネジメントのすすめ』鈴木義幸)

(4-38) 春よ、来い！

このように、タイプIVの心理動詞は主に感情、感覚を表すものであり、感情を表すものの場合、その感情の生起や不生起をコントロールしやすいものもあれば、どちらもコントロールしにくいものもある。一方、感覚を表すもの場合はその感覚の生起も不生起もコントロールしにくい。

即時性については、即時性が相対的に低いものもあるが、相対的に高いものの方が圧倒的に多い。例えば、(4-39)のように翌日のデートでウキウキしたりワクワクし

たりする場合、「ああ、ウキウキする」は許容されにくいのに対し、「ああ、ワクワクする」は自然である。このように、タイプⅣのうち、似たような意味を持つ語も即時性の違いが見られる。また、即時性が相対的に高いものには「ワクワクする」「悩む」などの感情を表すものだけでなく、(4-41)の「ヒリヒリする」や(4-42)の「くらむ」のような感覚を表すものも存在する。

(4-39) (明日のデートをととても楽しみにしていて、思わず)「ああ、{\*ウキウキする／ワクワクする}」と呟いた。

(4-40) (就職するか進学するか分からず、思わず)「ああ、悩むな」と呟いた。

(4-41) (顔が日焼けして、思わず)「ああ、ヒリヒリする」と呟いた。

(4-42) (傷を負った兵士は思わず)「ああ、目がくらむ。歩けない」と呟いた。

このように、タイプⅣの心理動詞は感情や感覚を表し、自己制御性も即時性も相対的に高いものもあれば、相対的に低いものもある。

#### 4.2.5 タイプⅤ

次に、タイプⅤの自己制御性と即時性について見る。タイプⅤの心理動詞は表 4-6 に示すように、「感心する」「感動する」などの6語は[-命令文, -即時文]、「安心する」「焦る」などの6語は[+命令文, +即時文]、「分かる」「弱る」などの24語は[-命令文, +即時文]である。このように、タイプⅤの心理動詞は[+命令文, -即時文]の場合がなく、[-命令文, +即時文]という自己制御性が相対的に低く、即時性が相対的に高いものが最も多い。

表 4-6 タイプVの自己制御性と即時性

		自己制御性	
		+ 命令文	- 命令文
即時性	- 即時文	A) なし	B) 感心する、感動する、幻滅する、退屈する、鼻につく、目につく(6語)
	+ 即時文	C) 焦る、安心する、驚く、ガッカリする、ビックリする、ホッとする(6語)	D) 頭に来る、ウンザリする、分かる、見当がつく、あきあきする、飽きる、呆れる、いやになる、困る、懲りる、痺れる、疲れる、まいる、弱る、(のどが) 渴く、くたびれる、(肩が) 凝る、(お腹が) 空く、(足が) つる、(腹が) 減る、(胃が) もたれる、感じる、見える、聞こえる(24語)

自己制御性については、タイプVの心理動詞はタイプIVと同様に、肯定か否定の命令文のどちらか一方しか形成しないものもあるが、肯定の命令文も否定の命令文も形成しないもののほうが圧倒的に多い。例えば、「焦る」は(4-43a)のように肯定の命令文を形成しにくいのに対し、(4-43b)のように否定の命令文を形成しやすい。即ち、「焦るように努める」ことはコントロールしにくいのに対し、「焦らないように努める」ことはコントロールしやすい。(4-44)の「ビックリする」も同様である。

- (4-43) a. <sup>?</sup>仕事の結果を出すことに焦れ<sup>29</sup>！  
 b. 仕事の結果を出すことに焦るな！
- (4-44) a. <sup>?</sup>聞いてビックリしろ<sup>30</sup>！  
 b. 聞いてビックリするなよ！

一方、「退屈する」は(4-45)のように肯定の命令文にも否定の命令文にもならないように、「退屈するように努める」ことも、「退屈しないように努めること」もコントロールしにくい。(4-46)の感覚を表す語の「(お腹が) 空く」や(4-47)の知覚を表す語の「見える」も同様である。

<sup>29</sup> 「焦る」は五段活用動詞であるため、命令形は「焦れ」となるのが原則である。しかし、実際には「焦ろ」と言う人もいる。また、「(大変なときに呑気に構えている友人に対して) もっと焦れよ！」のような願望を表す場面では許容度が上がる。

<sup>30</sup> (驚くべきニュースを語った際に、聞き手があまり驚かなければ)「もっとビックリしろよ！」のような願望を表す場面では許容度が上がる。

- (4-45) a. <sup>?</sup>授業に退屈しろ！  
 b. <sup>?</sup>授業に退屈するなよ！
- (4-46) a. \*お腹が空け！  
 b. \*お腹が空くな！
- (4-47) a. \*富士山が見えろ！  
 b. \*富士山が見えるな！

このように、タイプVの心理動詞は感情、感覚、知覚を表し、感情を表すものの場合、その感情の生起または不生起をコントロールしやすいものもあれば、どちらもコントロールしにくいものもある。また、感覚や知覚を表すものの場合、その感覚や知覚の生起も不生起もコントロールしにくい。

即時性については、タイプIVと同様に即時性が相対的に低いものもあるが、相対的に高いものの方が圧倒的に多い。例えば、(4-48) のようにつまらない授業を受けたら「ああ、退屈した」ではなく、形容詞述語文の「ああ、退屈だ」または「ああ、つまらない」のように即時的に感嘆するのが一般的である。

- (4-48) (つまらない授業を受けて、思わず)「ああ、{\*退屈した／退屈だ}」と呟いた。

これに対し、(4-49) のようになくしたと思った財布が実は台所のテーブルにあることに気づいた時、動詞述語文の「ああ、ホッとした」も形容詞述語文の「ああ、よかった」も使える。(4-50) の「疲れた」も同様に即時文に使われる。

- (4-49) (なくしたと思った財布が実は台所のテーブルにあって、思わず)「ああ、{ホッとした／よかった}」と呟いた。
- (4-50) (一日中仕事していて、思わず)「ああ、疲れた」と呟いた。

このように、タイプVの心理動詞は感情、感覚、知覚を表し、自己制御性も即時性も相対的に高いものもあれば、相対的に低いものもある点でタイプIVと共通している。

しかし、[+命令文, -即時文] という自己制御性が相対的に高く、即時性が相対的に低い場合がない点でタイプIVと異なる。

#### 4.2.6 タイプVI

次に、タイプVIの自己制御性と即時性について見る。タイプVIの心理動詞は表 4-7 に示すように、「鼻をつく」と「匂う」の2語は[-命令文, -即時文]であり、「音がする」「香りがする」などの5語は[-命令文, +即時文]である。このようにタイプVIの心理動詞は自己制御性が相対的に低く、即時性が相対的に高い傾向がある。

表 4-7 タイプVIの自己制御性と即時性

		自己制御性	
		+命令文	-命令文
即時性	-即時文	A) なし	B) 匂う、鼻をつく(2語)
	+即時文	C) なし	D) 音がする、声がある、香りがする、プンプンする、ムンムンする(5語)

自己制御性については、タイプVIの心理動詞はすべて肯定の命令文にも否定の命令文にもならない。例えば、(4-51)の「音がする」は「音がしろ」という肯定の命令形にも「音がするな」という否定の命令形にもならず、自己制御的な事態を表さない。(4-52)も同様である。

(4-51) \*いい音が {しろ/するな} !

(4-52) \*いい香りが {しろ/するな} !

このように、タイプVIの心理動詞は主に聴覚や嗅覚などの知覚を表し、外部の刺激により受動的にその知覚が生起するため、コントロールしにくい。

即時性については、タイプVIの心理動詞は「鼻をつく」「匂う」の2語は即時文に使われないのに対し、他の語はすべて即時文に使われる。例えば、(4-53)のように閉



め切った部屋に入った時、思わず「ああ、鼻をつく／匂う」と言うことは難しい。これに対し、(4-54)の「音がする」と(4-55)の「香りがする」は即時文に使われる。

(4-53) (閉め切った部屋に入った時、思わず)「ああ、\* {鼻をつく／匂う}」と呟いた。

(4-54) (高級ピアノの音を聞いて、思わず)「ああ、いい音がする」と呟いた。

(4-55) (香水の匂いを嗅いで、思わず)「ああ、いい香りがする」と呟いた。

このように、タイプVIの心理動詞は意味的に聴覚、嗅覚などの知覚を表すものであり、自己制御性が相対的に低く、即時性が相対的に高い傾向がある。

#### 4.2.7 タイプVII

最後に、タイプVIIの自己制御性と即時性について見る。タイプVIIの心理動詞はすべて[-命令文, +即時文]であり、自己制御性が相対的に低く、即時性が相対的に高い。

表 4-8 タイプVIIの自己制御性と即時性

		自己制御性	
		+命令文	-命令文
即時性	-即時文	A) なし	B) なし
	+即時文	C) なし	D) ガラガラする、スベスベする、ツルツルする、ヌルヌルする、ネバネバする、ベトベトする(6語)

自己制御性については、タイプVIIの心理動詞はすべて命令文にならない。例えば、(4-56)の「ガラガラする」は肯定の命令形にも否定の命令形にもならず、自己制御的な事態を表さない。(4-57)の「スベスベする」も(4-58)の「ネバネバする」も同様である。

(4-56) \*ザラザラ {しる／するな} !

(4-57) \*スベスベ {しる／するな} !

(4-58) \*ネバネバ {しる／するな} !

即時性については、タイプⅦの心理動詞はすべて即時文に使われる点でタイプⅥと異なる。例えば、(4-59)のように父のひげに触ったら、思わず「あっ、ザラザラする」と言うことができることから、「ザラザラする」は即時性が相対的に高いことが分かる。(4-60) (4-61) も同様である。

(4-59) (父のひげに触って、思わず)「あっ<sup>31</sup>、ザラザラする」と言った。

(4-60) (温泉に入って肌に触り、思わず)「ああ、スベスベする」と呟いた。

(4-61) (のりが手について、思わず)「ああ、ネバネバする」と呟いた。

このように、タイプⅦの心理動詞は触覚を表すものであり、自己制御性が相対的に低く、即時性が相対的に高い。

### 4.3 本章のまとめ

以上、前章でテンス・アスペクトと文の意味機能の観点から分類した心理動詞の7つのタイプにおける自己制御性と即時性について見てきた。これを表4-9に示す。

<sup>31</sup> 森山 (1996)、田窪・金水 (1997)、富樫 (2005)、松岡 (2018)、姚 (2021) などで指摘されているように、感動詞「あっ」は〈気づき〉を表すのに対し、「ああ」は「新たな事態との遭遇における急激な反射的反応とは違って、(たとえ何らかの事態との遭遇をそれ以前に経験していたにせよ) 内的な情意の動きとして、一定の時間をもって発せられる」(森山 1996:54) 〈嘆息〉〈ためらい〉〈情報受容〉などを表すという違いがある。(4-61) は「ひげ」に触って「ザラザラする」という刺激的触感が生じるため、反射的反応を表す「あっ」が使われやすい。

表 4-9 本研究における心理動詞の自己制御性と即時性

		自己制御性	
		+命令文	-命令文
即時性	-即時文	タイプ I : 考える、恨む など(28 語)	タイプ I : なし
		タイプ II : 喜ぶ、恐れる など(6 語)	タイプ II : なし
		タイプ III : なし	タイプ III : 気がつく(1 語)
		タイプ IV : 恥じる (1 語)	タイプ IV : 怒りを覚える、震える など(6 語)
		タイプ V : なし	タイプ V : 感動する、幻滅する など(6 語)
		タイプ VI : なし	タイプ VI : 鼻をつく、匂う(2 語)
		タイプ VII : なし	タイプ VII : なし
	+即時文	タイプ I : なし	タイプ I : なし
		タイプ II : なし	タイプ II : なし
		タイプ III : 思いつく、さとる(2 語)	タイプ III : ひらめく(1 語)
		タイプ IV : 憧れる、悩む など(9 語)	タイプ IV : 気になる、白ける など(20 語)
		タイプ V : 焦る、安心する など(6 語)	タイプ V : 困る、見える など(24 語)
		タイプ VI : なし	タイプ VI : 音がする、香りがする など(5 語)
		タイプ VII : なし	タイプ VII : ザラザラする、スベスベする など(6 語)

表 4-9 に示すように、タイプ I ~ VII における自己制御性は順に相対的に低くなるのに対し、即時性は順に相対的に高くなるという傾向が見られる。即ち、タイプ I ~ VII は順に動作性が高いものから状態性が高いものまで分布しており、タイプ I の心理動詞は「食べる」などの外的運動動詞と近く、タイプ VII の心理動詞は「嬉しい」「悲しい」などの〈状態〉を表す形容詞と近い傾向が見られる。

## 第五章 心理動詞の構文的特徴について

### 5.1 はじめに

前章では、心理動詞の自己制御性と即時性について考察した。本章では、心理動詞の構文的特徴について考察し、各タイプの心理動詞と〈動き〉を表す語や、〈状態〉を表す語との関係を見ることによって、心理動詞の内部における各タイプの連続性、及び外部における位置付けを明らかにする。

第三章で述べたように、タイプⅠの心理動詞は対象への働きかけ（心的作用）が相対的に強く、「外的運動動詞」に近いのに対し、タイプⅡ～Ⅶの心理動詞は経験者の心理活動へのコントロールや、対象への働きかけ（心的作用）が相対的に弱く、「外的運動動詞」と離れているという違いがある。これはとり得る格の違いにおいても見られる。

例えば、(5-1) のようにタイプⅠの「憎む」は、(5-2) の「外的運動動詞」の「殴る」と同様にヲ格をとり、「花子」と「太郎」を交替させることにより、直接受身化はできるのに対し、交替使役化はできない。このことから、「憎む」の場合は「外的運動動詞」の「殴る」と同様に、共起するヲ格名詞の「太郎」は主体である「花子」が働きかける〈対象〉であり、「花子」の「憎む」〈原因〉<sup>32</sup>ではないことが考えられる。

- (5-1) a. 花子が<sup>33</sup>太郎を憎んだ。  
 b. 太郎が花子に憎まれた。(直接受身化○)  
 c. \*太郎が花子を憎ませた。(交替使役化×)  
 (cf. 「太郎が花子に次郎を憎ませた。」なら可。)
- (5-2) a. 花子が太郎を殴った。  
 b. 太郎が花子に殴られた。(直接受身化○)

<sup>32</sup> 交替使役化については第二章 2.4.4 節、2.4.5 節参照。

<sup>33</sup> 心理状態や感情を表す文は、一般に主語が「ハ」を伴う方が自然になるが、格助詞をはっきりさせるために多少不自然でも「ガ」を使うこととする。

- c. \*太郎が花子を殴らせた。(交替使役化×)  
 (cf. 「太郎が花子に次郎を殴らせた。」なら可。)

一方、(5-3) のようにタイプVの「まいる」は二格をとり、直接受身化はできないのに対し、交替使役化はできる。第二章の2.4節で論じたように、使役文の使役主は当該事態を引き起こす原因であると考えられる。このことから、(5-3) の「まいる」の場合、「太郎」は花子をまいらせる〈原因〉であることが分かる。

- (5-3) a. 花子が太郎にまいった。  
 b. \*太郎が花子にまいられた。(直接受身化×)  
 c. 太郎が花子をまいらせた。(交替使役化○)

このように、タイプIの「憎む」は経験者の対象への働きかけが相対的に強く、外的運動動詞に近いのに対し、タイプVの「まいる」は経験者の対象への働きかけが相対的に弱く、外的運動動詞から離れていることが分かる。

しかし、タイプII～VIIは経験者の対象への働きかけが相対的に弱く、外的運動動詞から離れていると言っても違いがある。例えば、タイプIIの「喜ぶ」は(5-4)のようにヲ格も二格もとり、直接受身化も交替使役化もできるのに対し、タイプVの「困る」は(5-5)のように二格のみをとり、直接受身化ができず、交替使役化のみができるという違いがある。

- (5-4) a. 花子が母からのメッセージ {を/に} 喜んだ。  
 b. 母からのメッセージが花子に喜ばれた。(直接受身化○)  
 c. 母からのメッセージが花子を喜ばせた。(交替使役化○)  
 (5-5) a. 花子が意味不明なエラーメッセージに困った。  
 b. \*意味不明なエラーメッセージが花子に困られた。(直接受身化×)  
 c. 意味不明なエラーメッセージが花子を困らせた。(交替使役化○)

このことから、「喜ぶ」の場合、「母からのメッセージ」は「花子」が働きかける〈対

象)でもあり、「花子」に働きかける〈原因)でもあるのに対し、「困る」の場合は、「意味不明なエラーメッセージ」は「花子」が働きかける〈対象)よりも、「花子」に働きかける〈原因)であるという違いがあることが分かる。即ち、タイプⅡの「喜ぶ」は経験者の対象への働きかけは相対的に強いのに対し、タイプⅤの「困る」は経験者の対象への働きかけは相対的に弱いという違いがある。

このように、タイプⅡ～Ⅶの心理動詞はタイプⅠと比べ、対象への働きかけ(心的作用)が相対的に弱い、弱さの度合いに違いがある。

そこで、本章では格の観点から心理動詞の働きかけ性を考察し、各タイプの心理動詞と〈動き)を表す語や、〈状態)を表す語との関係を見ることによって、心理動詞の内部における各タイプの連続性、及び外部における位置付けを明らかにする。

## 5.2 心理動詞の対象／原因の格標示に関する考察

本節では123語の心理動詞の対象／原因の格標示について、『現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)』を利用して、どのような格助詞をとるかを見る。コーパスから出現した用例が1つの格助詞(例えば、ヲ格)しかない場合はその格助詞のみをとるとし、2つまたは3つの格助詞(例えば、ヲ格とニ格)をとる場合はそのいずれもととり得る(例えば、ヲ／ニ格両用)とした。調査結果の詳細は、巻末の資料①-1～資料①-7に示す。これをまとめると、表5-1のようになる。

表 5-1 本研究における心理動詞の対象／原因の格標示

資料	心理動詞の格助詞	語数と語例
①-1	ヲ	19 (考える、憎む)
①-2	ヲ／ニ	23 (期待する、感謝する)
①-3	ニ	16 (飽きる、呆れる)
①-4	ヲ／ガ	3 (思いつく、感じる)
①-5	ヲ／ニ／ガ	1 (悩む)
①-6	ニ／ガ	20 (疲れる、ゾットする)
①-7	ガ	41 (聞こえる、痛む)

表 5-1 のように、本研究で対象とした 123 語の心理動詞の格標示は、ヲ格をとるものが 19 語、ヲ／ニ格両用のものが 23 語、ニ格をとるものが 16 語、ヲ／ガ格両用のものが 3 語、ヲ／ニ／ガ格をとるものが 1 語、ニ／ガ格両用のものが 20 語、ガ格をとるものが 41 語であった。

次に、心理動詞の 7 タイプの対象／原因の格標示を表 5-2 に示す。

表 5-2 本研究における心理動詞の対象／原因の格標示

格標示 タイプ	ヲ格	ヲ／ニ格	ニ格	ヲ／ガ格	ヲ／ニ／ガ格	ニ／ガ格	ガ格
I	考える、憎む等 (18 語)	期待する、感謝 する等(10 語)					
II		喜ぶ、恐れる等 (6 語)					
III	さとり(1 語)	気が付く(1 語)		思いつく(1 語)			ひらめく(1 語)
IV		恥じる、迷う等 (4 語)	イライラする、緊 張する等(9 語)		悩む(1 語)	クラクラする、震え る等(7 語)	気になる、痛む等 (15 語)
V		焦る、驚く(2 語)	呆れる、まいる等 (7 語)	感じる、分かる (2 語)		疲れる、痺れる等 (13 語)	見える等(12 語)
VI							音がする等(7 語)
VII							ザラザラする等 (6 語)



以下、タイプⅠ～Ⅶについて、それぞれどのような格標示で表されるかを見ていく。

タイプⅠの心理動詞は、ヲ格をとるものが18語、ヲ／ニ格両用のものが10語である。このように、ニ格はとる場合もとらない場合もあるが、ヲ格は必ずとるという特徴がある。

タイプⅡの心理動詞は、ヲ／ニ格両用のものが6語である。この場合、ヲ格のみのもではなく、すべてヲ／ニ格両用のものである点でタイプⅠとは異なる。

タイプⅢの心理動詞はヲ格をとるものが1語、ヲ／ニ格両用のもの1語、ヲ／ガ格両用のものが1語、ガ格をとるものが1語である。タイプⅢの心理動詞はテンス・アスペクトの観点から見ると、第三章で論じたように、スル形で未来を表し、シタ形で過去と現在を表すという共通点があるが、格標示の観点においてはばらつきが見られる。

タイプⅣの心理動詞はヲ／ニ格両用のものが4語、ニ格をとるものが9語、ヲ／ニ／ガ格をとるものが1語、ニ／ガ格両用のものが7語、ガ格をとるものが15語である。ヲ格のみのもではなく、ニ格をとるものや、ニ／ガ格両用のものがある点、及びガ格をとるものが多い点でタイプⅠ～Ⅲと異なる。

タイプⅤの心理動詞は、ヲ／ニ格両用のものが2語、ニ格をとるものが7語、ヲ／ガ格両用のものが2語、ニ／ガ格両用のものが13語、ガ格をとるものが12語である。ガ格をとるものが多い点でタイプⅠ～Ⅲと異なり、タイプⅣに似ている。

タイプⅥの心理動詞は、ガ格をとるものが7語である。ガ格をとるものしかない点でタイプⅠ～タイプⅤと異なる。

タイプⅦの心理動詞は、ガ格をとるものが6語である。ガ格をとるものしかない点でタイプⅥと共通している。

このように、心理動詞の7つのタイプは対象もしくは原因の格標示に違いがあり、タイプⅠからタイプⅦに向かうにつれて対象もしくは原因の格標示が「ヲ格→ニ格→ガ格」へと移行している。

以上、心理動詞の対象／原因の格標示について見てきた。次節では心理動詞構文における構文的特徴について見ていく。

### 5.3 心理動詞の構文的特徴に関する考察

本節では、心理動詞の構文的特徴について見る。5.2節で述べたように、本研究で対象とした123語の心理動詞の格標示は、ヲ格をとるものが19語、ヲ／ニ格両用のものが23語、ニ格をとるものが16語、ヲ／ガ格両用のものが3語、ヲ／ニ／ガ格をとるものが1語、ニ／ガ格両用のものが20語、ガ格をとるものが41語である。

このうち、まず、ヲ格をとるもの、ニ格をとるもの、ヲ／ニ格両用のものについては、本研究では2.3節で紹介した寺村(1982)、佐藤(1997)や外崎(2013)などを参考にして、直接受身化テストと交替使役化テストを用いて格の意味役割を判断することにより、構文的特徴を考察する。次に、ガ格をとるものは直接受身化テストや交替使役化テストがきかないため、意味や構文などの観点から考察する。最後に、ヲ／ガ格両用のもの、ヲ／ニ／ガ格をとるもの、ニ／ガ格両用のものについては、先の2つの考察を複合させて構文的特徴を考察する。以下、この順に見ていく。

#### 5.3.1 ヲ格をとるもの、ニ格をとるもの、ヲ／ニ格両用のものの場合

まず、ヲ格をとるもの、ニ格をとるもの、ヲ／ニ格両用のものについて見る。本節では、2.3節で紹介した寺村(1982)、佐藤(1997)や外崎(2013)などを参考にして、直接受身化テストと交替使役化テストを用いて格の意味役割を判断することにより、その構文的特徴を考察する。

格の意味役割の判断については、直接受身化ができる場合は〈対象〉とし、交替使役化ができる場合は〈原因〉とし、いずれもできる場合は〈対象+原因〉とする。例えば、(5-6)のようにヲ格をとる「憎む」は直接受身化ができ、交替使役化ができないため、そのヲ格が〈対象〉を表すと判断する。(5-7)のヲ／ニ格両用の「感謝する」も同様である。

- (5-6) a. 花子が太郎を憎んだ。  
 b. 太郎が花子に憎まれた。(直接受身化○)  
 c. \*太郎が花子を憎ませた。(交替使役化×)  
 (cf. 「太郎が花子に次郎を憎ませた。」なら可。)

→ ヲ格：対象

- (5-7) a. 花子が太郎の来場 {を/に} 感謝した。  
 b. 太郎の来場が花子に感謝された。(直接受身化○)  
 c. \*太郎の来場が花子に感謝させた。(交替使役化×)

→ ヲ/ニ格：対象

これに対し、(5-8) のようにニ格をとる「緊張する」は直接受身化ができず、交替使役化のみができるため、ニ格は〈原因〉を表すと判断する。(5-9) のヲ/ニ格両用の「焦る」も同様である。

- (5-8) a. 花子が面接官の質問に緊張した。  
 b. \*面接官の質問が花子に緊張された。(直接受身化×)  
 c. 面接官の質問が花子を緊張させた。(交替使役化○)

→ ニ格：原因

- (5-9) a. 花子が結婚 {を/に} 焦った。  
 b. \*結婚が花子に焦られた。(直接受身化×)  
 c. 結婚が花子を焦らせた。(交替使役化○)

→ ヲ/ニ格：原因

また、(5-10) のようにニ格をとる「呆れる」は直接受身化も交替使役化もできるため、そのニ格は「対象+原因」を表すとする。(5-11) のヲ/ニ格をとる「悲しむ」も同様である。

- (5-10) a. 花子が太郎に呆れた。  
 b. 太郎が花子に呆られた。(直接受身化○)  
 c. 太郎が花子を呆れさせた。(交替使役化○)

→ ニ格：対象+原因

- (5-11) a. 花子が太郎の死 {を/に} 悲しんだ。  
 b. 太郎の死が花子に悲しまれた。(直接受身化○)

c. 太郎の死が花子を悲しませた。(交替使役化○)

→ ヲ／ニ格：対象＋原因

このように意味役割を判断した結果を表 5-3 に示す。詳しい語彙リストは巻末の資料②に示す。

表 5-3 ヲ格をとるもの、ニ格をとるもの、ヲ／ニ格両用のものの格とその意味役割

格助詞	意味役割	語数と語例
ヲ	対象	19 (考える、憎む)
ヲ／ニ <sup>34</sup>		6 (気が付く、感謝する)
ヲ／ニ	対象＋原因	11 (喜ぶ、恐れる)
ニ		2 (飽き飽きする、呆れる)
ヲ／ニ	原因	6 (照れる、苦しむ)
ニ		14 (困る、緊張する)

次節から、この意味役割の判断結果に基づいて、「ヲ格 (／ニ格) 対象型」<sup>35</sup>、「(ヲ／)ニ格 原因型」<sup>36</sup>、「(ヲ／)ニ格 対象＋原因型」<sup>37</sup>の順に構文的特徴を考察する。本研究では、構文的特徴のイメージ図として、次の記号を用いる。

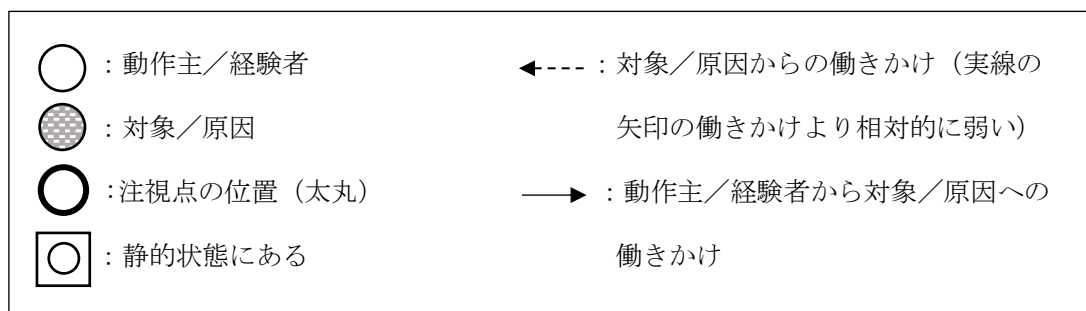


図 5-1 構文的特徴のイメージ図の記号

<sup>34</sup> 〈対象〉を表すヲ／ニ格をとる心理動詞のうち、「祈る」と「願う」は「花子が神に成功を祈った」のように、ヲ格とニ格を同時にとる場合があるが、「\*神が花子に祈られた」も「\*神が花子を祈らせた」も成り立たないことから、ニ格の「神」は〈対象〉でも〈原因〉でもなく、「祈る」という心理動作の〈着点〉であると考えられる。即ち、ニ格の「神」は「花子」からも働きかけられていなければ、「花子」にも働きかけていない。そのため、本研究では「祈る」と「願う」はヲ／ニ格ではなくヲ格をとるものとして扱うことにする。これに対し、「感謝する」「期待する」「望む」も「花子が水の神に収穫を感謝した」のように、ヲ格とニ格を同時にとる場合があるが、ニ格名詞句は直接受身化または交替使役化ができるため、心理動詞の〈対象〉または〈原因〉であり、働きかけ性と関わる。そこで、「感謝する」「期待する」「望む」はヲ／ニ格をとるものとして扱うことにする。

<sup>35</sup> これは「ヲ格 対象型」と「ヲ／ニ格 対象型」を合わせたものである。

<sup>36</sup> これは「ヲ／ニ格 対象＋原因型」と「ニ格 対象＋原因型」を合わせたものである。

<sup>37</sup> これは「ヲ／ニ格 原因型」と「ニ格 原因型」を合わせたものである。



(5-13) の場合、太郎が花子を罵るなどして、花子に直接憎しみを抱かせる場合もあれば、太郎が直接花子に何かをするわけではないが、太郎が他の女の子を好きになって、花子が勝手に太郎に憎しみを抱くようになる場合もある。さらに、太郎は特に何も花子に憎まれるようなことをしていないが、花子が勝手に太郎が何かをしたと思いついて憎しみを抱く場合もある。

一方、経験者から対象へ働きかける場合を「働きかけ」と呼ぶことにする。この場合、太郎は花子が自分を憎んでいることを知って、落ち込むような場合もあれば、太郎は花子が自分を憎んでいることを知らないまま憎しみを抱かれている場合もある。後者の場合も太郎は花子から目に見えない働きかけを受けていると考えられる。

- (5-13) a. 花子が太郎を憎んだ。  
 b. 太郎が花子に憎まれた。(直接受身化○ → 対象○)  
 c. \*太郎が花子に憎ませた。(交替使役化× → 原因×)

(5-13) の「憎む」は直接受身化ができるのに対し、交替使役化はできないため、ヲ格は〈原因〉ではなく〈対象〉を表すと考えられる。このことから、経験者の「花子」から対象の「太郎」への働きかけは、「太郎」から「花子」への刺激より相対的に強いと考えられる。そこで、経験者の「花子」から対象の「太郎」への働きかけは実線で表し、対象の「太郎」から経験者の「花子」への刺激は破線で表すことにする。また、経験者はガ格で表示され、注視点に立つため、太線の丸で表すことにする<sup>39</sup>。

<sup>39</sup> 「花子が水の神に収穫のことを感謝した」のように〈対象〉を表すヲ格とニ格が同時に出現する場合、「花子は太郎にプレゼントを贈った」と同様に二重目的語をとる。これを図 5-i に示す。

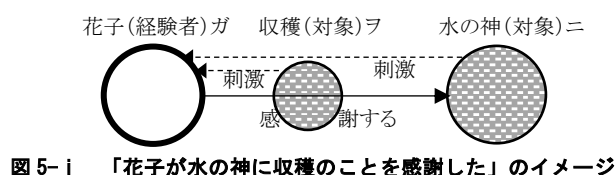


図 5-i 「花子が水の神に収穫のことを感謝した」のイメージ

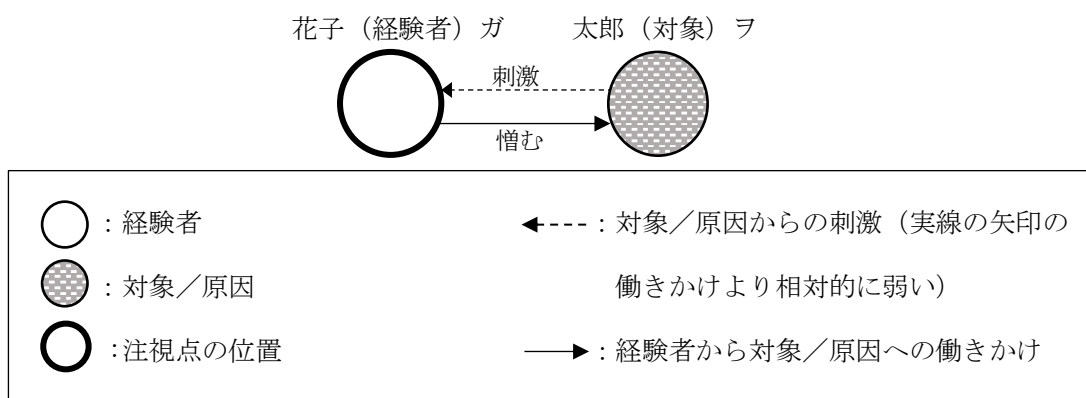


図 5-3 「花子が太郎を憎んだ」におけるヲ格のイメージ

### 5.3.1.2 「(ヲ/)ニ格 原因型」

次に、「(ヲ/)ニ格 原因型」の構文的特徴について見る。本研究では、「(ヲ/)ニ格 原因型」の構文的特徴も先の「ヲ(ノ)ニ格 対象型」と同様に、大槻 (2014) を参考にする。

例えば、(5-14) の「緊張する」のニ格が〈原因〉を表すように、経験者の「花子」は「面接官の質問」から刺激を受けることにより、心的状態の変化が引き起こされる。このように、「面接官の質問」から経験者の「花子」への刺激は相対的に強いのに対し、経験者の「花子」から「面接官の質問」への働きかけは意識が向かうだけであるため相対的に弱いと考えられる<sup>40</sup>。そこで、原因の「面接官の質問」から経験者の「花子」への刺激は実線で表し、経験者の「花子」から原因の「面接官の質問」への働きかけは破線で表すことにする。また、経験者は注視点に立つため、太線の丸で表すことにする。

(5-14) a. 花子が面接官の質問に緊張した。

b. \*面接官の質問が花子に緊張された。(直接受身化× → 対象×)

c. 面接官の質問が花子を緊張させた。(交替使役化○ → 原因○)

<sup>40</sup> 第四章で述べたように、「(花子に対して) \*緊張しろ」とは言えないため、働きかけ性が弱いということも考えられる。

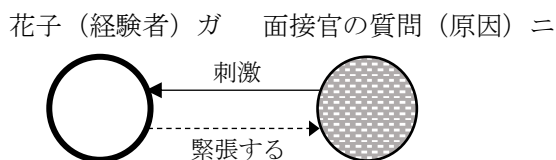


図 5-4 「花子が面接官の質問に緊張した」における二格のイメージ

### 5.3.1.3 「(ヲ／) 二格 対象+原因型」

次に、「(ヲ／) 二格 対象+原因型」の構文的特徴について見る。「(ヲ／) 二格 対象+原因型」は、〈対象〉の側面も〈原因〉の側面もある<sup>41</sup>。

例えば、(5-15) のように、「喜ぶ」が直接受身化も交替使役化もできる。この場合、「息子の合格を喜ぶ」のようにヲ格をとると、「息子の合格」は「喜び」の〈対象〉として捉えられる。一方、「息子の合格に喜ぶ」のようにニ格をとると、「息子の合格」は「息子の合格の知らせ」という意味で解釈され、「喜び」の感情を引き起こす〈原因〉として捉えられる。

- (5-15) a. 花子が息子の合格 {を／に} 喜んだ。  
 b. 息子の合格が花子に喜ばれた。(直接受身化○ → 対象○)  
 c. 息子の合格が花子を喜ばせた。(交替使役化○ → 原因○)

このうち、〈対象〉を表す場合は、図 5-5 のように経験者の「花子」から対象の「息子の合格」への働きかけは相対的に強い<sup>42</sup>のに対し、対象の「息子の合格」から経験者の「花子」への刺激は相対的に弱いと考えられる。

<sup>41</sup> 「驚く」と「ガッカリする」は三原(2000)などでは直接受身化ができないとされているが、北村(2008)や智(2015)が指摘している通り、次の(5-i) (5-ii) のように〈対象／原因〉が「私」のような有情物の場合、「驚く」と「ガッカリする」は直接受身化ができる(〈対象／原因〉が非情物の場合は直接受身化が難しいが)。そのため、本研究では「驚く」と「ガッカリする」を「(ヲ／) 二格対象／原因型」とする。

- (5-i) a. 若い人が私に驚いた。  
 b. 私は若い人に驚かれた。  
 (5-ii) a. 妻が私にがっかりした。  
 b. 私は妻にがっかりされた。

(北村 2008 : 126)

<sup>42</sup> 第四章で述べたように、「(花子に対して) 息子の合格を喜べ」は成立するため、働きかけ性が相対的に強いということも考えられる。



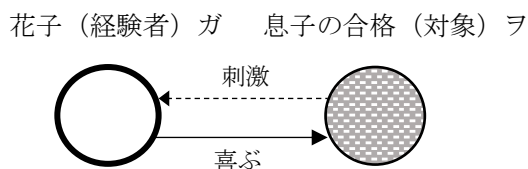


図 5-5 「花子が息子の合格を喜んだ」のヲ格が〈対象〉を表す場合

これに対し、〈原因〉を表す場合は、経験者の「花子」は「息子の合格」から刺激を受けることにより、心的状態の変化が引き起こされるため、図 5-6 のように「息子の合格」から経験者の「花子」への刺激は相対的に強いのに対し、経験者の「花子」から「息子の合格」への働きかけは意識が向かうだけであるため相対的に弱い<sup>43</sup>。

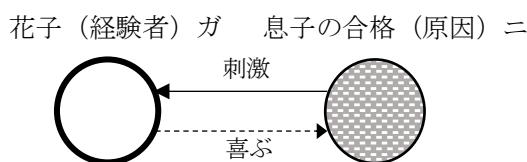


図 5-6 「花子が息子の合格に喜んだ」のニ格が〈原因〉を表す場合

このように、「(ヲ/) 二格 対象+原因型」は、経験者から対象/原因への働きかけと、対象/原因から経験者への刺激との相対的強弱に揺れがあり、「ヲ (/ニ) 格 対象型」に近い側面もあれば、「(ヲ/) 二格 原因型」に近い側面もある。このことから、「(ヲ/) 二格 対象+原因型」は「ヲ (/ニ) 格 対象型」と「(ヲ/) 二格 原因型」との中間的位置にあると考えられる。

以上、ヲ格をとるもの、ニ格をとるもの、ヲ/ニ格両用のものの構文的特徴について見てきた。これらの心理動詞の構文的特徴は、「ヲ (/ニ) 格 対象型」、「(ヲ/) 二格 対象+原因型」、「(ヲ/) 二格 原因型」の順に経験者から対象/原因への働きかけが弱まり、対象/原因から経験者への刺激が強まることが分かる。また、「ヲ (/ニ) 格 対象型」の心理動詞は動作主から対象への働きかけの方が強いという点で、外的運動動詞に接近していると思われる。そのため、「ヲ (/ニ) 格 対象型」、「(ヲ/) 二格 対象+原因型」、「(ヲ/) 二格 原因型」の順に外的運動動詞から離れていくと考えられる。

<sup>43</sup> 「(花子に対して) 息子の合格に喜べ」とは言いにくいいため、働きかけ性が相対的に弱いということも考えられる。以下同様。

### 5.3.2 ガ格をとるものの場合

次に、本節では、ガ格をとるものについて見る。5.3節の冒頭で述べたように、ガ格をとるものの場合、直接受身化テストと交替使役化テストがきかないため、意味や構文などの観点から考察する。

先に述べておくが、本節では、ガ格をとるものの構文的特徴を「痛む」類「ガ格 対象型<sup>44</sup>」、「見える」類「ガ格 対象型」、「匂う」類「ガ格 対象型」、「スベスベする」類「ガ格 対象型」の4つに分ける。詳しくは巻末の資料③に示す。以下、順に見ていく。

#### 5.3.2.1 「痛む」類「ガ格 対象型」

まず、「痛む」類「ガ格 対象型」について見る。「痛む」や「(お腹が) 空く」などの身体部位の「ガ格 対象型」の場合、身体部位は対象となり、視点ともなっているのに対し、経験者は主題の「ハ」で提示され、背景化されている。この点で、先のヲ格やニ格をとる心理動詞と異なる。

例えば、(5-16) では対象の「胃」はガ格で表示され、視点となっているのに対し、

<sup>44</sup> 本研究では山岡 (2000) に従い、「痛む」、「見える」、「匂う」、「スベスベする」などの心理動詞のガ格の意味役割を〈対象〉とする。山岡 (2000:30) では Fillmore (1968) が提唱した格文法 (case grammar) を参考にして、次の表 5-i のように日本語の格の意味役割を規定している。

表 5-i 山岡 (2000:30) における日本語の意味役割と対応する格標示

格の意味役割の名称			対応する日本語の格標示								
日本語訳	原語	略称	ニ	ガ	ヲ	デ	カラ	ト	ヘ	ニヨッテ	他
動作主	Agent	Ag	○	○		○				○	ヲシテ
対象	Object	Ob		○	○			○			
相手	Patient	P	○				○	○			
起点	Source	S	○	○			○				
目標	Goal	G	○						○		マデ
経験者	Experiencer	Ex	○	○							ニトッテ
道具	Instrumental	Ins				○				○	ヲモッテ
原因	Cause	Ca	○	○		○				○	ノセイデ
場所	Local	L	○		○	○					ニオイテ
基準	Criteria	Cr	○		○						ニシテ、ヨリ
受益者	Beneficiary	Bf	○	○							ノタメニ

この上の表 5-i で、山岡 (2000:196-204) では「聞こえる」「痛む」、「匂う」、「スベスベする」などの心理動詞は以下の (5-iii) のような構文を形成すると指摘している。即ち、これらの心理動詞のガ格が「対象 (ob)」を表すということになる。

(5-iii) 私 には ガサガサという音が 聞こえる。(山岡 2000:196)  
 (+ [一人称] <sup>Ex</sup>ニ/ハ) + [Ob] ガ + V-ru/V-ta

経験者の「花子」は主題の「ハ」で表示され、背景化されている。そのため、図 5-7 では「お腹」は太い実線の丸で表し、「花子」は細い実線の丸で表す。また、「胃」から「花子」への刺激的影響によって花子の状態変化が引き起こされるため、「胃」から「花子」への刺激は相対的に強いのに対し、「花子」から「胃」への刺激は痛みを感じるという意識が向かうだけであるため相対的に弱い。そこで、「胃」から「花子」への刺激は実線の矢印で表し、「花子」から「胃」への働きかけは破線の矢印で表す。

(5-16) 花子は胃が痛んだ。

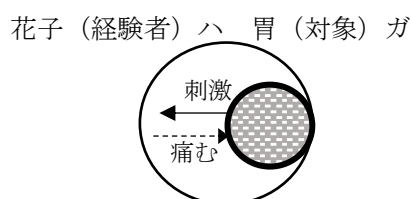


図 5-7 「花子は胃が痛んだ」におけるガ格のイメージ

このように、「痛む」類の「ガ格 対象型」の場合、対象が注視点になっている点で、5.3.1 節のヲ格やニ格をとる心理動詞と異なる。また、対象から経験者への刺激は相対的に強いのに対し、経験者から対象への働きかけは相対的に弱い点で「(ヲ/ニ格 原因型)」と共通しており、外的運動動詞から離れている。

### 5.3.2.2 「見える」類「ガ格 対象型」

次に、「見える」類「ガ格 対象型」について見る。この型には思考認識を表す「ひらめく」「見当がつく」、感情を表す「いやになる」「癪に障る」、知覚を表す「見える」「聞こえる」などがある。

この場合、「見える」を例にとると、例えば、(5-17) のように対象の「富士山」はガ格で表示され注視点となっている点で、5.3.1 節のヲ格やニ格をとる心理動詞と異なる。(5-18) ～ (5-20) も同様である。

(5-17) 私には富士山が見えた。

(5-18) 私にはピアノの音が聞こえた。

(5-19) 私にはいいアイデアがひらめいた。

(5-20) 私は仕事がいやになった。

また、久保田（2016）が「見る」と「見える」を比較しながら指摘している通り、「見る」は（5-21）のように経験者が自分の意志をより顕在化させるように表示しており、経験者から対象へ視覚的作用が向かうというのが主な方向性であるのに対し、「見える」は（5-22）のように経験者が自らの意志の存在を希薄化させ受け手のように表示しており、対象から経験者へ視覚的刺激が向かうというのが主な方向性である。

(5-21) 山のでっぺんから僕らの学校をみた。

(5-22) 山のでっぺんから僕らの学校がみえた。

（久保田 2016 : 80）

このように、「見える」類「ガ格 対象型」の場合、対象から経験者への刺激は相対的に強いのに対し、経験者から対象への働きかけは相対的に弱い。そのため、本研究では図 5-8 のように実線の矢印で対象から経験者への刺激を表すのに対し、破線の矢印で経験者から対象への働きかけを表すことにする。

例えば、（5-23）では対象の「富士山」はガ格で表示されるため、図 5-8 のように注視点となっている。また、対象の「富士山」から経験者の「花子」への刺激は相対的に強いのに対し、経験者の「花子」から対象の「富士山」への働きかけは相対的に弱い。そのため、実線の矢印で対象の「富士山」から経験者の「花子」への刺激を表し、破線の矢印で経験者の「花子」から対象の「富士山」への働きかけを表す。

(5-23) 花子には富士山が見えた。

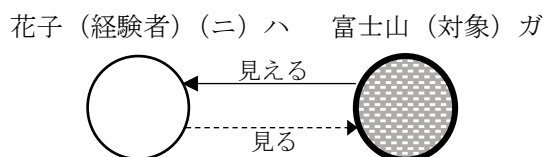


図 5-8 「花子には富士山が見えた」におけるガ格のイメージ

このように、「見える」類「ガ格 対象型」は対象が注視点に立つ点で「痛む」類の「ガ格 対象型」と共通している。しかし、「痛む」類の「ガ格 対象型」は対象が経験者の身体部位、即ち経験者の一部であるのに対し、「見える」類「ガ格 対象型」は対象が経験者の外部の独立したものであるという違いがある。

### 5.3.2.3 「匂う」類「ガ格 対象型」

次に、「匂う」類「ガ格 対象型」について見る。この型には嗅覚、聴覚、味覚を表す「匂う」「音がする」「味がする」などがある。

この型の場合は(5-24) (5-25)のように、経験者は文に出現せず、潜在的に存在するため、5.4.6節の「見える」類「ガ格 対象型」と比べ、さらに背景化されている。このように、経験者が自らの意志の存在をさらに希薄化させ受け手のように表しており、対象から経験者へ知覚的刺激が向かうというのが主な方向性である。

(5-24) { \*私には / φ } 排水溝が匂った。

(5-25) { \*私には / φ } この鈴がいい音がした。

例えば、(5-26)では対象の「排水溝」はガ格で提示されるのに対し、経験者の「私」は文に出現せず、潜在的に存在している。そのため、図5-9では破線の丸で経験者の「私」を表し、太線の丸で注視点に立つ対象の「排水溝」を表す。また、経験者の「私」が自らの「嗅ぐ」という意志を希薄化させ、受け手のように対象の「排水溝」からの刺激を受容することを表し、対象の「排水溝」から経験者の「私」へ嗅覚的刺激が向かうというのが主な方向性である。そのため、対象の「排水溝」から経験者の「私」への刺激を実線の矢印で描くことでそれが相対的に強いことを表し、経験者の「私」から対象の「排水溝」への働きかけを破線の矢印で描くことでそれが相対的に弱いことを表す。

(5-26) 排水溝が匂った。

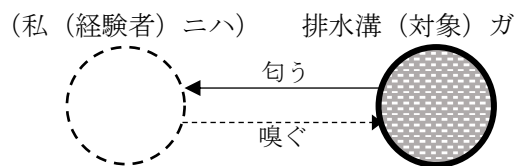


図 5-9 「排水溝が匂った」におけるガ格のイメージ

このように、「匂う」類「ガ格 対象型」は対象が注視点に立つ点と、対象から経験者への刺激が相対的に強い点で、5.4.6 節の「見える」類「ガ格 対象型」と共通している。しかし、経験者は文に出現せず、潜在的に存在する点で「見える」類「ガ格 対象型」と異なっている。

#### 5.3.2.4 「スベスベする」類「ガ格 対象型」

次に、「スベスベする」類「ガ格 対象型」について見る。この型には触覚を表す「スベスベする」「ネバネバする」などがある。

この型の場合は (5-27) (5-28) のように、先の「匂う」類「ガ格 対象型」と同様に経験者は文に出現せず、潜在している。

(5-27) { \*私には / φ } その生地がスベスベする。

(5-28) { \*私には / φ } その樹液がネバネバする。

ただし、先の「匂う」類「ガ格 対象型」の場合は (5-29) のように対象がカラ格で表示され、動詞がダイクシスを表す「～てくる」と共起できるのに対し、「スベスベする」類「ガ格 対象型」の場合は (5-30) のように対象がカラ格で表示され、動詞がダイクシスを表す「～てくる」と共起できないという違いがある。

(5-29) a. 排水溝から匂ってきた。

b. この鈴からいい音がしてきた。

(5-30) a. \*その生地からスベスベしてきた。

b. \*その樹液からネバネバしてきた。

このことから、「匂う」類「ガ格 対象型」の場合、経験者は文に直接出現しないが、刺激発散の方向から捉えられるのに対し、「スベスベする」類「ガ格 対象型」の場合、経験者は文に直接出現しないだけでなく、捉えることもあまりできないことが分かる。このように、「匂う」類「ガ格 対象型」に比べ、「スベスベする」類「ガ格 対象型」の場合は経験者がさらに背景化されていることが考えられる。

例えば、(5-31) では対象の「その生地」はガ格で提示されるのに対し、経験者の「私」は文に出現せず、潜在的に存在している。そのため、図 5-10 では太線の丸で対象を表し、点線の丸で経験者を表す。また、経験者の「私」が自らの「触る」という意志を希薄化させ、受け手のように対象の「その生地」からの刺激を受容することを表し、対象の「その生地」から経験者の「私」へ知覚的刺激が向かうというのが主な方向性である。そのため、対象から経験者への刺激を実線の矢印で表し、経験者から対象への働きかけを破線の矢印で表す。

(5-31) その生地がスベスベする。

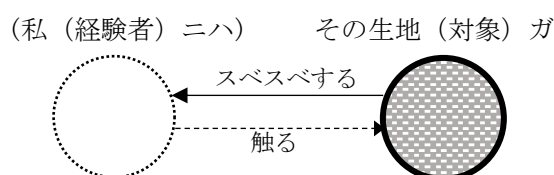


図 5-10 「その生地がスベスベする」におけるガ格のイメージ

また、この場合のガ格は〈状態〉を表す静態動詞や形容詞に接近していることも指摘したい。例えば、(5-32) では「富士山」はガ格で提示されており、注視点に立ち、〈状態〉の主体となっているのに対し、経験者は文の中で含意されていない。そのため、経験者は消失してしまい、経験者と対象との間の働きかけも同時に消失する。形容詞述語文の (5-33) も同様である。

(5-32) 富士山が聳えている。

(5-33) 富士山が高い。

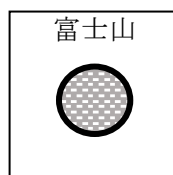


図 5-11 「富士山が聳えている／高い」におけるガ格のイメージ

このように、〈状態〉を表す動詞や形容詞の場合は〈状態〉の主体しか存在しないのに対し、「スベスベする」類「ガ格 対象型」の場合は経験者も知覚対象も存在し、経験者と知覚対象との間に働きかけがあるという違いがある。しかし、「スベスベする」類「ガ格 対象型」は経験者が背景化されている点で、〈状態〉を表す動詞や形容詞に接近していると思われる。

以上、ガ格をとる心理動詞の構文的特徴について見てきた。視点の位置や、経験者と対象の間の働きかけの強弱から見ると、「痛む」類「ガ格 対象型」、「見える」類「ガ格 対象型」、「匂う」類「ガ格 対象型」、「スベスベする」類「ガ格 対象型」の順に〈状態〉を表す動詞や形容詞に接近していくと考えられる。

### 5.3.3 ヲ／ガ格両用のもの、ヲ／ニ／ガ格をとるもの、ニ／ガ格両用のものの場合

次に、本節では、ヲ／ガ格両用のもの、ヲ／ニ／ガ格をいずれもとり得るもの、ニ／ガ格両用のものについて見る。これらの心理動詞はヲ格やニ格もとり得るし、ガ格もとり得る。ヲ格やニ格をとる場合は5.3.1節と同様に、直接受身化テストと交替使役化テストを用いて格の意味役割を判断することにより、構文的特徴を考察する。また、ガ格をとる場合は5.3.2節と同様に、意味や構文などから考察する。

本節では、ヲ／ガ格両用のもの、ヲ／ニ／ガ格をいずれもとり得るもの、ニ／ガ格両用のものの構文的特徴を、「ヲ／ガ格 対象型」、「飽きる」類「ニ／ガ格 対象+原因型」、「震える」類「ニ／ガ格 原因+対象型」、「疲れる」類「ニ／ガ格 原因+対象型」、「困る」類「(ヲ／) ニ／ガ格 原因+対象型」の5つに分ける。詳しくは巻末の資料④に示す。以下、順に見ていく。

#### 5.3.3.1 「ヲ／ガ格 対象型」

まず、「ヲ／ガ格 対象型」の構文的特徴について見る。5.3節の冒頭で述べたよう



に、ヲ／ガ格両用のものには「思いつく」「感じる」「分かる」<sup>45</sup>の3語がある。

この型がヲ格をとる場合は5.3.1.1節の「ヲ（／ニ）格 対象型」と同様である。例えば、(5-34)の「思いつく」は直接受身化ができるのに対し、交替使役化はできないため、ヲ格は〈原因〉ではなく〈対象〉を表すと考えられる。このことから、経験者の「花子」から対象の「いいアイデア」への働きかけは、「いいアイデア」から「花子」への刺激より相対的に強いと考えられる。そこで、図5-12では経験者の「花子」から対象の「いいアイデア」への働きかけは実線で表し、対象の「いいアイデア」から経験者の「花子」への刺激は破線で表すことにする。また、経験者はガ格で表示され、注視点に立つため、太線の丸で表すことにする。

- (5-34) a. 花子が（やっと）いいアイデアを思いついた。  
 b. いいアイデアが花子に（よって）思いつかれた。  
 (直接受身化○ → 対象○)  
 c. \*いいアイデアが花子 {を／に} 思いつかせた。  
 (交替使役化× → 原因×)

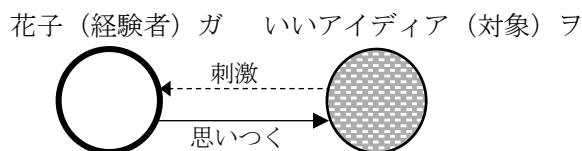


図5-12 「花子がいいアイデアを思いついた」におけるヲ格のイメージ

これに対し、「思いつく」がガ格をとる場合は、5.3.2.2節の「見える」類「ガ格 対象型」と同様である。例えば、(5-35)では対象の「いいアイデア」はガ格で表示さ

<sup>45</sup> 「分かる」の格助詞について、山西・駒走（2004）が指摘している通り、ガ格をとるのが一般的であるが、ヲ格をとる用例も見られており、単なる誤用や俗用とは言えない。また、山西・駒走（2004）は以下のような例を挙げ、(5-iv)のようにガ格をとる場合は「自然発生的に明らかになってくる」(p. 55)ことを表すのに対し、(5-v)のようにヲ格をとる場合は「意識的に把握する」ことを表し、「理解する」とほぼ同じ意味であると述べている。

(5-iv) わたしは言葉が分からない 迷子になったらなんとしよう

(野口雨情「青い目の人形」1921『日本童謡集』岩波文庫)

(5-v) 「米国の科学者と話すと、「政治家と法律家が技術のことをわかってくれない」という話題になる。(後略)」(村井純慶大教授の発言 2003・5・9 15面)

(山西・駒走2004: 57-58)

れ注視点となっている。また、経験者の「花子」が自らの「考える」という意志を希薄化させ受け手のように対象の「いいアイデア」からの刺激を受容することを表し、「いいアイデア」から経験者の「花子」へ思考認識的刺激が向かうというのが主な方向性である。

(5-35) 花子には (ふと) いいアイデアが思いついた。

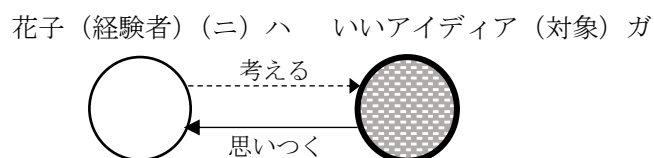


図 5-13 「花子にはいいアイデアが思いついた」におけるガ格のイメージ

このように、「ヲ／ガ格 対象型」は、「ヲ (／ニ) 格 対象型」に近い側面もあれば、「見える」類「ガ格 対象型」に近い側面もある。このことから、「ヲ／ガ格 対象型」は「ヲ (／ニ) 格 対象型」と「見える」類「ガ格 対象型」との中間的位置にあると考えられる。

### 5.3.3.2 「飽きる」類「ニ／ガ格 対象＋原因型」

次に、「飽きる」類「ニ／ガ格 対象＋原因型」の構文的特徴について見る。この型は「飽きる」「感心する」「ウンザリする」「ビックリする」の4語ある<sup>46</sup>。

まず、「飽きる」類「ニ／ガ格 対象＋原因型」が二格をとる場合は、〈対象〉も〈原因〉も表す。例えば、(5-36)のように、「飽きる」は直接受身化も交替使役化もできる。この場合、「太郎」は「太郎という人」と解釈されると、「飽き」の〈対象〉として捉えられやすい。これに対し、「太郎」は「太郎のやったこと」や「太郎の性格」などのように解釈されると、「飽き」の〈原因〉として捉えられやすい。

<sup>46</sup> 先の5.3.1.3節の「驚く」「ガッカリする」と似ているように、この型における「ビックリする」と「ウンザリする」も(5-vi) (5-vii)のように直接受身化ができる場合があるため、二格が〈対象〉を表す場合があると思われる。

(5-vi) a. 父母たちが私にびっくりした。(北村 2008 : 126)

b. 私は父母にびっくりされた。(北村 2008 : 126)

(5-vii) a. 花子が太郎にウンザリした。

b. 太郎は花子にウンザリされた。

- (5-36) a. 花子が太郎に飽きた。  
 b. 太郎が花子に飽きられた。(直接受身化○ → 対象○)  
 c. 太郎が花子を飽きさせた。(交替使役化○ → 原因○)

このうち、二格が〈対象〉と捉えられる場合は、図 5-14 のように経験者の「花子」から対象の「太郎」への働きかけは相対的に強いのに対し、対象の「太郎」から経験者の「花子」への刺激は相対的に弱いと考えられる。

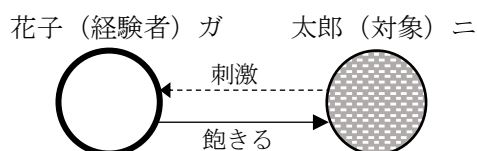


図 5-14 「花子が太郎に飽きた」の二格が〈対象〉を表す場合

これに対し、〈原因〉と捉えられる場合は、経験者の「花子」は原因の「太郎」から刺激を受けることにより、心的状態の変化が引き起こされるため、図 5-15 のように経験者の「花子」から原因の「太郎」への働きかけは相対的に弱いのに対し、原因の「太郎」から経験者の「花子」への刺激は相対的に強い。

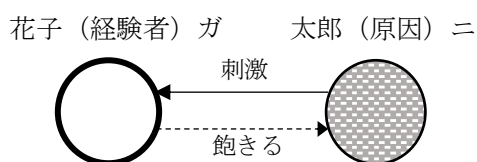


図 5-15 「花子が太郎に飽きた」の二格が〈原因〉を表す場合

このように、「飽きる」類「ニ／ガ格 対象＋原因型」の二格が図 5-14 のように〈対象〉を表す場合は、経験者から対象への働きかけは相対的に強く、対象から経験者への刺激は相対的に弱い。これに対し、図 5-15 のように〈原因〉を表す場合は、経験者から原因への働きかけは相対的に弱く、原因から経験者への刺激は相対的に強い。

また、「飽きる」類「ニ／ガ格 対象＋原因型」がガ格をとる場合は、5.3.2.2 節の「見える」類「ガ格 対象型」と似ている。例えば、(5-37) では対象の「太郎のこと」

はガ格で表示され、注視点となっている。また、経験者の「花子」が自らの意志を希薄化させ受け手のように対象の「太郎のこと」からの刺激を受容することを表し、「太郎のこと」から経験者の「花子」へ感情的刺激が向かうというのが主な方向性である。

(5-37) 花子 (に) は太郎のことが飽きた。

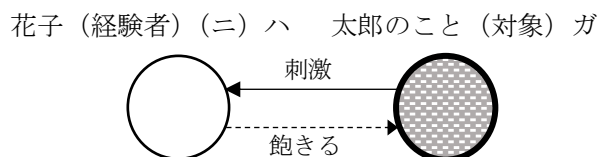


図 5-16 「花子 (に) は太郎のことが飽きた」におけるガ格のイメージ

このように、「飽きる」類「ニ／ガ格 対象＋原因型」は、「(ヲ／)ニ格 原因＋対象型」に近い側面もあれば、「見える」類「ガ格 対象型」に近い側面もある。このことから、「飽きる」類「ニ／ガ格 対象＋原因型」は「(ヲ／)ニ格 原因＋対象型」と「見える」類「ガ格 対象型」との中間的位置にあると考えられる。

### 5.3.3.3 「震える」類「ニ／ガ格 原因＋対象型」

次に、「震える」類「ニ／ガ格 原因＋対象型」について見る。この型はニ格をとり〈原因〉を表す場合もあれば、ガ格をとり身体部位という「内的対象」を表す場合もある。

このうち、ニ格をとり〈原因〉を表す場合は、先の 5.3.1.2 節の「(ヲ／)ニ格 原因型」と同様である。例えば、(5-38) のように「震える」はニ格をとる場合は直接受身化ができず、交替使役化のみができる。このことから、〈原因〉を表すと考えられる。即ち、経験者の「花子」が原因の「ホラー映画」から刺激を受けることにより、心的状態の変化が引き起こされる。そのため、図 5-17 のように原因の「ホラー映画」から経験者の「花子」への刺激は相対的に強いのに対し、経験者の「花子」から原因の「ホラー映画」への働きかけは相対的に弱い。

(5-38) a. 花子がホラー映画に震えた。

b. \*ホラー映画が花子に震えられた。(直接受身化× → 対象×)

- c. ホラー映画が花子を震えさせた。(交替使役化○ → 原因○)  
 → ニ格：原因

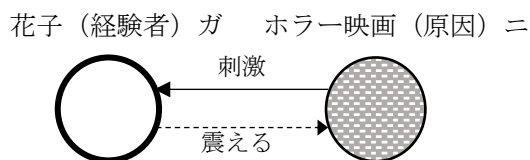


図 5-17 「花子はホラー映画に震えた」におけるニ格のイメージ

これに対し、ガ格をとり身体部位という内的な〈対象〉を表す場合は、先の 5.3.2.1 節の「痛む」類「ガ格 対象型」と同様である。例えば、(5-39) では対象の「足」はガ格で表示され、注視点となっている。また、「足」から「花子」への刺激的影響によって花子は状態変化が起こるため、「足」から「花子」への刺激は相対的に強く実線の矢印で表し、「花子」から「足」への働きかけは相対的に弱く破線の矢印で表す。

(5-39) 花子は足が震えた。

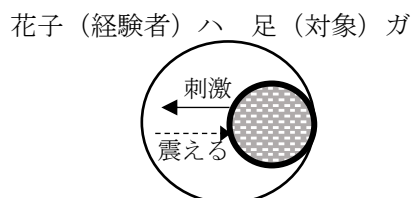


図 5-18 「花子は足が震えた」におけるガ格のイメージ<sup>47</sup>

このように、「震える」類「ニ／ガ格 原因＋対象型」は「(ヲ／) ニ格 原因型」に近い側面もあれば、「痛む」類「ガ格 対象型」に近い側面もある。このことから、

<sup>47</sup> この型における「震える」や「眩む」などの語は、「花子はその男の声に背筋が震えた」のようにニ格とガ格を同時にとる場合もある。この場合、まず「男の声」が「花子」に恐怖を感じさせ、その恐怖が花子自身の「背筋」に伝わって「背筋」が震えるというように、二段階の刺激があると考えられる。また、花子から恐怖の感情が「男 (の声)」に向かっている。これを図 5-ii に示す。

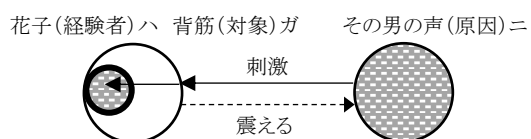


図 5-ii 「花子はその男の声に背筋が震えた」のイメージ

「震える」類「ニ／ガ格 原因＋対象型」は「(ヲ／)ニ格 原因型」と「痛む」類「ガ格 対象型」との中間的位置にあると考えられる。

#### 5.3.3.4 「疲れる」類「ニ／ガ格 原因＋対象型」

次に、「疲れる」類「ニ／ガ格 原因＋対象型」について見る。この型はニ格をとり〈原因〉を表す場合もあれば、ガ格をとり身体部位という内的な〈対象〉または身体部位ではない外的な〈対象〉を表す場合もある。

このうち、ニ格をとり〈原因〉を表す場合は先の5.3.1.2節の「(ヲ／)ニ格 原因型」と同様である。例えば、(5-40)のように「疲れる」はニ格をとる場合、直接受身化ができず、交替使役化のみができる。このことから、ニ格が〈原因〉を表すと考えられる。即ち、経験者の「花子」が「人間関係」から刺激を受けることにより、心的状態の変化が引き起こされる。そのため、図5-19のように「人間関係」から経験者の「花子」への刺激は相対的に強いのに対し、経験者の「花子」から「人間関係」への働きかけは相対的に弱い。

- (5-40) a. 花子が人間関係に疲れた。  
 b. \*人間関係が花子に疲れられた。(直接受身化× → 対象×)  
 c. 人間関係が花子を疲れさせた。(交替使役化○ → 原因○)

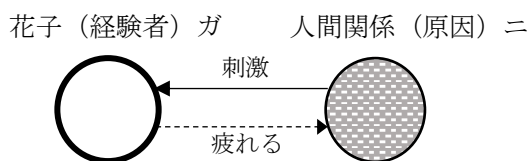


図5-19 「花子が人間関係に疲れた」におけるニ格のイメージ

これに対し、ガ格をとり身体部位という内的な〈対象〉を表す場合は先の5.3.2.1節の「痛む」類「ガ格 対象型」と同様である。例えば、(5-41)では対象の「足」はガ格で表示され、注視点となっている。そのため、図5-20では「足」は太線の丸で表し、「花子」は細線の丸で表す。また、「足」から「花子」への刺激的影響によって花子は状態変化が引き起こされるため、「足」から「花子」への刺激は相対的に強く実

線の矢印で表し、「花子」から「足」への働きかけは相対的に弱く破線の矢印で表す。

(5-41) 花子は足が疲れた。

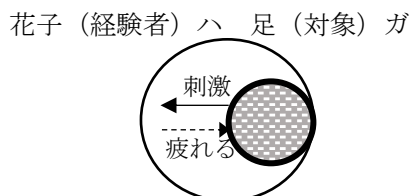


図 5-20 「花子は足が疲れた」におけるガ格のイメージ

また、ガ格をとり、身体部位ではない外的な〈対象〉を表す場合は、先の 5.3.2.2 節の「見える」類「ガ格 対象型」と似ている。例えば、(5-42) では対象の「太郎との付き合い」はガ格で表示され、視点となっている。また、経験者の「花子」が自らの意志を希薄化させ受け手のように対象の「太郎と付き合うこと」からの刺激を受容することを表し、「太郎との付き合い」から経験者の「花子」へ感情的刺激が向かうというのが主な方向性である。

(5-42) 花子（に）は太郎との付き合いが疲れた。



図 5-21 「花子（に）は太郎との付き合いが疲れた」におけるガ格のイメージ

このように、「疲れる」類「ニ／ガ格 原因+対象型」は「(ヲ／)ニ格 原因型」、「痛む」類「ガ格 対象型」、「見える」類「ガ格 対象型」の3つのいずれにも近い側面がある。このことから、「疲れる」類「ニ／ガ格 原因+対象型」は「(ヲ／)ニ格 原因型」、「痛む」類「ガ格 対象型」、「見える」類「ガ格 対象型」の3つが複合化したものであると考えられる。

## 5.3.3.5 「困る」類「(ヲ／) ニ／ガ格 原因+対象型」

最後に、「困る」類「ニ／ガ格原因+対象型」について見る。この型は二格をとり〈原因〉を表す場合もあれば、ガ格をとり身体部位ではない外的な〈対象〉を表す場合もある。

このうち、二格をとり〈原因〉を表す場合は、先の5.3.1.2節の「(ヲ／) 二格 原因型」と同様である。例えば、(5-43)のように「困る」は二格をとる場合、直接受身化ができず、交替使役化のみができる。このことから、〈原因〉を表すことが考えられる。即ち、経験者の「花子」が原因の「泣き止まない息子」から刺激を受けることにより、心的状態の変化が引き起こされる。そのため、図5-22のように原因の「泣き止まない息子」から経験者の「花子」への刺激は相対的に強いのに対し、経験者の「花子」から原因の「泣き止まない息子」への働きかけは相対的に弱い。

- (5-43) a. 花子が泣き止まない息子に困った。  
 b. \*泣き止まない息子が花子に困られた。(直接受身化× → 対象×)  
 c. 泣き止まない息子が花子を困らせた。(交替使役化○ → 原因○)

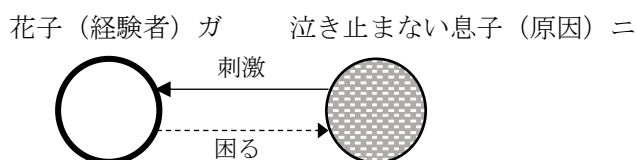


図5-22 「花子が泣き止まない息子に困った」における二格のイメージ

これに対し、ガ格をとり外的な〈対象〉を表す場合は、先の5.3.2.2節の「見える」類「ガ格 対象型」と同様である。例えば、(5-44)では対象の「充電器のないこと」はガ格で表示され、注視点となっている。また、経験者の「花子」が自らの意志を希薄化させ受け手のように対象の「充電器のないこと」からの刺激を受容することを表し、「充電器のないこと」から経験者の「花子」へ感情的刺激が向かうというのが主な方向性である。

- (5-44) 花子（に）は充電器のないことが困った。



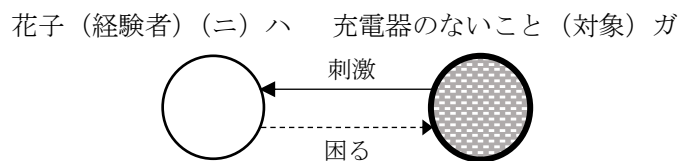


図 5-23 「花子（に）は充電器のないことが困った」におけるガ格のイメージ

このように、「困る」類「ニ／ガ格 原因＋対象型」は「(ヲ／)ニ格 原因型」に近い側面もあれば、「見える」類「ガ格 対象型」に近い側面もある。このことから、「困る」類「ニ／ガ格 原因＋対象型」は「(ヲ／)ニ格 原因型」と「見える」類「ガ格 対象型」との中間的位置にあると考えられる。

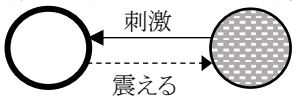
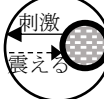
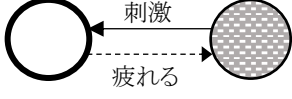

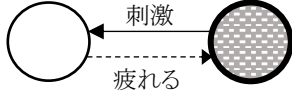
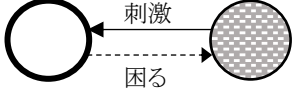



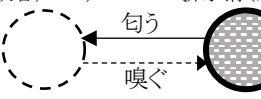
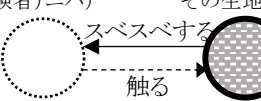

以上、ヲ／ガ格両用のもの、ヲ／ニ／ガ格をいずれもとり得るもの、ニ／ガ格両用のものの構文的特徴について見てきた。注視点の位置や、経験者と対象／原因との間の働きかけの強弱から見ると、「ヲ／ガ格 対象型」、「飽きる」類「ニ／ガ格 対象＋原因型」、「震える」類「ニ／ガ格 原因＋対象型」、「疲れる」類「ニ／ガ格 原因＋対象型」、「困る」類「(ヲ／)ニ／ガ格 原因＋対象型」の順に動作性が高いものから状態性が高いものまで変化していくと考えられる。

#### 5.3.4 本節のまとめ

以上、心理動詞の構文的特徴について見てきた。経験者と対象／原因の間の働きかけの強弱、注視点の位置から順番に並べると、次のようになる。

表 5-4 心理動詞の構文的特徴のイメージ図

格の型		図の番号	構文的特徴のイメージ図	用例
	外的運動動詞	5-2		花子がお皿を <u>割った</u> 。
①	ヲ(ノニ)格対象型	5-3		花子が太郎を <u>憎んだ</u> 。
②	(ヲノ)ニ格対象+原因型	5-5		花子が息子の合格を <u>喜んだ</u> 。
		5-6		花子が息子の合格に <u>喜んだ</u> 。
③	(ヲノ)ニ格原因型	5-4		花子が面接官の質問に <u>緊張した</u> 。
④	ヲ/ガ格対象型	5-12		花子がいいアイデアを <u>思いついた</u> 。
		5-13		花子(に)はいいアイデアが <u>思いついた</u> 。
⑤	「飽きる」類ニ/ガ格対象+原因型	5-14		花子が太郎(のことに) <u>飽きた</u> 。
		5-15		花子が太郎(の行為)に <u>飽きた</u> 。
		5-16		花子(に)は太郎のことが <u>飽きた</u> 。

⑥	「震える」類 ニ／ガ格 原因＋対象型	5-17	花子(経験者)ガ ホラー映画(原因)ニ 	花子がホラー映画に <u>震</u> えた。
		5-18	花子(経験者)ハ 足(対象)ガ 	花子は足が <u>震</u> えた。
⑦	「疲れる」類 ニ／ガ格 原因＋対象型	5-19	花子(経験者)ガ 人間関係(原因)ニ 	花子が人間関係に <u>疲</u> れた。
		5-20	花子(経験者)ハ 足(対象)ガ 	花子は足が <u>疲</u> れた。
		5-21	花子(経験者)(ニ)ハ 太郎との付き合い(対象)ガ 	花子(に)は太郎との付き合 <u>い</u> が <u>疲</u> れた。
⑧	「困る」類 (ヲ／)ニ／ガ格 原因＋対象型	5-22	花子(経験者)ガ 泣き止まない息子(原因)ニ 	花子が泣き止まない息子に <u>困</u> った。
		5-23	花子(経験者)(ニ)ハ 充電器のないこと(対象)ガ 	花子(に)は充電器のないことが <u>困</u> った。
⑨	「痛む」類 ガ格対象型	5-7	花子(経験者)ハ 胃(対象)ガ 	花子は胃が <u>痛</u> んだ。
⑩	「見える」類 ガ格対象型	5-8	花子(経験者)(ニ)ハ 富士山(対象)ガ 	花子(に)は富士山が <u>見</u> えた。
⑪	「匂う」類 ガ格対象型	5-9	(私(経験者)ニハ) 排水溝(対象)ガ 	排水溝が <u>匂</u> った。
⑫	「スベスベする」類 ガ格対象型	5-10	(私(経験者)ニハ) その生地(対象)ガ 	その生地が <u>スベスベ</u> する。
	状態を表す 静態動詞や 形容詞	5-11		富士山が <u>聳</u> えている／ 高い。

このように、上から下まで、心理動詞の構文的特徴類型は、①「ヲ（／ニ）格 対象型」、②「（ヲ／）ニ格 対象+原因型」、③「（ヲ／）ニ格 原因型」、④「ヲ／ガ格 対象型」、⑤「飽きる」類「ニ／ガ格 対象+原因型」、⑥「震える」類「ニ／ガ格 原因+対象型」、⑦「疲れる」類「ニ／ガ格 原因+対象型」、⑧「困る」類「（ヲ／）ニ／ガ格 原因+対象型」、⑨「痛む」類「ガ格 対象型」、⑩「見える」類「ガ格 対象型」、⑪「匂う」類「ガ格 対象型」、⑫「スベスベする」類「ガ格 対象型」の順に動作性が高いものから状態性が高いものまで変化していく。

#### 5.4 本研究における心理動詞の7つのタイプの格助詞

前節では心理動詞の格助詞の構文的特徴について見た。本節は本研究における心理動詞の7つのタイプはそれぞれどのような格助詞をとっているかについて考察し、その傾向性を見ることによって、本研究の心理動詞の内部分類と〈動き〉を表す外的運動動詞や、〈状態〉を表す静態動詞、形容詞との連続性を検証する。

本研究における心理動詞の7つのタイプと格助詞との対応関係を表5-5のように示す（詳しくは巻末の資料⑤を参照）。

表 5-5 本研究における心理動詞のタイプと格助詞との対応関係

格の型 心理動詞 のタイプ	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫
	ヲ(／ニ)格 対象型	(ヲ／)ニ格 対象+原因型	(ヲ／)ニ格 原因型	ヲ／ガ格 対象型	「飽きる」類 ニ／ガ格 対象+原因型	「震える」類 ニ／ガ格 原因+対象型	「疲れる」類 ニ／ガ格 原因+対象型	「困る」類 (ヲ／)ニ／ガ格 原因+対象型	「痛む」類 ガ格対象型	「見える」類 ガ格対象型	「匂う」類 ガ格対象型	「スベスベする」 類 ガ格対象型
I	考える、 判断する等 (23 語)	期待する、 同情する等 (5 語)										
II		恐れる、 喜ぶ等 (4 語)	後悔する、 苦しむ (2 語)									
III	気が付く、 さとの (2 語)			思いつく (1 語)						ひらめく (1 語)		
IV		憧れる、 迷う (2 語)	白ける、 緊張する等 (11 語)			くらむ、 震える等 (5 語)	むかつく、 ドキドキする (2 語)	悩む (1 語)	火照る、 痛む等 (13 語)	気になる、 癩に障る (2 語)		
V		飽き飽きす る、呆れる等 (4 語)	焦る、 懲りる等 (5 語)	感じる、 分かる (2 語)	飽きる、 感心する等 (4 語)	くたびれる、 弱る (2 語)	疲れる、 痺れる (2 語)	困る、 安心する等 (5 語)	空く、 渴く等 (6 語)	見当がつく、 見える等 (6 語)		
VI											匂う、音が する等 (7 語)	
VII												ゴワゴワする、 ザラザラする 等(6 語)

5.4 節で述べたように、心理動詞がとる格助詞の類型は①～⑫の順に動作性が高いものから状態性が高いものまで変化していく。表 5-5 のように、本研究でテンス・アスペクト、人称制限、文の意味機能によって分類した心理動詞の 7 つのタイプは格助詞の類型から見ても、順に動作性が高いものから状態性が高いものまで分布しており、タイプ I が〈動き〉を表す外的運動動詞に近く、タイプ VII が〈状態〉を表す静態動詞や形容詞に近い傾向が見られる。

## 第六章 結論と今後の展望

本章では、前章までに論じた心理動詞の分類と分析についてまとめ、今後の課題と展望について述べる。

### 6.1 本研究のまとめと結論

本研究では、現代日本語の心理動詞を対象に新たな分類を提出し、それぞれの心理動詞が〈動き〉を表すものか〈状態〉を表すものかについて考察してきた。第二章～第五章の結論を以下のようにまとめる。

#### ①第二章 先行研究

第二章では、日本語の心理動詞に関する先行研究を概観し、その問題点を指摘し、本研究の立場を示した。

まず、心理動詞の内部分類に関する先行研究については、2.1節で述べたように意味特徴、持続性と他動性、テンス・アスペクト、人称制限、文の意味機能などの観点から心理動詞を分類しているが、分類に恣意性が感じられる点や、ポテンシャル（潜在時）な事態を見逃している点に問題があることを指摘した。そこで本研究では、テンス・アスペクト、人称制限、文の意味機能の観点から心理動詞を分類することとした。

また、心理動詞の位置付けに関する先行研究については、①〈状態〉を表すとする立場、②〈動き〉を表すとする立場、③〈状態〉と〈動き〉の間であるとする立場、という3つの立場のうちのどれかをとるものがほとんどであった。しかし、心理動詞は均質なものではなく、連続しているバリエーションであるため、本研究では④状態性の高いものから動作性の高いものまで様々なものがあるとする立場をとることとした。

また、心理動詞の自己制御性に関する先行研究、及び即時性に関する先行研究については、本研究は両者を踏まえた上で、自己制御性と即時性を合わせて心理動詞の位

置付けを考察することとした。

さらに、心理動詞の格に関する先行研究については、直接受身化テストと交替使役化テストのいずれか一方のみで判断する点に問題があることを指摘し、本研究では直接受身化テストと交替使役化テストの両方を用いて心理動詞の格、及びその構文的特徴を考察することを主張した。

## ②第三章 心理動詞のテンス・アスペクト、人称制限、文の意味機能による分類

第三章では、日本語の心理動詞をテンス・アスペクト、人称制限、文の意味機能の観点から7つに分けた。その分類結果を表6-1に示す。



表 6-1 本研究における心理動詞の7分類

タイプ	分類指標 語例・語数	アクチュアル(個別時)な事態						ポテンシャル (潜在時)な事態		
		一人称			三人称			スル	シテイル	
		スル	シタ	シテイル/シテイタ	スル	シタ	シテイル/シテイタ			
I	考える、恨む等(28)	①意志表出 (T:未来 A:完成相) ②心理表出 (T:現在 A:完成相)	確認・記述 (T:過去 A:完成相)	確認・記述 (T:現在/過去 A:動作継続相)	予測 (T:未来 A:完成相)	×	確認・記述 (T:現在/過去 A:動作継続相)	確認・記述 (主に経験者 の属性)	×	
II	喜ぶ、恐れる等(6)	予測 (T:未来 A:完成相)	①確認・記述 (T:過去 A:完成相) ②心理表出 (T:現在 A:パーフェクト相)	確認・記述 (T:現在/過去 A:結果継続相)			確認・記述 (T:現在/過去 A:結果継続相)			
III	ひらめく、思いつく等(4)						確認・記述 (T:現在/過去 A:動作継続相)			確認・記述 (T:現在/過去 A:結果継続相)
IV	悩む、痛む等(36)	①予測 (T:未来 A:完成相) ②心理表出 (T:現在 A:完成相)	①確認・記述 (T:過去 A:完成相) ②心理表出 (T:現在 A:パーフェクト相)	確認・記述 (T:現在/過去 A:結果継続相)			確認・記述 (T:現在/過去 A:動作継続相)	確認・記述 (T:現在/過去 A:動作継続相)		確認・記述 (主に対象/ 経験者の 属性)
V	分かる、驚く等(36)						確認・記述 (T:現在/過去 A:結果継続相)	確認・記述 (T:現在/過去 A:結果継続相)		
VI	音がする等(7)						確認・記述 (T:過去 A:完成相)	確認・記述 (T:現在/過去 A:動作継続相)		×
VII	ザラザラする等(6)	確認・記述 (対象の 属性)	確認・記述 (対象の 属性)							

(表 1-1 の再掲)

タイプⅠ～Ⅶの特徴は次の通りである。

タイプⅠ：スル形で一人称の未来の意志〈表出〉を表すことができる点で外的運動動詞（「行く」「乗る」「戻る」など）と接近している。例えば、外的運動動詞「行く」の場合、「すぐ行く」は「すぐ行くことにする」のように未来の意志を表す。これと同様に、タイプⅠの「考える」も、「もう少し考える」は「もう少し考えることにする」のように未来の意志を表している。このことから、タイプⅠの心理動詞は外的運動動詞と接近していると考えられる。

タイプⅡ：一人称のスル形が未来の意志〈表出〉を表さず、未来の心理に対する〈予測〉のみを表すという点でタイプⅠと異なる。

タイプⅢ：一人称のシタ形で過去の事態の〈確認・記述〉だけでなく、発話時現在の心理の〈表出〉を表すこともできるという点と、一人称と三人称のシテイル／シテイタ形で現在または過去における心理の結果状態の維持の〈確認・記述〉を表すという点でタイプⅡと異なる。

タイプⅣ：一人称のスル形で未来の心理に対する〈予測〉だけでなく、発話時現在の心理の〈表出〉を表すこともできるという点と、シタ形で過去の心理の〈確認・記述〉のみを表すという点、及び一人称と三人称のシテイル／シテイタ形は現在または過去における心理の進行局面の継続性を表すという点でタイプⅢと異なる。

タイプⅤ：一人称のスル形だけでなくシタ形も〈表出〉を表すことができるという点と、一人称と三人称のシテイル／シテイル形が現在または過去における心理の結果状態の維持の〈確認・記述〉を表すという点でタイプⅣと異なる。

タイプⅥ：上のタイプⅠ～Ⅴと違い、三人称の場合は顕在的にも潜在的にも存在しないという点で異なる。

タイプⅦ：三人称の場合が成立しないだけでなく、シテイル形で属性を表すことができる点においてタイプⅠ～Ⅵと異なり、静態動詞（「聳える」「優れる」

など)と接近している。例えば、静態動詞の「聳える」の場合、「富士山は聳えている」のようにシテイル形で「富士山」の静的状態と属性を表している。これと同様に、タイプⅦの「スベスベする」の場合も、「その生地はスベスベしている」のようにシテイル形で「その生地」の属性を表している。

このように、日本語の心理動詞はテンス・アスペクト、人称制限、文の意味機能から見ると、一部の先行研究で言われているように全て〈動き〉を表すわけでもないし、全て〈状態〉を表すわけでもなく、動作性の高いものから状態性の高いものまで表6-1のように連続していると捉えられる。

### ③第四章 心理動詞の各タイプの自己制御性と即時性

第四章では、第三章で分類した心理動詞の7つのタイプにおける自己制御性と即時性について考察した。これを表6-2に示す。

表 6-2 本研究における心理動詞の自己制御性と即時性

		自己制御性	
		+命令文	-命令文
即時性	-即時文	タイプⅠ:考える、恨む など(28語)	タイプⅠ:なし
		タイプⅡ:喜ぶ、恐れる など(6語)	タイプⅡ:なし
		タイプⅢ:なし	タイプⅢ:気がつく(1語)
		タイプⅣ:恥じる (1語)	タイプⅣ:怒りを覚える、震える など(6語)
		タイプⅤ:なし	タイプⅤ:感動する、幻滅する など(6語)
		タイプⅥ:なし	タイプⅥ:鼻をつく、匂う(2語)
		タイプⅦ:なし	タイプⅦ:なし
	+即時文	タイプⅠ:なし	タイプⅠ:なし
		タイプⅡ:なし	タイプⅡ:なし
		タイプⅢ:思いつく、さとる(2語)	タイプⅢ:ひらめく(1語)
		タイプⅣ:憧れる、悩む など(9語)	タイプⅣ:気になる、白ける など(20語)
		タイプⅤ:焦る、安心する など(6語)	タイプⅤ:困る、見える など(24語)
		タイプⅥ:なし	タイプⅥ:音がする、香りがする など(5語)
		タイプⅦ:なし	タイプⅦ:ザラザラする、スベスベする など(6語)

(表 4-9 の再掲)

表 6-2 に示すように、タイプ I ～VII における自己制御性は順に相対的に低くなるのに対し、即時性は順に相対的に高くなるという傾向が見られることを指摘した。即ち、タイプ I ～VII は順に動作性が高いものから状態性が高いものまで分布しており、タイプ I の心理動詞は「食べる」などの外的運動動詞と近く、タイプ VII の心理動詞は「嬉しい」「悲しい」などの〈状態〉を表す形容詞と近いことを指摘した。

#### ④第五章 心理動詞の構文的特徴

第五章では、第三章で分類した心理動詞の 7 つのタイプにおける構文的特徴について考察した。その結果、格標示について、心理動詞の 7 つのタイプは格標示に違いがあり、タイプ I からタイプ VII に向かうにつれて対象もしくは原因の格標示が「ヲ格→ニ格→ガ格」へと移行していることを明らかにした。また、構文的特徴について、表 6-3 のようにタイプ I ～VII の順に動作性が高いものから状態性が高いものまで変化していくことを指摘した。

表 6-3 本研究における心理動詞のタイプと構文的特徴との対応関係

格の型 心理動詞 のタイプ	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫
	ヲ(ノ)ニ格 対象型	(ヲノ)ニ格 対象+原因型	(ヲノ)ニ格 原因型	ヲノガ格 対象型	「飽きる」類 ニノガ格 対象+原因型	「震える」類 ニノガ格 原因+対象型	「疲れる」類 ニノガ格 原因+対象型	「困る」類 (ヲノ)ニノガ格 原因+対象型	「痛む」類 ガ格対象型	「見える」類 ガ格対象型	「匂う」類 ガ格対象型	「スベスベする」 類 ガ格対象型
I	考える、 判断する等 (23 語)	期待する、 同情する等 (5 語)										
II		恐れる、 喜ぶ等 (4 語)	後悔する、 苦しむ (2 語)									
III	気が付く、 さとり (2 語)			思いつく (1 語)						ひらめく (1 語)		
IV		憧れる、 迷う (2 語)	白ける、 緊張する等 (11 語)			くらむ、 震える等 (5 語)	むかつく、 ドキドキする (2 語)	悩む (1 語)	火照る、 痛む等 (13 語)	気になる、 癪に障る (2 語)		
V		飽き飽きす る、呆れる等 (4 語)	焦る、 懲りる等 (5 語)	感じる、 分かる (2 語)	飽きる、 感心する等 (4 語)	くたびれる、 弱る (2 語)	疲れる、 痺れる (2 語)	困る、 安心する等 (5 語)	空く、 渴く等 (6 語)	見当がつく、 見える等 (6 語)		
VI											匂う、音が する等 (7 語)	
VII												ゴワゴワする、 ザラザラする 等(6 語)

(表 5-5 の再掲)

このように本研究では、まずテンス・アスペクト、人称制限、文の意味機能の観点から心理動詞を動作性が高いものから状態性が高いものまでの7つに分類した。次に、各タイプの自己制御性と即時性、及び構文的特徴を考察し、各タイプの心理動詞と〈動き〉を表す語や、〈状態〉を表す語との関係を見ることにより、7つのタイプは図 6-1 のように動作性が高いものから状態性が高いものまで変化していくという連続性があることを明らかにした。

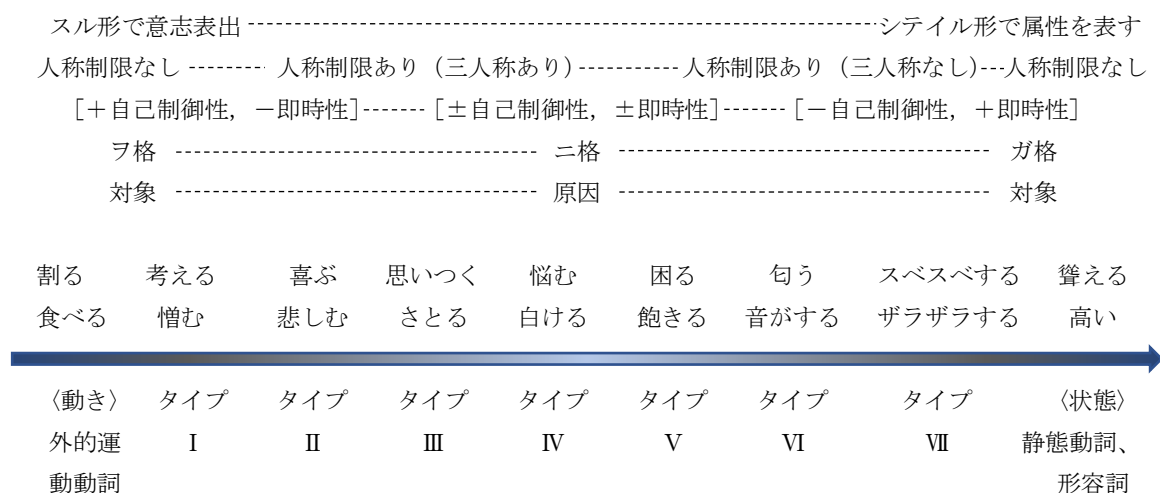


図 6-1 本研究における心理動詞の分類と位置付け

(図 1-1 の再掲)

## 6.2 今後の課題と展望

最後に、本研究の課題と今後の展望について述べる。本研究の課題と展望は以下の6点である。

1点目は、考察対象となる心理動詞の選定についてである。本研究では第一章で心理動詞の対象／原因にとる格を考察するため、次の(6-1)のように経験者のみが存在し、対象／原因に格をとらない心理動詞(例えば、「気がする」「予感がする」「頭痛がする」「耳鳴りがする」など)を除外した。

(6-1) (私は) 何か嫌な予感がする。

((1-6) の再掲)

しかし、これらの語は対象／原因に格をとらないという構文的特徴を持つ点でほかの心理動詞と異なり、1つの型として見る必要がある。今後はこれらの語について考察していきたい。

2点目は、条件文に心理動詞が使われる場合、アクチュアル（個別時）な事態を表すか、ポテンシャル（潜在時）な事態を表すかについてである。本研究は第三章で心理動詞は条件節が前接する場合、スル形でアクチュアル（個別時）な事態を表し、未来の心理状態を表すと述べた。

しかし、国立国語研究所（1964）で指摘されている通り、条件節がくる場合、(6-2)のように「超時間的な、一般的な結びつきとみとめるか、それとも、未来の仮定条件をあらわす個別的な結びつきとみるか」（p. 155）、というように判断に揺れがある。

(6-2) チャコール・グレイのような色調のジャージなどで作れば外出着にもなります。

（レスメーカーキング 11月 153）（国立国語研究所 1964：155）

そのため、条件文に心理動詞が使われる場合、アクチュアル（個別時）な事態を表すか、ポテンシャル（潜在時）な事態を表すかについてさらに検討する必要がある。

3点目は、心理動詞の即時性についてである。本研究では第四章で(6-3)(6-4)のように「わっ／あっ／ああ」などの感動詞をつけて話し手の即時的な感情を表すことができる文を即時文とし、心理動詞の即時性について考察した。

(6-3) (突然雷が鳴って思わず)「わっ、ビクリした」と叫んだ。

(6-4) (どちらの料理を注文するか迷い、思わず)「ああ、迷うなあ」と呟いた。

((2-138) (2-139) の再掲)

しかし、(6-3)の場合、感動詞は瞬間的な感嘆を表す「わっ」であり、動詞はタ形をとるのに対し、(6-4)の場合、感動詞はある程度持続的な感嘆を表す「ああ」であ

り、動詞はスル形をとるという違いがある。このことから、(6-4) と比べ、(6-3) のほうがより即時的であると思われる。そのため、心理動詞の即時性を即時的程度によってさらに分けて考察する必要があると思われる。

4点目は、心理動詞と〈状態〉を表す感情形容詞との接近についてである。第四章では心理動詞の即時性について考察し、(6-5) のように即時的に感嘆する点で心理状態を表す感情形容詞と同様であると指摘した。

(6-5) a. (思わず)「ああ、安心した」と呟いた。

b. (思わず)「ああ、安心だ」と呟いた。

しかし、心理動詞と感情形容詞との関係については本研究ではほとんど論じてこなかった。今後は両者の違いや使い分けについて明らかにしていきたい。

5点目は、心理動詞の格交替についてである。第五章で述べたように、心理動詞はヲ／ニ格、ヲ／ガ格、ニ／ガ格など2つ以上の格をとり得る場合がある。このような場合の格交替の条件を明らかにするために、前にくる名詞(句)の種類や意味、心理動詞の構文的特徴などを詳しく考察する必要があると思われる。例えば、次の(6-6)

(6-7) のように、「迷う」の前にくる名詞はいずれも「購入」というコト名詞であるが、(6-6) ではヲ格をとっているのに対し、(6-7) ではニ格をとっているという違いがある。意味から見ると、(6-6) の「購入を迷う」は「その商品を購入するかどうか」について迷うという意味を表すのに対し、(6-7) の「購入に迷う」は「どの商品を購入するか」について迷うという意味を表すという違いがある。これも本研究で指摘したヲ格は直接的対象を表し、ニ格は間接的対象または原因を表すという違いに関わると思われる。

(6-6) シャープアクオス「AQUOS」(LC-十三S4-S)の購入を迷い、店頭へ実物を見に行ってきました。しかし、思っているより画像が悪く、購入を迷っています。

(Yahoo!知恵袋)

(6-7) DVDの+R、-RのDLのメリット、デメリットを教えてくださいませんか



か？同じ容量だし、ドライブとかも両方対応しているので、メディア購入に迷っています。

(Yahoo!知恵袋)

このように、心理動詞の格交替による意味の違いについてさらに研究する必要がある。

6点目は、日本語教育にも役立つように、学習者にはどのような心理動詞の誤用が見られるかについて考察するという点である。例えば、次の(6-8)は中国人日本語学習者の誤用例である。これは(6-9a)～(6-9c)のように修正できる。

(6-8) また、読解は大丈夫で、聴解は速く返事ができないということは困っている。

(『日本語学習者作文コーパス』CG057)

- (6-9) a. 聴解は速く返事ができないということに困っている。(は→に)  
 b. 聴解は速く返事ができないことは困る。(困っている→困る)  
 c. (私には)聴解は速く返事ができないことが困る。

(は→が、困っている→困る)

このように、学習者は心理動詞を習得するなかで、格の違いや、スル形とシテイル形の違いがどのように文全体の意味に影響するかについて十分に理解していないことが窺える。このような学習者の誤用について原因を追究し、日本語教育文法の立場から説明をしていきたいと思う。

以上の問題を追究していくことで、本研究をさらに発展させたい。

## 参考文献

- Bando, Michiko (1996) Semantic Properties of -Ni NP and -O NP of Japanese Psych-Verbs. 『大阪大学言語文化学』(5), pp.165-177, 大阪大学言語文化学会.
- Fillmore, Charles D. (1968) The Case for Case. *Universals in Linguistic Theory* Emmon Back and Robert T. Harms. (1968) eds, pp.1-89, Holt, Rinehart and Winston Inc.
- Langacker, R. W. (1991a) *Foundation of Cognitive Grammar*. Vol.2. Stanford University Press.
- Langacker, R. W. (1991b) *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Bases of Grammar*. Mouton de Gruyter.
- Vendler, Zeno (1967) *Linguistics in Philosophy*. Cornell University Press.
- 岩崎勝一・大野剛(2007)「即時文」・「非即時文」－言語学の方法論と既成概念－  
(串田秀也・定延利之・伝康晴)『時間の中の文と発話 シリーズ文と発話3』,  
pp.135-157, ひつじ書房.
- 王雲姣 (2021)「日本語の心理動詞における自己制御性と即時性について一格との関係から－」(『東アジア日本学研究』(6), pp.37-52, 東アジア日本学研究学会.
- 王雲姣 (2022a)「日本語の心理動詞のテンス・アスペクト的特徴による分類」(『名古屋大学人文学フォーラム』(5), pp.235-250, 名古屋大学大学院人文学研究科.
- 王雲姣 (2022b)「心理動詞の使役構文について」(『東アジア日本学研究』(8), pp.67-82, 東アジア日本学研究学会.
- 王雲姣 (2022c)「感情動詞の構文的特徴について」(『ことばの科学』(36), pp.57-75, 名古屋大学言語文化研究会.
- 大槻くるみ(2014)「日英語心理動詞文の意味構造と事態解釈モデル」(『国際文化研究』(20), pp.45-57, 東北大学国際文化学会.
- 奥田靖雄(1977)「アスペクトの研究をめぐって－金田一的段階－」(『宮城教育大学国語国文』(8), 宮城教育大学国語国文学会. [奥田靖雄(1985)『ことばの研究・序説』所収, pp.85-104, むぎ書房 所収]

- 奥田靖雄 (1988) 「文の意味的なタイプ—その対象的な内容とモーダルな意味とのからみあい—」『教育国語』(92), むぎ書房. [奥田靖雄 (2015) 『奥田靖雄著作集 2 言語学編 (1)』, pp. 85-105, むぎ書房 所収]
- 河上誓作編著 (1996) 『認知言語学の基礎』, 研究社出版.
- 北村よう (2008) 「感情動詞の受身をめぐって」『東海大学紀要 留学生教育センター』(28), pp. 123-133, 東海大学留学生教育センター.
- 久保田美佳 (2016) 「視覚動詞 look/see、「みる」/「みえる」の比較—動作主性および視覚認知プロセスに基づく認知言語学的考察—」『研究論集』(103), pp. 71-87, 関西外国語大学.
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』, ひつじ書房.
- 国立国語研究所 (1964) 『現代雑誌九十種の用語用字 第3分冊 (分析)』(国立国語研究所報告シリーズ 25), 秀英出版.
- 小竹直子 (2011) 『日本語心理述語文のアスペクト—話者による事態の捉え方の観点から—』, 広島大学博士学位論文.
- 呉揚 (2017) 『日本語動詞の時間的限定性とアスペクト・テンス形式—運動を表さない動詞を中心に—』, 岡山大学博士学位論文.
- 佐藤響子 (1997) 「二格名詞句をとる心理動詞」『横浜市立大学論叢人文科学系列』(48), pp. 117-138, 横浜市立大学学術研究会.
- 澤田浩子 (2012) 「味覚・嗅覚・聴覚に関する事象と属性」影山太郎 (編) 『属性叙述の世界』, pp. 203-219, くろしお出版.
- 清水泰行 (2007) 「心理動詞の格と意味役割の対応・ずれ—「引用構文」における名詞句と引用節の意味関係から—」『日本文藝研究』(58) 4, pp. 23-39, 関西学院大学日本文學會.
- 清水泰行 (2014) 『現代語における感情用言の形式と意味』, 関西学院大学博士学位論文.
- 杉岡洋子 (1992) 「心理述語についての考察」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』(24), pp. 361-373, 慶應義塾大学言語文化研究所.
- 鈴木彩香 (2016) 『属性叙述文の統語的・意味的分析』, 筑波大学博士学位論文.

- 鈴木重幸 (1957) 「日本語の動詞のすがた (アスペクト) について—～スルの形 と～シテイルの形—」(言語学研究会報告). [金田一春彦 (編) (1976) 『日本語動詞のアスペクト』, pp. 63-81, むぎ書房 所収]
- 関口美緒 (2014) 『日本語心理動詞の研究—生理的・心理的現象から言語表現までを考える—』, 杏林大学博士学位論文.
- 外崎淑子 (2006) 「日本語の主語の人称制限」『神田外語大学言語科学研究センター紀要』(5), pp. 149-160, 神田外語大学言語科学研究センター.
- 外崎淑子 (2013) 「日本語心理動詞の性質について—受身・使役の考察から—」『東海大学紀要 国際教育センター』, pp. 15-27, 東海大学国際教育センター.
- 田窪行則・金水敏 (1997) 「応答詞・感動詞の談話的機能」『文法と音声』, pp. 257-279, くろしお出版.
- 智暁敏 (2015) 『自動詞及び感情動詞の受身表現の日中対照研究』, 拓殖大学博士学位論文.
- 趙仲 (2016) 『日本語心理動詞の内部機能変化と外部連続性—主体性関与を手掛かりとする語彙・文法的な総合研究—』, 北京外国語大学博士学位論文.
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味 I』, くろしお出版.
- 富樫純一 (2005) 「驚きを伝えるということ—感動詞『あっ』と『わっ』の分析を通して—」, 串田秀也・定延利之・伝康晴編『シリーズ文と発話第1巻活動としての文と発話』, pp. 229-251, ひつじ書房.
- 西尾寅弥 (1972) 『形容詞の意味・用法の記述的研究』(国立国語研究所編「国立国語研究所報告シリーズ44」), 秀英出版.
- 仁田義雄 (1988) 「意志動詞と無意志動詞」『月刊言語』17(5), pp. 34-37, 大修館書店.
- 仁田義雄 (1991) 『日本語のヴォイスと他動性』, くろしお出版.
- 仁田義雄 (2004) 「意志性から見た主語」『月刊言語』33(2), pp. 41-49, 大修館書店.
- 仁田義雄 (2012) 「状態をめぐって」『属性叙述の世界』, pp. 177-199, くろしお出版.
- 野田尚史 (1991) 「日本語の受動化と使役化の対称性」『文藝言語研究 言語篇』(19), pp. 31-51, 筑波大学文芸・言語学系.
- 堀川智也 (1992) 「心理動詞のアスペクト」『言語文化部紀要』(21), pp. 187-202, 北海

- 道大学言語文化部紀要.
- 前田直子 (2009) 『日本語の複文—条件文と原因・理由文の記述的研究—』, くろしお出版.
- 松野美海 (2017) 『格交替を許容する日本語感情動詞の格体制についての研究』, 名古屋大学博士学位論文.
- 三原健一 (2000) 「日本語心理動詞の適切な扱いに向けて」『日本語科学』(8), pp. 54-75, 国立国語研究所.
- 村上佳恵 (2010) 「感情動詞の補語についての一考察—「ニ」と「デ」について—」『学習院大學國語國文學會誌』(53), pp. 110-95, 学習院大學國語國文學會.
- 森山新 (2008) 『認知言語学から見た日本語格助詞の意味構造と習得—日本語教育に生かすために—』, ひつじ書房.
- 森山卓郎 (1988) 『日本語動詞述語文の研究』, 明治書院.
- 森山卓郎 (1996) 「情動的感動詞考」『語文』(65), pp. 51-62, 大阪大学国文学研究室.
- 山岡政紀 (2000) 『日本語の述語と文機能』, くろしお出版.
- 山岡政紀 (2014) 「文機能とアスペクトの相関をめぐる一考察—動詞テイル形の解釈を中心に—」『日本語コミュニケーション研究論集』(3), pp. 1-8, 日本語コミュニケーション研究会.
- 山梨正明 (1993) 「格の複合スキーマモデル—格の解釈のゆらぎと認知のメカニズム—」『日本語の格をめぐる』, pp. 39-65, くろしお出版.
- 山西正子・駒走昭二 (2004) 「動詞「わかる」と格助詞—実態と規範意識—」『目白大学人文学部紀要』(11) 11, pp. 55-75, 目白大学人文学部.
- 姚瑶 (2021) 「「あ」系感動詞における語の認定について」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』(66), pp. 209-220, 早稲田大学大学院文学研究科.
- 吉永尚 (2008) 『心理動詞と動作動詞のインターフェイス』, 和泉書院.

## 使用したコーパス

国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』(中納言)

<https://chunagon.ninjal.ac.jp/bccwj-nt/search>

Google ブックス <https://books.google.com/>

『日本語学習者作文コーパス』<http://sakubun.jpn.org/>

本コーパスは 2010-2012 年度日本学術振興会科学研究費補助金 (基盤研究(C))

「自然言語処理の技術を利用したタグ付き学習者作文コーパスの開発」(課題番号: 22520537、研究代表: 李在鎬) によって開発されたものである。

## 初出一覧

**第一章** 書き下ろし

**第二章** 書き下ろし

**第三章** 「日本語の心理動詞のテンス・アスペクト的特徴による分類」(『名古屋大学人文学フォーラム』(5), pp. 235-250, 名古屋大学大学院人文学研究科, 2022年)を基に加筆・修正を行った。

**第四章** 「日本語の心理動詞における自己制御性と即時性について—格との関係から—」(『東アジア日本学研究』(6), pp. 37-52, 東アジア日本学研究学会, 2021年)を基に加筆・修正を行った。

**第五章** 「感情動詞の構文的特徴について」(『ことばの科学』(36), pp. 57-75, 名古屋大学言語文化研究会, 2022年)、及び「心理動詞の使役構文について」(『東アジア日本学研究』(8), pp. 67-82, 東アジア日本学研究学会, 2022年)を基に加筆・修正を行った。

**第六章** 書き下ろし

資料①-1 フ格心理動詞の格標示

格助詞の用例数 フ格心理動詞	ヲ格	ニ格	ガ格	フ格の割合 (%)
考える	18,814	0	0	100
信じる	2,739	0	0	100
思う	2,374	0	0	100
評価する	1,942	0	0	100
希望する	1,498	0	0	100
判断する	1,098	0	0	100
疑う	1,018	0	0	100
さとの	613	0	0	100
察する	474	0	0	100
信用する	449	0	0	100
憎む	449	0	0	100
恨む	359	0	0	100
尊敬する	272	0	0	100
確信する	230	0	0	100
反省する	223	0	0	100
見る	201	0	0	100
軽蔑する	189	0	0	100
推測する	158	0	0	100
推察する	29	0	0	100



資料①-2 ヲ/ニ格心理動詞の格標示

格助詞の用例数 ヲ/ニ格心理動詞	ヲ格	ニ格	ガ格	ヲ格の割合(%)
恐れる	1,792	19	0	99.0%
諦める	624	7	0	98.9%
心配する	444	9	0	98.0%
後悔する	208	14	0	93.7%
望む	1,933	145	0	93.2%
喜ぶ	698	51	0	93.2%
期待する	163	21	0	88.6%
祈る	1,080	181	0	85.6%
願う	144	27	0	84.2%
恥じる	189	83	0	69.5%
焦る	51	28	0	64.6%
怒る	108	149	0	42.0%
照れる	2	5	0	28.6%
迷う	47	140	0	25.1%
感謝する	47	309	0	13.2%
嫉妬する	13	92	0	12.4%
敬服する	2	37	0	5.1%
憧れる	15	572	0	2.6%
苦しむ	16	792	0	2.0%
同意する	7	501	0	1.4%
同情する	2	212	0	0.9%
驚く	12	1604	0	0.7%
気がつく	11	1820	0	0.6%

## 資料①-3 ニ格心理動詞の格標示

格助詞の用例数 ニ格心理動詞	ヲ格	ニ格	ガ格	ヲ格の割合(%)
呆れる	0	171	0	0
めげる	0	84	0	0
懲りる	0	70	0	0
イライラする	0	62	0	0
まいる	0	60	0	0
あきあきする	0	41	0	0
怒りを覚える	0	40	0	0
ガッカリする	0	40	0	0
緊張する	0	32	0	0
退屈する	0	17	0	0
ワクワクする	0	15	0	0
幻滅する	0	14	0	0
ハラハラする	0	8	0	0
焦れる	0	7	0	0
ウキウキする	0	5	0	0
白ける	0	5	0	0

資料①-4 ヲ/ガ格心理動詞の格標示

格助詞の用例数 ヲ/ガ格心理動詞	ヲ格	ガ格	ニ格	ヲ格の割合(%)
感じる	1,512	72	0	95.5%
思いつく	455	83	0	84.6%
分かる	102	18,270	0	0.6%

資料①-5 ヲ/ニ/ガ格心理動詞の格標示

格助詞の用例数 ヲ/ニ/ガ格心理動詞	ヲ格	ニ格	ガ格	ヲ格の割合(%)
悩む	54	604	3	84.6%

資料①-6 ニ/ガ格心理動詞の格標示

格助詞の用例数 ニ/ガ格心理動詞	ニ格	ガ格	ヲ格	ニ格の割合(%)
感動する	347	1	0	99.71%
感心する	240	1	0	99.59%
ウンザリする	133	1	0	99.25%
ビックリする	319	3	0	99.07%
飽きる	259	8	0	97.00%
困る	933	41	0	95.79%
ホッとする	68	4	0	94.44%
頭に来る	22	2	0	91.67%
安心する	54	9	0	85.71%
ゾッとする	26	11	0	70.27%
疲れる	252	214	0	54.08%
むかつく	30	36	0	45.45%
くたびれる	4	6	0	40.00%
ゾクゾクする	6	18	0	25.00%
くらむ	60	210	0	22.22%
震える	192	785	0	19.65%
痺れる	42	254	0	14.19%
ドキドキする	15	146	0	9.32%
弱る	11	114	0	8.80%
クラクラする	5	76	0	6.17%

資料①-7 ガ格心理動詞の格標示

格助詞 ガ格心理動詞	ガ格	ヲ格	ニ格	ガ格の割合 (%)
見える	11,613	0	0	100%
聞こえる	4,583	0	0	100%
気になる	1,639	0	0	100%
痛む	677	0	0	100%
空く	356	0	0	100%
渴く	278	0	0	100%
目につく	262	0	0	100%
いやになる	201	0	0	100%
うずく	130	0	0	100%
減る	128	0	0	100%
音がする	117	0	0	100%
火照る	106	0	0	100%
匂う	94	0	0	100%
ひらめく	78	0	0	100%
凝る	61	0	0	100%
ムズムズする	34	0	0	100%
ブンブンする	28	0	0	100%
ムカムカする	27	0	0	100%
つる	26	0	0	100%
鼻につく	26	0	0	100%
ヒリヒリする	24	0	0	100%
ガクガクする	20	0	0	100%
ズキズキする	16	0	0	100%
鼻をつく	16	0	0	100%
チカチカする	14	0	0	100%
チクチクする	14	0	0	100%
ツルツルする	14	0	0	100%
ザラザラする	11	0	0	100%
カサカサする	10	0	0	100%
もたれる	8	0	0	100%
ショボショボする	7	0	0	100%
香りがする	7	0	0	100%
ヌルヌルする	7	0	0	100%
スベスベする	6	0	0	100%
ムンムンする	6	0	0	100%
見当がつく	5	0	0	100%
癩に障る	5	0	0	100%
キリキリする	5	0	0	100%
声ができる	5	0	0	100%
ネバネバする	5	0	0	100%
ベトベトする	5	0	0	100%

## 資料② ヲ格やニ格をとるものの意味役割と語彙リスト

格助詞	意味役割	語彙リスト(語数)
ヲ	対象	疑う、思う、確信する、考える、希望する、察する、信じる、信用する、推察する、推測する、判断する、見る、恨む、軽蔑する、さとる、尊敬する、憎む、反省する、評価する(19)
ヲ/ニ		祈る、気がつく、願う、望む、感謝する、同意する(6)
ヲ/ニ	対象+原因	期待する、諦める、憧れる、怒る、恐れる、敬服する、嫉妬する、心配する、同情する、迷う、喜ぶ(11)
ニ		あきあきする、呆れる(2)
ヲ/ニ	原因	焦る、驚く、苦しむ、後悔する、照れる、恥じる(6)
ニ		怒りを覚える、イライラする、ウキウキする、ガッカリする、緊張する、幻滅する、懲りる、白ける、焦れる、退屈する、ハラハラする、まいる、めげる、ワクワクする(14)

## 資料③ ガ格の類型と語彙リスト

	語彙リスト(語数)
「痛む」類	痛む、うずく、ガクガクする、渴く、キリキリする、凝る、ズキズキする、空く、チカチカする、チクチクする、つる、ヒリヒリする、減る、火照る、ムカムカする、ムズムズする、もたれる、ショボショボする、カサカサする(19)
「見える」類	見える、ひらめく、気になる、癩に障る、見当がつく、いやになる、聞こえる、鼻につく、目につく(9)
「匂う」類	音がする、香りがする、声がある、匂う、鼻をつく、プンプンする、ムンムンする(7)
「スベスベする」類	ザラザラする、スベスベする、ツルツルする、ヌルヌルする、ネバネバする、ベトベトする(6)

## 資料④ ヲ格やニ格とガ格をいずれもとるもの格の類型と語彙リスト

	語彙リスト(語数)
「ヲ/ガ格対象型」	思いつく、感じる、分かる(3)
「飽きる」類「ニ/ガ格原因+対象型」	飽きる、感心する(2)
「震える」類「ニ/ガ格原因+対象型」	震える、くたびれる、クラクラする、くらむ、ゾクゾクする、ゾットする、弱る(7)
「疲れる」類「ニ/ガ格原因+対象型」	疲れる、痺れる、ドキドキする、むかつく(4)
「困る」類「(ヲ/)ニ/ガ格原因+対象型」	頭に来る、安心する、ウンザリする、感動する、困る、ビックリする、ホッとする、悩む(8)

## 資料⑤-1 タイプⅠの格のイメージの型

格のイメージの型	語彙リスト(語数)
①ヲ格、ヲ／ニ格 対象型	祈る、疑う、思う、確信する、考える、希望する、察する、信じる、信用する、推察する、推測する、判断する、願う、望む、見る、恨む、感謝する、軽蔑する、尊敬する、同意する、憎む、反省する、評価する(23)
②ヲ／ニ格、ニ格 対象＋原因型	期待する、諦める、敬服する、嫉妬する、同情する(5)

## 資料⑤-2 タイプⅡの格のイメージの型

格のイメージの型	語彙リスト(語数)
②ヲ／ニ格、ニ格 対象＋原因型	恐れる、怒る、心配する、喜ぶ(4)
③ヲ／ニ格、ニ格 原因型	苦しむ、後悔する(2)

## 資料⑤-3 タイプⅢの格のイメージの型

格のイメージの型	語彙リスト(語数)
①ヲ格、ヲ／ニ格 対象型	気がつく、さどる(2)
④「思いつく」類 ヲ／ガ格 対象型	思いつく(1)
⑩「見える」類 ガ(／ヲ)格 対象型	ひらめく(1)

## 資料⑤-4 タイプⅣの格のイメージの型

格のイメージの型	語彙リスト(語数)
②ヲ／ニ格、ニ格 対象＋原因型	憧れる、迷う(2)
③ヲ／ニ格、ニ格 原因型	怒りを覚える、イライラする、ウキウキする、緊張する、白ける、焦れる、照れる、恥じる、ハラハラする、めげる、ワクワクする(11)
⑥「震える」類 ニ／ガ格 原因＋対象型	震える、クラクラする、くらむ、ゾクゾクする、ゾットする(5)
⑦「疲れる」類 ニ／ガ格 原因＋対象型	むかつく、ドキドキする(2)
⑧「困る」類 (ヲ／)ニ／ガ格 原因＋対象型	悩む(1)
⑨「痛む」類 ガ格 対象型	痛む、うずく、ガクガクする、キリキリする、ズキズキする、チカチカする、チクチクする、ヒリヒリする、火照る、ムカムカする、ムズムズする、ショボショボする、カサカサする(13)
⑩「見える」類 ガ(／ヲ)格 対象型	気になる、癪に障る(2)

## 資料⑤-5 タイプVの格のイメージの型

格のイメージの型	語彙リスト(語数)
②ヲ/ニ格、ニ格 対象+原因型	あきあきする、呆れる、驚く、ガッカリする(4)
③ヲ/ニ格、ニ格 原因型	焦る、幻滅する、懲りる、退屈する、まいる(5)
④「思いつく」類 ヲ/ガ格 対象型	感じる、分かる(2)
⑤「飽きる」類 ニ/ガ格 原因+対象型	飽きる、ウンザリする、感心する、ビックリする(4)
⑥「震える」類 ニ/ガ格 原因+対象型	くたびれる、弱る(2)
⑦「疲れる」類 ニ/ガ格 原因+対象型	疲れる、痺れる(2)
⑧「困る」類 (ヲ/)ニ/ガ格 原因+対象型	頭にくる、安心する、感動する、困る、ホッとする(5)
⑨「痛む」類 ガ格 対象型	渴く、凝る、空く、つる、減る、もたれる(6)
⑩「見える」類 ガ(/ヲ)格 対象型	見える、見当がつく、いやになる、聞こえる、鼻につく、目につく(6)

## 資料⑤-6 タイプVIの格のイメージの型

格のイメージの型	語彙リスト(語数)
⑪「匂う」類 ガ格 対象型	音がする、香りがする、声がある、匂う、鼻をつく、ブンブンする、ムンムンする(7)

## 資料⑤-7 タイプVIIの格のイメージの型

格のイメージの型	語彙リスト(語数)
⑫「スベスベする」類 ガ格 対象型	ザラザラする、スベスベする、ツルツルする、ヌルヌルする、ネバネバする、ベトベトする(6)